里見八犬傳 第九輯 七十

特別
A13
4304

曲亭主人編述

八犬傳 第九輯 下帙下 套中下

柳川重信繪畫

文溪堂精刊

N13 4304 18

(2001-320)

八犬傳第九輯下帙下套之中後序

智い知也。人生れて耳目の及ぶ所物として知ざるハなし。知るとハいへども其理を極めず。是を辨まるふ事ハ。ざれが。智の要と為さ也。格物致知ハ。則学者の先務也。雖然。是を知る而已ハ。慧ハ者い悟るふ由なく。才ハ者い智を致さ。故ふ智慧と云。才智と云。佛説ふ所云般若い智慧也。智と慧と具足ハく。悟るべく致さ。才と云智慧も亦大ハる哉。益智と慧と。相佐けく用を做さ。譬ハ人の身ふ魂と魄と有るが如し。魂ハ則心神也。魄ハ則神系也。人の心の欲さ所。魄の資助ふ。動ー足を運ー。動静云爲坐臥行止一も其如意るハ。智慧と才幹と相佐けく。善致さとも。是理をもて知ハ而已。然ふ智ふ上智ハ。耶智ハ。上智ハ。良善の事ふ用ひく。毫も奸悪の事ふ移ら。進退必度ふ稱く。動くとハいへども跌

ふぞ。是を賢才睿智とゝふ才ハ智の乖る者也是を以難一とも才ハ智ハ
則下愚ハ又邪智ハ奸悪の事ハ用ひて仁義の心ハ進むを知ハ退くを
思ふぞ。動くとハ人ハ害ハ奸民盗児の才あるハ是ハ或ハ又良知ハ心
正く博く学びハく奇才ハ命ハ用ひられぞ且勢利ハ附ふぞ富貴を
美ふぞ同好同志の友稀ハ但ハ色の聖賢を師と一友として隠居放言春
日秋夜を長しとせぞ常ハ書を著してハくみづから其智を龍ハ者ハ
元の四維貫中清の李笠翁是ハ唐山ハく云稗官者流
囲俗の云戯作者是ハ彼大筆と陋筆ハ猶白狐と野狐ハ
桂も柴も一勝ハ人見て並く狐と呼べども白狐ハ野狐の野ハ遊ぶぞ功徳を功徳
殊ハ多ハ然ハを柱ハ膠せる村学究ハ玉と石とを擇ハ或ハ那才を忌ま
或ハ彼名を媚む者其書言の出ると雖ハく毎ハ遮ハ眉をうち顰めて是ハの漢

かくの如く学問ハ章句を誦し子弟ハ教て真の道を
悟へざるハ只是意匠を費し紙筆を費しハく梓束ハ火しく世を誣ひ
俗を惑せる是憎むべ厭ふべと嗟くも間これハ是ハ腐亂の偏見而已
益博く学得く退く戯墨ハ遊ぶ彼大筆ハ作者ハ然ハ大凡経籍詞
章の学ハ和漢の先哲叮寧ハ注疏して学者を教導くハ世俗を皆
教を厭ふく空用の空言を欺び或ハ又奇を好て人の好を聴ハく欲ハを
ハく達者の戯墨ハ遊ぶを事を凡近ハ取く誼を勸懲ハ発し空言以塵
俗の惑ひを覚ま者水滸西遊三国演義冷山平燕両婚合傳の五奇書
ハ文章巧致至奇至妙其深意を推考れハ則齊諧を鼻祖として反く
三教の旨ハ違ふぞ釋氏の所謂善巧方便五百の阿羅漢二十五の菩薩
功徳ハ伯仲ま。とハふとも過くハとまべく。ハれども水滸の如ハ彼土ハ見眼の

者もよく其深意を悟るべし。況や此土の俗客婦幼の漢文俗語を一行も讀ゐるべくもあらざれば通俗解詁の一書ありて其書舶來して久しくなりぬ。彼も其趣を覘ふ由なし。只俗客婦幼のこゝろざしをさく戲墨を事とせるの名人達もよく唐山の俗語を讀ゐる。師とするや否を知るべ。吾其冊子を一卷だに取て閲せざれば。但作者の用心い寧勸懲の二字ふまゝ。然るを謠姓を上日とせる者時好ふ媚時好ふ稱ふ。書肆の鄙を賂せるい吾羞ざる所へ因て昨の非を知るよりあり。寛政文化の間ふ吾戲墨ある臭冊子て合卷物の画本ゆゑと恥ずべきものふそや。と思ふもあらば。然れども近曾い年ふ吾編次ゆる合卷物の本い新編金瓶梅を除くの外一書も新作あるとなければ。小利を欲ふる似而非書肆ども吾舊作ある物の本を次ふ再板をそ。画を新く。書名を更めるもあり更めざるも皆新板と偽の記て看官を欺く作者と世間如ふ考ゆるあり是ゆゑ心ぞや既ふ去歳の冬も文化中吾舊作ある賽八犬て。繪冊子の画を更めて次ふ飜刻して新板と偽の記あり。ゆゑ。吾是を詰りて新板の二字を削らせ然るを其書肆今茲も亦懲りずふ文化三年丙寅の春先ある吾舊作大師河原桂子話て。画冊子を又次の再板て本文の画を減。端像二頁を附增て。像賛をさ〻書加え詞書をも增減て画い舊刻ふ由らぬ事皆次ふ。是を新板と偽り記あり。を告る者あるふ。速ふ其偽を糺めて云云といへ。せかども素よりの利の為ふ理義を辨知る烏滸の癡漢。それ只強情を事として亟ふ美服甘と。空えて畢竟戲の冊子。それ。徒る僻事とせるとも久しく世ふ貼るべくもあらず。三十五年前の舊作。それ今の婦幼い欺れて新板と思ふもあらむ。又吾舊作ある物の本を。ひそかに藏ゆる壯佼達い。ゆゑ。必知るべし。然りと一時の瞋怒ふ乘て彼烏滸人の已が自恣傍若無人を

理義も廉恥も辨知らぬ。さるねく懲さん八大人氣ゐ。と思ひ棄てゐぎれども実ハ
是憎ゝ。彼も此も吾虚名を衒ひ知らる。戯墨人〻ゐ呉れい名聯をも誣て
賣らゐ。烏滸の僻事と見も笑ふ。本傳既ハ末三巻六回ゐ終ふ。
速ハ局を結びて四方の看官ゐ彼杣木樵る斧の柄の朽ゝを知せまく欲りも然
でも老眼衰眊して編述不ル意ゐ。これ戯墨の筆を絶ンべ。鄭ハ画
工佐藤正持ゐ武北の旅舍ゆく八大士を画ゐて贈り来せゐ題ゐる歌
根ハひとり葉ゐ茂いゐ露ゐ。まゐ花ゐ玉とゐる。栗と安房と同訓ゆく。
盧生ゐ夢ハ五十年。又吾戯墨ゐ五十年。只一炊の隙ゐで。嗚呼久ハ哉吾衰へ
ゐ。吾夢ゐ思ハ寐の腹稿将ゐ盡さまくゐ後序ゐ代る口状ハ老の諄言ゐ
ゐ〻ゝとそ。飽れやまゐむ已ゐ已ゐむ。

天保十一年陽月

蓑笠漁隱

本傳前板第九輯巻之自三十六至四十校閲送漏補正抄録

○三十六の巻 初丁右七行 小説傳記 記ハ奇の誤ゐ 當ハ傳奇作ゐ 同巻 初丁左六行 遺憾ハ遺の誤ゐ 同巻 二丁右十行 南柯夢 夢ハ夢の誤ゐ 同巻 卅四丁左一行 金時 金ハ公の誤ゐ 當ハ公時ゐ作ゐ 同巻 卅四丁左 徳用も堅削 傍訓のけハけんのけゐる 同巻 初丁左五行 李達 達ハ達の誤ゐ

○三十七の巻 初丁右九行 左纏の箍額 誤写ゐ 同巻 三丁左三行 喊聲 喊の畫 同巻 五丁右三行 旌を達 達ハ建の誤ゐ

○三十八の巻 三丁右三行 下聞 下問ゐ 同巻 六丁左九行 北魏八十餘萬 北魏ハ秦主の誤ゐ 是ゐ誤ハ甚

○三十九の巻 十丁左八行 天士 傍訓の 同巻 十七丁右七行 隣 隣ハ憐の誤ゐ 同 十九丁左初行 麻衣夏衣の誤ゐ 処ゐ

○四十九の巻 八丁左十行 老壯四個 壯ハ壯の誤ゐ 同巻 卅五丁左九行 親兵衛ゐ歸京 京ハ東の誤ゐ

この他聊ゐる。ハ畧ゐ。又云三十六の巻初丁右の七行ゐ見ゐる毛鶴山ハ聲山ゐるべ。と
一知音ハ。老眼衰眊校閲如意ゐ。作書の稿本寫本刻本ゐ。校訂の時毎ゐ婦
幼ゐ讀せて是ゐ。ゐくのゐ誤寫誤刀ゐ訂ゐ由ゐ。今般も訛舛ヨヌゐるべ。 再校抄録終

文淵堂藏

南總里見八犬傳第九輯下帙下編之中下總目録

巻之四十壹

第百六十七回　奔馬逐北犬　江籠暴雛禽
再戰場親兵衛會五知己

第百六十八回　衝突三陣靈豬奏再功
報答舊恩戍孝全前言

巻之四十貳

第百六十九回　拾山野坑親兵衛受賜
掃除風葉諸勇士立談

第百七十回　神藥施得敵兵再生
現八拔箭救水死將

巻之四十三

第百七十一回　操神變伏姫華猶子初陣
謁舊君信乃詳父祖忠義

巻之四十四

第百七十二回　定正水路行大兵
音音江中燒一船

第百七十三回　借數艘大角拄義武
建降旗豊俊愚定正

第百七十四回　萬里一水道節射朝寧
八百八人毛野麈大敵

巻之四十五

第百七十五回　南彌六顯靈祐子禮儀失時時有爲

第百七十六回　禍福反覆二士同功追兵屢逼忠臣拯主

右第百七十六回以上爲下帙下編中。以下爲共陸續刊行。當至結局大團圓云。

巻之四十六

第百七十七回　一顆智玉途懲一騎驕將四個保質反捉兩個保質

第百七十八回　有種雪恥復歸鄉黨大水陸濟度衆鬼

巻之四十七

第百七十九回　照文歸東房總ヲ福東西和睦兩國開津

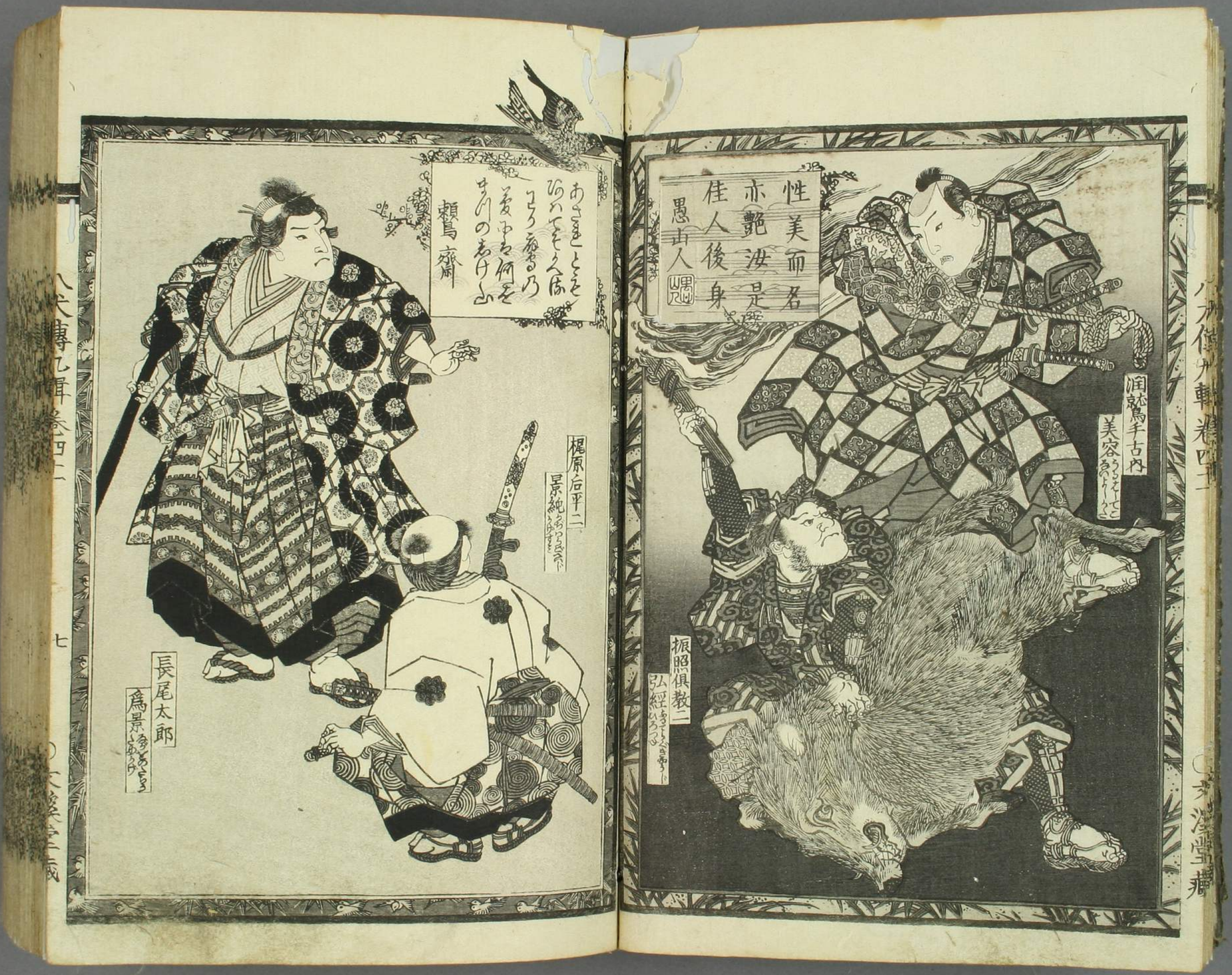
第百八十回　義成重賞功臣妻八女信隆還任舊城免罪過

巻之四十八

第百八十一回　孤龍貽化石丶大蟬脫八行反璧八行傳十世

回外剩筆　頭陀話説枕中四十八城稗史大成本傳二十七年

南總里見八犬傳第九輯下帙下編之中下總目録終


性美而名
亦艶泓是
佳人後身
愚山人
潤就鳥手古内
美容
梶原景二
弘經
長尾太郎
爲景

非是守命之鼠輩當爲知士之狗黨
信天翁
二四的寄合
五郎
須々利壇五郎
人物頭倡刀
沖の石を
ゆ
たゝ
のち
羊周人
三浦陸奥守
義同
三浦暴二郎
義武

臨難苟不
免尾礫場
片玉葱蘭
韮
蓑笠漁隱
河堀刀祢
かいてりとの
箕畠源兵衛
石綱
山鳩
やまと
里見次磨
義竜

里見八犬傳。一百八十一回。以多歲苦樂將盡稿。因而自贊曰。知吾者其唯八犬傳歟。不知吾者其唯八犬傳歟。傳傳可知可知。傳可癡可知。上傳以下十言讀以音敗鼓亦藏草以做良醫

辛丑孟春　七十五翁蓑笠又戲識

南總里見八犬傳第九輯卷之四十一

東都　曲亭主人編次

第百六十回　奔馬北ゐを逐て犬江衆雛禽を籠ゐを再戰場ゐ親兵衛五知己ゐ會を

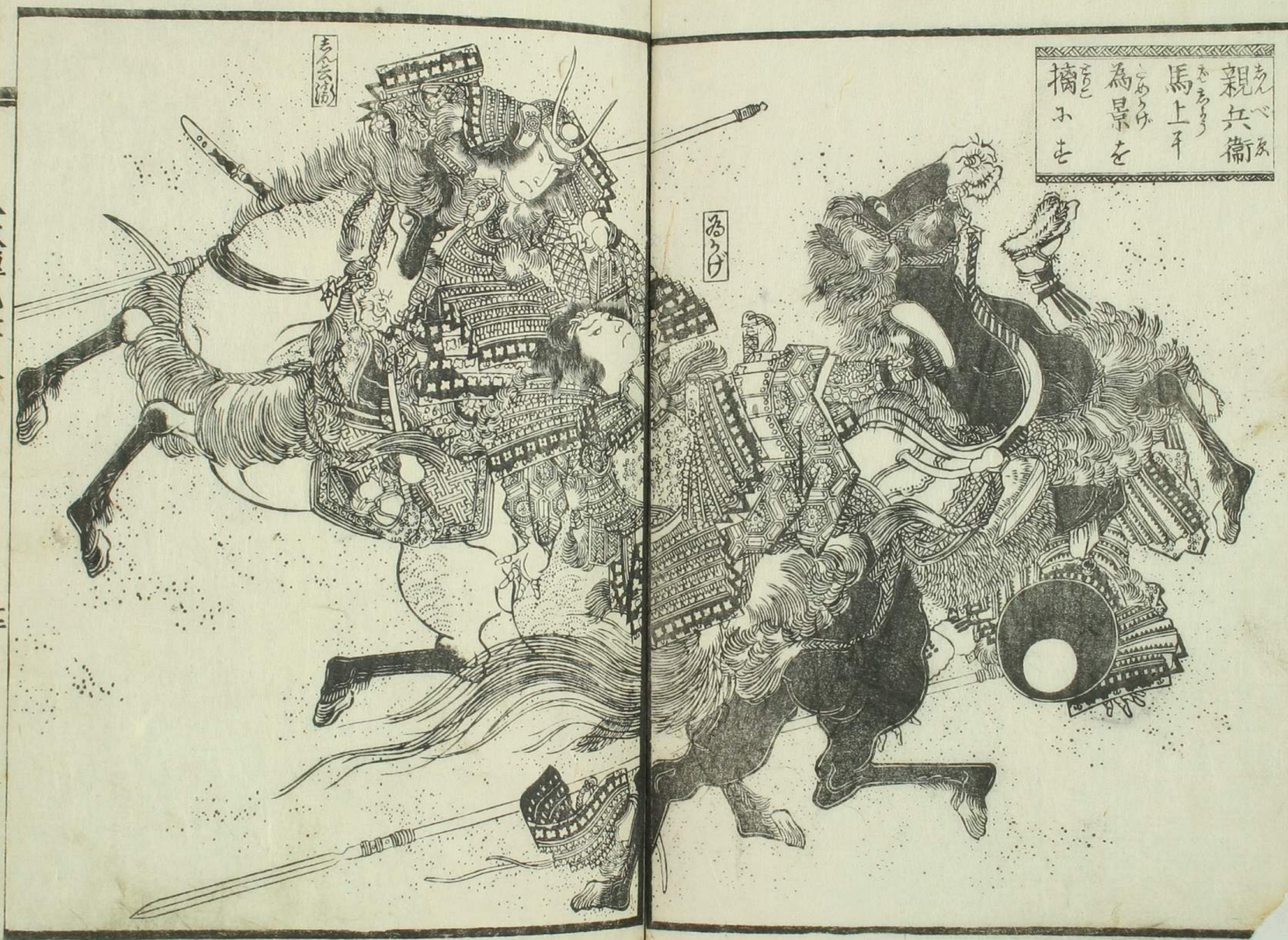
再說犬江親兵衛ハ長尾景春の堅陣を一瞬間ゐ殺頹ゐ。北ゐを透ぎを迂ふ程ゐ政木大全蛇雪代四郎直塚紀二六石亀次圓太越鄭三向水五十二太枝獨鈷素ゐ吉漕地吉助太犬江の賜兵ゐ及伴當ゐ至るまで勝ゐ乘なる勢ゐ劇ゐく皆後れじと相從ゐ義通の先鋒の頭人振照俱教二弘經も刀疵ゐ撓まぐ兵を找め。奔馬ゐ鞭を鳴ゐ〻けり。當下亦義通もみづから敵を迂ゐ馬を其方へ乘向ゐハ辰相忌ゐ走らせ來ゐ馬ゐ閃と下立て主の鑣ゐ推ゐて行ゐ料ざりける中途の劾敵閉戰難ゐ逮び折隊其名を守知りる政木孝嗣とや

饗庭文庫

らんの義旗の援けあり。是ぞ汎ぐ元幸ひなる。又思ひうけざり。京師より大江親兵衛が折ふくの地へかへり来る。然れども勍敵景春を伐敗走らせし是十二分の御利運ぞいなぶ。然るを飽き思食く。漫ふ逃るを赶ひ奪ぐ。窮貓狗児を凡破る。害ある事ぞ。量りなく疾岡山へ還らせ給ふ。意ふ長尾景春が其隊の兵をヨマくおそ這路條へ出く来あるは岡山の御陣ふ戍兵寡なく。他風ぞ知りく攻合まく欲せ去ぬいわむ那里は君の知召を如く。国府臺と相對ひく涯るふ剪斫河をもく蓋る要害の地ゆくいと。倘敵ふ据られるば臺の城も後竟ふ守りかたやいわむ。とく還せ給へかと。理り切く諫しかば。義通の景春の敗れまをり。赶も果さず中途より還んとの本意なりねど。豫父君の最命あるく。身の後見ふ隷られる家の老の諫言を聴ぎんいさぎゆく。信乃現八ぞふ閑戰の安危什麼と左ふ右ふ今も心ふかれども。現岡山を喪ふ。後悔其甲斐なきぬべ。と思ひ復して黙然なり。當下東六郎辰相ふ士卒を整歸陣を示しく。俱ふ義通ふ相俱しく岡の陣営ふ返し入るふ自家の刀瘡児ふ潤就鳥ふ古内を首ゆく。士卒ふヨマくとれあるとも皆幸ひふ窮所を外れく。死ふ至る者なりしば辰相則雑兵數十名ふ相早せく。臺の城へ遣しける。小程ふ大江親兵衛ふ自家の士卒ふ先ふ来る名馬青海波の蹄ふ信せて甚奮直ふ敵と赶ふと急るりけれ。既ふ迫ふ退ふ去れる長尾景春の一軍ふ大郎為景殿しふ五百個の士卒を領て。後陣ふ在り。今赶近つく大江親兵衛の小勢なると見くへて。冷笑ふく毫も謀ぞ枯芒花と深ふ処ふ銃ふの歩兵を両三名伏置く。敵ふ落さんと構くり。ふ退日の草伏とく赶来る敵の猛将勇卒を。敵ふ捕ふ為ると。親兵衛ふ蝕く猜れども。敵ふ臨まて今ゆくふ止るべ勢ひならぬ況や名馬青海波の疾と飛鳥ふ弥増れば。憶ふ近くる隨ふ那草伏の歩兵ふ枯芒花の裏より。火蓋を鑽て撞と發せる。鉄砲の寛ひ皆

錯く那身ふ中らぎ。怪ー蜚ぎ以ある哉八犬士ハ各身を衛る靈王あり然ばよりの時親兵衛が胸邊より怒然ーる靈光両三道晃めた出く那歩兵ぎの眼底射ければ歩兵ぎの憶ぎも吐嗟とだろふ鋲砲を捨て驚ぎ立つ程ふ五十三人素吉胞弟兄ハ俱ふ長械を挾ーく走りてゐふ来ふけるを親兵衛馬上ふ見ゑそ那奴ぎもと鏡ーみせそとゐふ早く五十三人素ふ吉ゐろ〻と長械を合せ直ゐんくゐ向ひ悍く勇る勢ひふ中るべくもあらぎれば逃んとせーを走らせぎ胞弟兄長械振閃めーく件の三個の敵兵と矢場ふ殴ぎ仆ーけ其間ふ犬江親兵衛ハ馬を敵中へ乗入れく群立つ敵の衆兵を鎗りて薙く薙仆を一騎の奮ふ男四下と拂ふく縦横自尊ふ駈破れば長尾の士卒驚ぎ怕れく憶ぎも逃走ぎ長尾為景怒りふ堪ぎ士卒と罵る聲も烈ーく獨馬上ふ親兵衛と鎗を合せく一上一下とゐを晝ぎ少年ぎれども猶勇ゐく堅を摧く本事ある武藝

足らざるふあねども然とく犬江ふ敵ーぎ汐んや鎗法漸々ふ衰へく既ふ危く見えーるぎ為景の老黨近習十名許返ーぎ主を援けて親兵衛と鬪ふんと競ふ程ーもあらせぎ政木孝嗣姥雪與保五十三人ぎ隊の乾兒の毎齊一吸と走り来り推隔相拄えく六七人ふ疵を負せ殘る三人を五十三人ぎ械の冴ゆぎ斃ーける當下犬江親兵衛ハ既ふ疲れー為景を刺さぎ一鎗ふ殺ぎ死を素より仁慈の本性ぎれば猶一霎時疲労せく怯むと汐ぎと横ふ拂へば為景ハ鎗を持ぎら馬より揮と共雑落されく俯平張りる蠢ぎく身を起さえと掙扎を親兵衛透ぎ馬上より鎗含直ー幹當りく為景の背を押えく毫も動せぎりー為景ハ面を赤らーつ耶と聲ふけく幾番欲反起まく欲ぎるふ辟言ぎ千曳の石をそ壓ふ措きーどくゆぎ喘も出ぎるふけり浩処ふ直塚紀二六ぎ漕地喜勘太以下ぎ伴當及五個の野兵と俱ふ走りくゆふ来ふければ親兵衛ヤヤと野兵を喚て頭


親兵衛
馬上平
為景を
摘ふせ
ろうげ
ちん六郎

りく虜児を指示せば殺兵多い唯々と応も果ぎ下界へ為景ふ縋ぎ索を
掛ふけ然び長尾の士卒们ぃ或ぃ殺され或ぃ落亡く四下ふ敵のあらぢるーぶ親兵
衞ぃ孝嗣次園太郎二ぢ志もあーで剰。五十三太素ゑ吉其毎さへ義通君ふ従
ひまろりく這戰場ふ在るを見て且訝り且欺びく。躰て馬より下ゑろ程ふ振照倶
教二弘經ぃ東六郎辰相の指揮ふ依りそ。一千有餘の隊の兵と新参の野武士二四
的寄舍五郎須々利壇五郎並ふ其従兵六十餘名と相共ふ又親兵衞と相援
んとく。今稍ゑふ歩ふけれぃ親兵衞ぃ孝嗣们ふ面談を先図ぢく。隨即倶教二
们を迎ぃ労ひく。却剛才ゑの地方ゆく。敵の殿の隊長を擒ふ做ぁー事の顛末を
箇様々々と告知せく。又ゆゑ。我隊より人の噂ふ聴ぃ知りぬ長尾景春の家子ふ
太郎為景と喚做ゑあり。少年ぇれども胆勇ゆく。武芸藝十二分の本事ありとぃへり。
意ふ今我生拘りくる勇少年ぃ必是為景ゑ。む和殿ぃ他を牽せ還りそぃの

義を以ゆえ上ゆぇれ我ぃ舊友政木大全们ふ料ぢも再會の情義を敬ーて伴ゆく
御陣へまゐりん景春遠く逃亡ぇれが這里ふヨヲ兵を益ん隊の兵を皆倶ー玉
ひ。とゆふ弘經敬服ーて且羞く答るゆ。車職ぢぃ和殿と昨今ぢ。對面ぃ今を
始ぇれども其武畧勇敢の今古ふ獨歩ゑゆりーぃ豫ゆーふ違ざりけ。和殿のこぃ
犬塚犬飼倶ふ是豪傑の士ゆく。萬人の敵とゆぃへ。其儔ゆゑぃ車職ぢぃ
手質の細人驥附の功を欲まりゆく。响の鬨戰ふ散ぢー。隊の兵亟ふ聚合ぢり
まゐば後の戰ひふゆるゆぇりーぃ面るーこぢぃ。
侶ゆゑぃ托て。遲参の罪をぢ謝ーふけ。當下倶教二又ゆゑ。今ぃ當所ふ要ゑーと
も車職が預ぢまりく。拘て來ふけ。隊の兵を送ゑく倶ーくゆ。上の御上日ふ
違ゑよ。似ゑ景春愛子の生拘れを守ゑば。堪ぎーて途より返ーまゐべ。
是も亦知るべゑば車職ぃ二三百個の雑兵を従ぇく。其生口を牽せそ退ゑんの

義を饒したまへかしと請ふを親兵衛ゆるさず不吉とよ閉戰の勝負は隊伍の多少に依るものぞ。機に臨みよく変に応じて其進むと脱兎の如く其退くと処女の似く未戰に安危を知る者は必勝ぎとなすとぞ。されども上の御意とあれば推辭まつらんは最も畏し。かくべ隊兵五百を留めく其餘は俱して退りぬ。されば上の御意に悖らぬ分れが越度なるかべと。諭さを俱教に強難て意其議に任せて精兵五百名を拔ぬて是を親兵衛に遞與し従せく。却孝嗣次圖太郎三五十三人素より吉们に名對面して今日の義戰を叮寧に労ひ謝あて且親兵衛に教びを舒くて儘為景を受合ひて隊の兵に牽せて隊伍齊整と馬とをとゝのへく暴河原なる岡山を投く退りけり。本程に大江親兵衛は猶恩ふ〜あれば野兵三名を召よせて事徒〜と吩咐れば皆ありあるく直走に葛西の〜を赴けける。徒く又親兵衛は喜勘太に吩咐て敵の棄る草裙を五六枚

拿よせて。亟に主客の坐を儲く。然而孝嗣們を請ひ坐らせて其身も坐して對面せ。登時親兵衛がの為に料らざりける政木主石亀師弟向水弟兄恙もあるぞと愛〜。就中訝しは政木主名三人の上べのみでもあるにあらず今茲四月某の日に和殿名三名は結城なる左右川橋を渡りも果ぞ敵の連發なる鐵砲に斃されて推流され欲沈む。後に求獵れども知るよしなければ我のみ〜で義兄弟名七大都て最惜く今に至て忘る時なし。館も少し召て最恭に御諚ありぬ。然は又我們八人は結城よりかつるさに故あて穂北なる落魄の宿所に居り程もなく館より、大師父を御使に稲村へ召さるゆゑ恩遇孰も浅からぬ。開ぎ中に我仁は京師へ使を奉て七月の下旬より那地に在り館の願せあり如く樹向は最も畏し。朝廷より我們八人に姓氏を賜りく金碗宿祢とされ徒過分に歎びあれば不測の憂ひなるにあらず晉領政元主の計ひ亨平して副使に参りくる蛮崎十一

郎ハ。身の暇を賜りて。我身ハ還るとて饒されぎ。伴當へけ。那姥雪代四郎史と
蜑崎の若黨直塚紀二六と。騎兵五名と若黨奴隷六七名。俱ハ京師ハ淹留
まく。前月廿四五日時候。まく同ト憂ハ沈まく在りーハ我両館の御盛德と諸神
諸菩薩伏姫神の眞助ハ依りてけん虎妖對治の功とのく。稍厄釋て主僕
皆還ることゑりーハ路ゆく愛馬走帆の病て客舍ハ斃れしが是ものの故ハ又
日ゝ費て。稍信濃路まで歩ける程ハ我君不慮の軍旅の風聲漸々ハ眞史て
鎌倉の両管領諸將を連ね兵を合せく安房上総を攻畧すもとハ事の趣
ゆえくぶち驚きて去向をいそぶ上毛より東ハ新関あて過ゆことを汲ぎ口
得間道を尋索めく今朝ハ武藏豊嶋ゑ千住河まで来ハ折鄙ハ稲
村の城内ゑ厩ハ繋ぎ在せる。れ此名馬青海波の苛くも河をうち渉りて這
方へ来ゑハ逢ーぶ訝りぶ思ひげゑ便宜ハあるれば。躍て這馬ハうち乗て。

千住河を渉る程ハ姥雪直塚。騎兵若黨奴隷の毎ゑ或ハ馬の尾ハ推り。
或ハ連枷ハ身を浮ーて。泅ぎく前面の岸ハ届ゑハ料らざりける小敵あ戰ひ勝て
降參の折其姓名を肇て歩知る。即野武士の頭領ゆく其里ハ待る寄舍五郎と
壇五郎ゑ原是當家へ歸服の情願あ。是ハよりて青海波の来歴ハ粗知り
ぶ一隊を從へく馬の足掻ハ倦せて心とゆく御曹司の御危戰の折ハ
騎着く勍敵長尾景春を芝拂ひ復這里ハ再戰の勝を汲く和殿ゑ五個の蒼鳥
識ハ再會の欽びあ我上ハ先かくの如ー和殿並ハ石亀師弟の再生ハ故てそあらぬハ
ぞゝハふぞゝと問ゑ孝嗣次圓大ゑハ側聞せ向水枝獨鉆ゑ隊ハ壯佼ゑも
又二四的頁々利の兵毎五百有餘個の軍兵まで皆駭然と古て卷く奇談ハ感嘆
きゝける。姑且て孝嗣ハ親兵衛ハ向ひくハゑ通愛ゑ和君の高運拙用自然ハ
稱ひ忠心義胆の致ゑ所神佛の眞助ゑ。但感心とハゑハ烏滸ゆく並く

敬服の外なし。就く我们五人の上へ。いつでも来る。四月の時候。俱ふ和君ふ従ふく。那日結城ふ届る時。和君の歩の速ければ。一町あまり後れつ。左右川とろ喝さる野水ふ架る。圮橋を渡らぬ程ふ誰とか知ぞ。発出き幾十挺の鉄砲ふ撃る。是ふけりと思ひ。のことへば次図太語と續て。身い水中ふ撃ち隠されて。推流されて。浜沈て。欲我ふもあらで。出たとへば。鯽三咱ふ。同容。是より後の。ふいも。哥ふ。是ふ説出ーねとのこつく。傍を見ふれば。五十三太含天。點頭て。却小可弟兄い関宿ふ船果ー時。結城へ伴と饒されれば。只得船を漕退けく。家路を投て。還るあらン。送憾さふ堪ざれば。家弟素ふ吉と商量さく。和郎いかふ思ふやらン。量義ふ。大江和子ふ値遇せとる。乾児们と共侶ふ。水路と上總まで送ふ。素藤とらさを対治せとる。戰場へ伴れぞ。僅ふ落人を搦捕く。賞禄ふ米と賜ふ。徒て入大江和子い友人三名と伴ふく。結城の法會ふ赴くと。ものくれ。我们又是を送て。

水路を関宿まで。出ふ。法會の伴と饒されぞ。勿論辛苦。錢べとそ。金幾枚。恵れーと。錢財い咱ふの本意ふ。俗器維の戰場。菩薩の法會。其伴ふ。省れて。阿容ふ。とーてかふいるん。恥赫変ー。此事ふく。乾児们ふ。悔られ。我聞関宿ふ柴船の結城へ。暢ふ小流ふ。急流ふ。廣ふ。其地々の荘客ふ。用水ふ。ふ。のこふの故ふ。巨舫い。漕容ふ。とふ。ざれども。幸ひふく。今日我船い。快船ふ。易ふてんいで。結城へ赴ふく。躱れて。法會を見て。退ふ。去の。議什麼と。談ざれば。いへば。素ふ吉語と。續ふく。小可是をうち。听ふく。弁を最要ふ。主張ふ。和子ふ。知れて。叱ふ。とも。分説いふ。もあらん。然らば。又。蜘く。遺復せとく。猛可ふ。舵と。合ふ。東ーて。又。関宿へ。漕戻ふ。程ふ。既ふーて。日の。暮れーふ。口ふ。得。那里ふ。船と。歌ふく。其夜。明ふと。俟ふ。とへば。五十三太。却。听ふ。低而。次の。日の。早天ふ。那枝流へ。船を。漕入れく。結城を。投ふく。沂ふ。川幅ふ。と。陜ふく。流急ふ。れば。船。薦ふ。ぞ。或い。左右の。岸ふ。繁

ヲ立る。樹の枝ニ掩れて去向見えざる処あり。或流浅く船涂くく。竿を使ふ事
此処あり。其頭に素戔嗚吉を岸ニ渉せく。船を曳せく溯るに然れども猶蔦に折る。
弟兄水に下立く。船を肩擔ぎく幸くく。推のて遣る三幾町あり。低る辛苦ニ
時稼りく。日長に四月のかゝる。結城へ尚三里もあるべくんと思ふ比。日影既に斜に
なる。心連りに焦燥ども。其頭に特に流狹くて。せ網もあれ折るに。三見れば人の浮屍
骸一人。弟兄三人共。船に歌くく流れもあへず。噫忌々しと。呟くく竿のて突流さ
まく欲すれ。細流なれば遣も反らぬ。只得丈素戔嗚吉に。喘息ぐら。淵に下立て竿とりて
其死骸を突流さまく。程ニ忽地一聲苦と叫ぶを。小可怪く驚くに。衣を
脱捨て下立く。又其浮屍骸をよく見るに果して是政木主と石亀屋の乾父
乾兄。誠しくも亦痛まし。相識達三人共。徒る横死に胸潰れて。さてもくとだ
くに小可も亦なく。三個の屍骸を左右まく。皆船へ曳寄せて見れば。孰も身

體に銃瘡三五所。あるに。孰も猶幸に。面部胸腹なども。窮所にあらず。只是脚
脚のみ。然る故に。三人倶に死しなるべく見れども。胸膈は温く。推れば動脈
似る。原来はまだ死絶ざる。疾水を吐せよとく。一個々々に艇へ推担て。倒にして腹を
推に。孰も多く水を吐きあれども。氣息なし。登時小可素戔嗚吉と商量を
るに。この人々は昨日関宿にて相別れしに。大江主に伴れて。結城の法會に赴けば
んに皆痍を負ふく。水に陷りしは。必是故なるべし。我意に。今日那里に不測の
禍鬼起るとあり。聞詩に及びし。倘果して。かゝる事に大江主の安危心許なし。
然べとて。這九死一生なる三人を。いち早く。陸を走りく。結城へとも。只其安危を知
るのみなく。鄙語に云。喧嘩果なる。杖三昧に。あるなれば。事に益なるのみ。反て大
江主に恨られん。所詮船を漕戻して。宿所へ送りて。この人々を活さば。結城の安
危を知れば。女々なりのと思んや。とひて傍を見れば。素戔嗚吉詞を受接て。愚

見めて間中準乗し艇く船と漕戻まふ急流の降舫其勢ひ剣ふ似ぎ射
箭の如く又蛇ければ其瞳氏皆ふ関宿まで戻りり猶も力を勁せく通宵漕のく
ゆく程ふ其詰朝両国河原る宿所へ帰着ぬ〜ば政木主们二人の為ふ醫師を
招ぎ療治を請ふく膏薬を打せ傷剤を薦ふ死も果ぎ活もせぎ。あの比又ふ可
悄地ふ結城へ赴ぎて和君達の安危を拷るふ那里の風聲隱れもあらぎ那一疋寺の
悪住持徳用結城の家臣長城枕介惣利堅名衆司經稜根生野飛騨大素
頼们ぎ法會を乱妨の事且件の僧俗奸虐人们ハ皆八犬士ふ撃懲され。恥と
曝せり。又八犬士と、大庵主ハ反く結城殿ふ参られて那里を退りのぬ〜ゆ〜ぎ
ゆく。かの大庵主ぎ比ぎ政木主石亀師弟ハ共ふ厳く痊可よ赴くあら。撃れ脚の
筋縮りく起居不自由ぎりければ垂龍くのを在〜りとふを平二太又續て倦て
二伏の夏過く。秋八九月ふぎり〜時候安房より来る商船ふ八犬士達の上況

詰問ひ〜ふ今〜も八人ぎ。里見殿ふ仕まく。滝田の城内ふ在り。中ふ大江主ハ七
月の比使を奉りく京師へ赴ぎぬ。この時二個の客人達ハ舊疾皆ぎ癒
く愈くぎ脚自由ふ走行も生平ふ異ぎるぎりのぬ〜ば咱ぎ弟兄折々薦ぎぬ。
安房へ赴ぎく。里見殿ふ仕ぬ那里ぎ大士達の在るぎれば事成ぎべ〜とのみ。政木主
も石亀叟も倶ふ云云と意表を演て従ふべ。もぎ〜ぎ非如幾ぎ。我家ふ歌船
ゆく在りとそも开ぎ獻〜ぎふ〜ねども素より富る我身ぎ〜れば銭ぎく米ぎく做海
折々ハ反く這個の客人達の盤纏て貴〜米と買せて養ぎ日もヨ〜ぎりぎとふを
考嗣咳〜て禁めく親兵衛ふ告ぎ。我们二名ぎ薄命ぎ且再生の事の顛
末ハ日今〜這弟兄ぎ口状ふ具ぎりぎ然ハ是ぎの趣をいぐぐ和君ふ告ぎぬと思ふめ
かり夏果ぎりぎで痊愈ぎれば筆も把られぎ又七月の比より狩和君ハ京師へ使〜く。
安房ふ在ぎと雖ぎ〜ば歸藩の便宜と待のぎゆく。向水ぎりぎ義侠の幇助ふ我

のことをぞ石亀殿さへ心ゆもあらぬ長逗留しく。做まゆもるくありけふ今番里見家
危窮の軍役敵い則扇谷山内の両管領ゆく大軍水陸より攻伐ゆくまと
云檄文を市ふ掲げく隠もあらぬゆえ〜ゑ咱ゆいちも石亀殿もちも驚ゆく
人ふ問へゑ和君い京より還れりやいまゆるやと誰もかも知らう絶てなるーふ本月の
五日ふ至りく扇谷の間諜見の安房より帰りければ
五十三太隨即他を哄誘して両敵の必事を探るふ犬江玉い京よりのまゆ還ゆ
ふの他犬阪い軍師ゆく六犬士い防禦使ゆ寄隊い則箇様々々と水陸の隊配を
呼ゆ説示さるふ国府臺の寄隊の大将い山内顕定主と足利成氏主と両旗も
副将い山内憲房主ゑ両隊の軍兵六萬餘騎実い四萬有餘ゆべ。今朝あを
五十子の城より發向して亀蛯ふ陣をとりしーとを咱ゆいちの義を偽ゆて猛可ふ主人
弟兄と石亀師弟を閑室ふ聚合く密談あるゆう那犬江い我恩人ゑ仇ゆふ

京師へ使して今番の大事ふ逢ぞるゆ朽惜く思ふべゆうん我今那人ふ成ゆ代
ゆく里見殿の御為ふいくゆ一臂の力を盡して那恩義ふ報ゆ〜ゑ恁いへゑ扇谷
殿い是我舊君ゑ既ふ恩怨地を易く雖言敵ふ向ゆ弓を弯ゆ
前を飛さえい我本意ふあらぬゆ国府臺寄隊の大将顕定父子と成氏主
ゆい我禀ゆる恩ゆく義もあゆ況や国府臺の城ゆ里見義通君大将ゆ防禦
使犬塚犬飼ゆ城を出て寄隊の大軍を逆るとふ事ふ然ゆ尤便宜の地ゆ
先ゆ那里へ赴ゆて時分を料り変ふ応じて里見を援けて寄隊を敗らんゆの芝什
麼と談されい石亀師弟向水弟兄悦び勇ゆて他議ふ及ぶゆ主人い惜地ふ乾児
義子ふ徇示ゆく集合ゆふ僅ふ半日許の程ふ来會ゆ自家の壮佼六十餘
名ふ及びけゆと告ゆる次国大受續て却小可い越路の市人悍く勇ゆる物部の八十
宇治河の瀬ふ立ゆ小ゆ時ゆ角能と好ゆて老ても侠氣耗れゆ始い大田犬

川主に知られまゐらゝ歎びあり其後淫婦奸夫に誣られて身に罪なき罪人に做
ひて牢獄に繫れゝに鄭三がもちもの犬阪主の赦ひを乞く罪を免れ歎びあり
其後又両國河原なる御身に値遇ゝひしより政木主と共侶に館山の城攻まも又
結城の法會中も伴れる歎びありゝに左右川橋も必死の大尼向水に弟兄の資助ふりて
再生の歎び四度に及べども安房へ行もゝ御身に格另大田大川大阪主ゆを
告ざりゝに今政木主の云云と陳ゝ情由をいらで饒さぬ人と倍話まゝ
亦鄭三も舍る旦誼と孝嗣に推禁めて又の夢に大江主ゆの我両敵の勝負を覩
ひに昨日まで闘戰互角の中なれども這曉に至りて寄隊の三將戰車を焼まて
敗績あると告る者あり分る長尾景春に那三將の隊に附き今朝ゝも猛に
旗を建て岡山のうへに赴くを我ゆ知りて思ふに景春一箇の隊兵をもて岡山の
かへ推寄まゐる那里の空虚を覘ひ知りて攻奪まくと欲まるゝん倘那里を奪ひ

畧れる臺の城の大害に悄地に後に跟て彷徨機に臨て轂破らんと思心を
我衆に告て悄地に引て來れけるよ豈計んや義通君の一軍い中途に景春に相
逢ふて他兵を雜へて野戰あり里見の士卒勇るに引ねど景春も亦然る者な
れば風く士卒を二隊に分て義通君の備在を其隊をみづから轂ゝ鬪戰
難義に見えゝば咱る孤軍の壯佼們をりて景春を相拄えて力戰時を移せ
かども我隊兵ち俠客のみを軍陣に熟ける者多く且戎衣も器械も真物真劍
なるされば勝を合ると難ゝに折よく和君の馳著あり一瞬間に景春を敗て
走らるゝ中に上に再戰の獲さへありけるい我黨の及ぶ所雲と壤と異なるを感
服至極に祝せば代四郎紀二六們野兵伴當いへばゝ寄舍五壇五と其
隊の兵ちい耳新に心地ゝ之の人に上して這友あり寔に久しくと云ふ者なるを
當下大江親兵衛い甲乙の會話をつらくと聞果て且歎び答るゝ命芽出しに和

殿等の再會。我のみ今で大阪大山大川大田自餘の大士も鈴び必等しかるべ。以ある
哉政木主は是忠孝の俊傑。又石亀の義俠ある旦鄭三が其師孝順ある又
五十二太素ある士ゞ善ふ與して任俠ある積善餘慶の天助虛しからぬ。或は縲紲の
寃屈ふ陷れらまゝ。白刃頭ふ落むといへども。或は不測の敵の矢丸ふ斃されて。志河ふ
陷ちといへども。其死を起し生ふ回まふ及びて。ひとりく甲を殺せ丙をして丁を援けしむ。
因あり縁あり同忠同義造化の默契妙ある哉政木生は曩ふ我が素藤對治の
日ふも戰功あり。只管奉仕を薦めしかども猶云云と意衷を演て從ふべもあら
ざりしふ今日は又咱等ふ代りて。御曹司の危ふ救ける野戰を援けまゝて勍敵長尾
景春を防ぎ禁め。掙に実ふ一人當千之矧又石亀師弟向水枝獨鈷第兄
ゞ其徒と共侶ふ政木生ふ從ふ。當家の為ふ忠戰い始あり終ある其舊縁を
推をとにへ。ゞ仕へぎとふといへども。皆是里見の家臣ふ同じ由の是を以ゞ上ゞ。

御曹司いまゝ。両館（義実義成を云ふ）御感大ゝ。ゞで因忠祿子孫ふ賜ふ。ゞ
賀をべ。賀をべと連ふ感嘆ゝ。沿処ふ鄕高ふ大江親兵衛が野兵五名ふ吟
味ゝ。敵の去向を見て來よとゝ遣しけ。其兵五毎走りかつ來ゝ。跪居て親兵衛ふ
告ゞ。小可毎ふ命せられしゞ。敵將長尾景春が敗れ走り。迹を尋ねて葛西の
方ふ赴ひふ。景春は戰ひ敗れしより北走ると遥ふ。ゝ多ふ旗を建て。散ぬる
士卒の集ゞを待ふ一雲時の程ふ皆聚合ゝて其兵又三千有餘ふ做りゝ。有徒一程ふ
其子為景の殘兵の數を漏されゝ。幾名狹逃かつ來て事徒々と告ゞ。景春は聞ゝて
驚ゝて且怒り且怨ふ堪ぎ隊長ゝ直江宇佐美梶原樋口等を遽しく召近つけて為景の
ゞ箇樣々々と告知せて且ゝ我憤ふ獨立の志ある故ふ山内の隊ふ隨ぎ獨岡山の壘を襲
ふて臺の城を拔ゝく欲ゝ。計較風く齟齬ゝ。乳の臭毛ゞる義通ふ戰ひ負ゝるのみゝ今番
為景は初陣ゝふ漫ゝ血氣の勇と負ゝそみゞゝ殿ゝれゞて。那小猴子犬江とも

らゞ辱ふ値ふけゐ我子と敵ふ虜ふせられて阿容々々として恁くのゝあゝべ許我山内ふ奚れん先や今亦推寄せゝ犬江と殺して義通を捕へて怨を復をふゝ生く二ゝび還るべゝぎゝゝくせよと敦圍に暴く軍扇をのく膝うち鳴ゝを臂を張り眼を瞪ら連りふ焦燥ゝ威勢ふ隊長毎ゝ諫難て猛可ふ下知を伝へゝ馬ふヨヲく豆草と飼せ士卒ゐ皆腰戰飯を使せて急ふ人馬を調へけり却小可ゝ敵の雜兵ふうち雜りゝ景春の身邊ゝ紛れ入ることゝゝ具ふひしと詞ひとく注進ふゐゝと親兵衛ハさもあるあり。とだら答て頷くのを騒ぐ氣色ハゝりけり。

第百六十八回

三陣を衝突して靈豬再功を奏を

舊恩を報答して戍孝前言を全うを

登時三個の覇兵ゝらゞ景春二ゝび推寄せゝべーとふ注進を側聞せる姥雲代四郎以下の衆兵直塚紀二六漕地喜勘太石亀次圓大越鮒三向水五十三太枝獨鉆素ゐ吉須々利壇五二四的寄舎五郎ゝふ至るゝゝ皆愕然と目を注ゝ胸安ゝゝぞ思ひける。ゝが中ふ政木大全孝嗣い敢驚く色もなく徐ふ親兵衛ふ向ひゝふゝ浅智の論辯助言ふ似ゝ憚りゐゝ仕ゐゝ敵い敗られて再取ゐゝ猶三千の雄兵ゐり自家い僅ふ五六百ゐる而も疲労れ士卒をりて怒氣奮昂始ふ倍せる敵を逆へゝ野戰せゝ恐らく勝と難ふべー誠ふ愚案ふいへども奴ゝ者い誘ひ易ゝ今奇兵をりて他と征せゝ一戰必勝疑ひなふべー這頭ゐい繁枝ゝる冬樹の蔭ゐり今在下ふ隊兵と分らゝ二三百名を授けゐゝ埋伏して敵と敗らゝゐの毛甚麼と請問へゝ親兵衛頭を歌けて其策を示ふゝ絲ど吉の聖王の不從を征ーゐひーを思ふ正路ふ就ゝ奇兵をりてせゝ湯の桀を放ち武王の紂を誅ゝ如ゐい王者の軍とのひつべー然ゝ後の世とふとへども賢君有道の正兵をりゝ那乱虐を鎮るふ方てい亦當ふかくの如くゝべー我嘗富山ふ在と

云時姫神授與の陣法あり孫子の八門道甲の陣是なり蜀漢の諸葛武侯よく
あの陣と布設てりく昭烈の危窮を救ひ〻べ那里の俗い是を孔明が八陣とも又
八卦の陣ともいへり其陣法い箇様々々と即地ふ畫をく孝嗣並ふ頭人等ふ
教示をく又ふ今あふ在る隊の兵を振照俱教二の分ち一者五百名五十三太が
従類六千名二四的須々利の従兵六千餘名都て六百二四十名なるべ〻今是を八
十餘名づ〻八ふ分ち八門を守らしむべ〻這一門毎の隊長い政木生姥雪曳を直塚
須々利二四的五十三太素ふ吉と我と八名を足れりとを其進退ふ我這軍扇を
のく指揮せん皆よく我ふ従ふく景春を擒ふ走べ〻景春倘あの陣をよく知りく
東方生死の門より入りて北方五鬼の死門を突破り又生門より出るべ〻其開戦
互角なるむ他知ぎして死門より入らば囊の物を探るが如く必一人ぐも漏ぎらば或又
景春あの陣を知ぎとも他も亦然る者なれば其機を査し且疑を戰ぎして退らば
只緩やふ是を迂ふべ〻必急ふ追撃らべ〻他我迂ふとの遲を見ぎ驚燥く
急ふ反し合せて二七二十一ふ突りく蒐らば胡意輕く戰ふ〻詭り敗れて走べ〻却
我五個の野兵と喜勘太郎の伴當の始より是を八陣の備ふ曾いく各銕砲弦
椎乃く這頭ふ故りく並松の中枝ふ躲れり登の居て敵の進退を張ふべ〻倘我後案の
如く景春八陣を突ぎして反て我詭りて敗れ走るを迂ふてあの処ふ至らば遣り過して
後陣なる敵の馬を撃ち仆しね景春是ふ撃ち仆しね景春是ふ撃ち仆しね
其乱るを攻撃ふべ〻勝ぎとふとあべ〻大家あの意を汲よかと言叮寧ふ説示せば
衆兵都て感服して指揮ふ従ふぞ中ふ孝嗣い殊更ふ親兵衛が宏論智計ふく
まく敬服して かの如き少年い和漢今昔一人のを後の世も類あるべ〻と感して敵を
俟ふけり介程ふ長尾景春い二ゝび犬江親兵衛と死戰して檎ふせられ其子為景を
こう復さんと思ひ惴れる怒ふ堪れば亳も擬議せぎみづから真先ふ馬を找る左ふ樋口

小二郎維龍あり。右ふ梶原後平二景澄あり直江荘司包道と宇佐美三郎職政ふ。其後陣を繕ふる軍兵約二千餘名。天を掩ふ勢ひを。故の戰場を投ゝ返し。あ多ゝ為景が事あり。しかは這里へけりと。ゆゝく隨ふ景春ハ馬を駐めて。こゝれい敵いまゝ退くゝ。一町許前面ふあり。隊長ハ那大江ゑ。我又推寄来ゆゝと。ゆゝ知ゝる狄布儲ゑ陣の光景最奇くあゝく。數ゝ所ゑ。ゆゝ其為体八方ふ八流の旗幡を建て其下ふ軍兵ヨヨくあり。壁ゑ八箇の陣門ありて。開閉時ゑく。四方相當り四隅ゑく守ゑゝ如ゝ。但隱々として雲霧の其四下ふ起升ゝく。推包むゑゝあゝんとゝ怪しまる。景春見ゑる。こ稍久しゝあゝ。忌ふ左右を見ゝゝく。景澄維龍ゆゝふゆゝ。若ゝ他をゝふ恵ふゆゝ。我剛唐山古昔の陣法ふ諸葛孔明ゝ八陣あゝ。ゝゝて何ゑゆゝ我ゆゝ学ゝゝゝ。其八陣ハ攻伐ゝ者生門ゝゝゝゝ。ゝゝ出ゝれゝ必失ゝゝゝゝ。那陣這ふゆゝゝゝふゆゝ。縦八陣ゑゝゝゝゝ。那八犬の奴ゝゝゝく幻術を紛ふゝゝゝ今厭

勝の法をゝゝ。漫ふ數ゝ。他ゝ圏太長ふ。掛ゝゝゝ。ゝの故ふ我又憤ふふ。今戰ゝゝ退ゝ。敵ハ必隊を乱ゝゝ。迂萬ゝ數ゝゝゝ。其逼ゝゝ引受て。自家急ふ建更ゝて推包て。拗ゝ。他ハ小勢ゝ。那大江奴ゝ。擒ふゝ。枝ゝ果実を桃ゝ如ゝ。又蛆ゝ後陣へ。ゝゝ。と。自畢春蛆ゝて。説示ゝ。景澄維龍感佩して。隨即包道職政ふ下知ゝ。ゝゝ後陣ゝ。退ゝ。引返ゝを。親兵衛見ゝゝ。笑て。然ゝゝゝゝ。思ゝゝゝ。景春果ゝて。我陣ゝ。疑ゝ。是ゝ數ゝ。又徒ふ退ゝ。必我隊ゝ。乱ゝて。迂逼ゝゝ。數ゝゝ。為ゝゝ。隊ゝ。乱ゝ。徐々と。是ゝ。迂ゝゝ。敢逼ゝ。間近ゝゝゝ。ゝゝ五十三大素ゑ。言。乾児們ゝ。倶ふ。罵ゝゝ。笑ゝ。小石ゝ。抓ゝ。擲ゝゝ。景春見ゝゝ。怒ふ。沼堪ゝ。那奴們我ゝ。怕ゝ。ゝゝ。近ゝ。迂ゝ。數ゝゝ。侮ゝ。遊ふ。投石ゝ。昧ふ。那期ふ至ゝゝ。疾駈向ゝ。衂ふゝ。兵毎返せと。喝ゝ。乗ゝ。馬を。推旋ゝて。鎗挾ゝて。敵ふ向ふ。景

澄維龍ハ性ゝ端雄の壯佼ゝ近習外様の差別ゝ俱ゝ怒ゝ堪ぎれ叱と畫て駈向ふを政木孝嗣向水枝獨鈷須々利二四的其毎も共侶ゝ敵と拉えて且戰ひ胡意敗れて乱れ走れば親兵衛代四郎紀二六ゝ猟場の獣の列卒縄を踰ゝ如く馬ゝ鞭ち足ゝ信せて逃走ると景春ゝ猶漏さで兵を找めゝ息ゝも艱れぞ那里ゝもと赶ふ程ゝ後ゝ响く敵の銃音連發てる程ゝもわゝ長尾の騎馬武者五六名斃れて人馬共侶ゝ象棋倒ゝ是ゝを驚く諸軍兵将帥士卒並て皆胆を潰ゝ吐嗟と叫びて謀ゝ乱ゝ癖れ後ゝ敵を見も定めで潑と頽れて逃走れば豫期ゝ外ゝ犬江の隊の兵齊一咄と執て返ゝ中ゝ任て斃ゝ仆せば敵いよゝ度と失ふ虚滅ゝ馬ゝ踏まゝ果敢ゝ命を殞ゝヨヌゝ開ゝ中ゝ樋口小二郎維龍ハ性ゝ王将を延さと思へ一騎敵ゝ中ゝ鎗の尖頭ゝ血を濺ゝ力戰ゝ時稜ゝ先途と挑ゝ政木孝嗣遥ゝ見て適敵やと嘆賞ゝ鎗挾ゝ走ゝ来て名告かけゝ刺んと找めば維龍鎗をゝ振ゝ扱て馬を馳寄遣差ゝ一上二下と挑ゝ戰ふ迭の武藝劣ゝ優ゝ他雑もせで死を爭ふ勇悍對応せざるゝあれど維龍ハ數度の閧戰ゝ疲労れて眼や眩けば孝嗣ゝ内の鎗ゝ拂ゝ逞ゝ鎧ゝ透ゝ刺串れて馬より摚と落ゝ孝嗣ハ其首級を捕ぎゝ馬をのゝ分捕ゝ牽駐めゝ引棄ゝ猶も敵ゝ対ふ赶ふ程ゝ長尾景春ハ乱れて走る自家の士卒ゝ禁めも共侶ゝ馬の足極ゝ信せゝ脆くも二ゝび敗績ゝ来ゝ須々利壇五郎二四的寄舎五郎ハ下の野武士十人許と族族と赶蒐ゝ来ゝ喚禁め罵辱めて推捕籠て斃んと競ふを長尾の近習五六名返合せて防ぎ戰ふ音も劇ゝ剣戟鎗棒寡ゝ衆ゝ敵ゝ長尾の近習ハ痍を負ぬゝ二人ハ寄舎五壇五郎の鎗ゝ縫れて仆れゝ景春怒ゝ堪ずて馬を馳入れると下を鎗尖鋭ゝ付れば只ゝの一騎ゝ駈乱されて痛痍ゝ仆ゝ者ヨヌゝ

さて。寄舎五郎も壇五郎も。倶に景春に中り難く。或は肩尖高股を刺れ。殿内坐に仰反り。浩処に政木孝嗣。蛯雪與保直塚紀二六石亀次圓太越鄭三里見の士卒四五百名と。倶に景春を赶蒐て走り。近づく多勢の敵に免れじと思ひ。折から直江包道。宇佐美職政。残兵二百餘名を率て。主将を奉して退く。推蒐る敵を受禁て入乱れて戰へば。景春の今は虎口を。士卒に譲り。退いて馬の端を休る程に。梶原後平。景澄も。残兵二十名許を率て。主を奉して退く。景春を見て身邊近く。馬を馳せ礼を做て。詞急迫に諫る。思ふに似ざりける。今日の闘戰機を失ひて。郎君擒に遭ひ。君亦陣歿ぬ。長尾の家は断絶せんとの義を思ひ召されぬ。卒なれ伴住ん。と。云も訖らぬ鞭をあて。景春の乘る馬の尻を礮と撻く。馬は撻ぬ。蒐直に。葛西の方へ走りゆく。後方に従ふ梶原景澄。残兵無も共伯に背後れじと走る程に。又赶近づく敵兵あり。是則渕人。大江親兵衛仁。向水五十三太と。枝獨鉆素。吉其隊の壯佼數十名を従へ。連の馬を走らせ。景澄只得残兵を留めず。敵を防ぎ。是より主従僅に二騎。行る馬に鞭て逃るを。親兵衛仁と見て。他は必景春なんと思へば。敵の残兵と五十三太。任せて這ふ輩を見ては。馬に拍れ敵中へ無入れ。又馳脱て遥に延る二騎の敵を。走らせじとて赶蒐る。馬は名に負ふ青海波の駿足。気は射る箭の如く。一瞬間に近づく。隨ふ四下に。鳴く聲震立て。景春返せ。仁を。と。大江を知らぬ。蓬一返せと。呼ばり。鎗を拈く。馳る。然も勇士の威勢に中るべうもあらざれど。景澄は主を殺せじと思ふ。心を鬼にして。只得馬を乘施して。矢聲を發て。親兵衛と。鎗を交へて。戰ふ程に。景春は大江が本事を既に是より知りぬ。勝とかと思ひ。今景澄は他と戰ふ。不吉やと見もくるまで。走る馬に鞭て中て。命を涯に。落しける。小程に。梶原後平。景澄は大江親兵衛と戰ふ。こもごもに。八一。ぎて。腕衰へ。鎗法乱れて。既に危く。做り

方を索ぬそ料らぎまくふ来よければ今景澄が敵と閉戰の危殆を見て立毛を擬
設ぎ馬を馳寄せ相援けく挾そ敷まくまくふ親兵衛い物ともせて精神まそ
ちま加りく右ふ中り左を拂ふ神出鬼没の嫖姚ふ景澄泰儀驚怕れて倶ふ
引外ー馬を退けく鐙を鳴らーて逃走らまると親兵衛い猶逃さらとそ心とも
ぬく自家の衆ふ離れて迫ふ葛西るる冬枯野邊まで赴ふらける。話分両
頭。その朝犬塚信乃犬飼現八杉倉武者助田税力助ぬい寄隊の三將
頭定成氏憲房の總軍既ふ敗績ーて乱れ走るを赴蒐まく葛西るる假名
町より平里許這方る林原の頭ぞ又寄隊の三將と再戰の事の趣い既ふ前
回ふ見えち然ば信乃们ぬ僅ふ二三千の小兵ぬれども地理を揣り切所ふ据りてく
戰へば破られぎ入寄隊の三將い一且敗軍の殘燼ぬれども猶三萬餘の士卒あれば。

先度の恥を雪んとそ三面齊一競ふのぞ未明の時候ふるまでも雌雄を分くぎ
やらぬ顕定頻ふ焦燥て屢軍使を走らせく左右の二將ふ詰ー合せて三面一度ふ
火箭を飛ーて信乃現八们ぬ竜らる茂林を焼まく欲まるふ白石重勝及隊
長等ぬらくそのぬを嘗らく士卒ふ下知ーて火茶を集め既ふあて幾百枝の火箭を
一度ふ射出さんとまち程ふ今朝ち烈ーく吹く風ふ鋭くも火線を吹含られて其
火反て四下る。枯草ふ移らーぬ弓ぬいちえ雑兵们ぬまち什麼とぞらふ驚
慌く倶ふ其火を撲滅さんとそ或い鎗或い棒を執るふ儘せて枯茅萱を撻ぬ
憶ぎ打出ぎ茅萱の裏ふ獣あり是則別物ぬらぬ鄙ふ牙ふ蕉火を結着ら
まく戰車を焼ー大豬數も減らぎ六十五頭忽焉として前後左右ぬる高萱枯
草踏躙ぬく顕れ出て雑兵を牙ふ掛ーく投飛せぬ弥驚く衆兵隊長ー主將も
倶ふ胸を潰て野豬を殺ーね火を消留ちと喚ど叫へど届ぬ下知と怪異ふ乱ぞ

三百一禍の野猪い皆咸景恭れ嗜りく又只寄隊の騎馬武者の馬足を開て突
折げ人馬俯累りく死るもあり然らぬ野火に逼られく身を焦して叫ぶもあり
信乃現八等ハ是を見て猶び勇ぎる者るく直元逸友三百一致の隊兵を找出て攻入
る中央に大塚信乃並て真間井樅二郎勇士猛卒前後を爭ふ勢い宛破竹の
如く今日頭定を檎ふ做さぎい何の時を待んと縦横に凝ふ戟も散せば然て
も乱れ寄隊の衆兵野猪に驚き野火に迫れて恥を思ふ雑兵ら皆四零八落
逃て跡なく亡ふる開ぎ中に白石城介重勝い先鋒の頭人霧布五六といくく
主君を後安く退陣させんと思ひ殿ぎ残兵四五千を推囲めく程に死ぬ野火を
避て信乃ぎ一隊と血戦を其勇ぎ紀あねども寄隊の士卒い皆胆落て透も
あらず逃まく思ふ網裏るる魚鼈に似られば敢戦ふ擬勢なく僅に一千許る犬
塚ぎ隊の兵に敷き破られ立脚もなく事急るい敵に加りて反く自家を射もあ

ば白石霧生防ぐに甲斐なく倶に馬を射さを痍を負ひ死ぬ逃る士卒ふるも
雑まく迹を埋めく落亡ける有信り一程に寄隊の副将山内五郎憲房い
霊猪と野火の禍鬼に憶ぎも辟易て二ひび總頼ふるまくせ折犬飼現八信
道い継橋綿四郎喬梁と倶に隊兵を推找めく突然として働く入る馬上の鎗頭
向ふに前なく剰野火と野猪に寄隊の士卒い彷ぐふ術なく右往左往乱走を
這隊の頭人間敷野汶八夏盛と喚做を猛者雁鳥列衣八九郎と共侶に四馬辱
ば喚返して馬を跳らせ二騎相並く眉尖刀とりく敵を芟る猛勢凄じく
敢近つく者を現八も好敵なりと思へば継橋喬梁と共侶に馬を
けさぎ鈴見めて一つ向ふとる程に汶八八九郎い後ようて突ひて来る二三頭の野
猪に馬の後脚を蒐られて忽地撞と落ぬ能いとも思ひげん痛楚を耐心び
身を起して逃る雑兵に交りく蝕くも影を躲せぬ現八見て冷笑ひて

思ふも似ぬ白徒なりけるとハヘバ士卒も喬梁も憶ぜ咄と笑ひけり。然ハ山内憲房ハ近習僅ふ五十名を従へて。假名町の方へ落てゆく程ふ現八を只一騎士卒ふ先さらせ迂蒐ゑ吸禁め窘めて。鎗を拉て嘯く蒐れば憲房の近習們ハ已ことを沼ぶを敵を迎へて。ゆゆふうち振る刃の電光一騎の敵と侮りて。俱ふ勇ましくおひもなく。皆現八が鎗下ふ仆るもあり。俯きもあり。竟ふ羽翼を喪ひ。憲房ハ逃るとも。他逃さじと。覚期の大刀風馬を馳とを馳違せて。一霎時ハ挑戦ふもれりう。原是婦人のゆふ生育て艱苦を知ぜ民情を查甚ず。心驕りて身ハ柔弱ゆ。貴介公子のいふて。大士の敵ゆ足る者ゆらねハ持る大刀を打落されて。怯むを現八馬乗よりて。撥抓を引着て宙ふ吊ゑを動ゆせを四下を伝と見ゆる折ゆ。継橋絆四郎喬梁ハ五百個許の士卒を率て。馬を走らせて来ゆけれバ現八ヤヤと唱ふ近つけそやよ。継橋生ゆの生只ハ寄隊の副将ゆ。夙く沼ゆ。死賓客ゆれゆる暴くなせを逃ゑバ

這ゆ今乗捨る馬の轡局ふ勝着て。牽ゆて去りて。疾郎君の御陣営ふ。らせゆとふを喬梁欺び羨て馬より下りて士卒と俱ふ弱り果る憲房を抱と。ゆ推縮めて。件の馬ふうち乗せて。鞚を解て十の字ふ繋ゆく。勝ゆ。又故の已ゆ馬ふうち乗ゆ。現八ふ欺びを述相別れて。牽せて躰て義通君の陣呼を投ていそゆける。窠下ふ。その時寄ゆの一将足利成氏の一隊ハ那野火も飛移らゆ。又野豬の怪異もなりあるゆ。猶直元逸友等と連りふ挑戦ふ程ふ猛可ふ自家の両隊顕定憲房父子の陣より乱れ譟ゆ。敗績ゆと等ゆ成氏ゆ敬ゆ。則在村と新織素行ふ件の父子を援けよとて。隊兵を分て遣けり。その故ふ成氏の士卒減少ゆりけふ敵ハよゆ勢ひゆて攻撃ゆと甚急ゆ。許我の士卒ハ二の陣。敗軍ふ氣力折け。撃ゆ者勘ゆ。其餘ハヨく落亡ゆ。成氏の旗下ふ相従ふ近臣股肱の毎ゆ。科草太郎望見一郎。是等と宗徒の精兵ゆて五六百名ふ過ぎゆりーゆ。成氏嗟嘆ふ堪ぜて

文浪堂藏

今ハ一も是まで戰殺せんと麾ちち揮て士卒を找めく敵の隊長杉倉武者助直元の一隊を逆へく推蒐る這時遽し颯と降し来る狂風ハ沙石を飛し樹枝を鳴らして天さへ暗くなる隨ハまりので来る一箇の野豬大紀なると犢ハ奮ふ一く疾て虎ハ似たるん狡と思ハ可の猛威りく成氏の乘る馬を駈仆し主を滾して起んと蠢く甲の表帶を牙ハ引裂け背ハ載く往方も知ざるふけり然ハ今古の光景を敵も自家の士卒ハ見て知る者なければ只狂風ハ驚ハ怯れて活路をあぐ索ハ。

のまぐ双を交へぎして勝負ハ既ハ決然なる直元逆友隊兵を找めく中るハ任せく斫仆せば敵兵ハ〻く逃亡て科草望見の黨のミ僅ハ陣歿者なりける介程ハ横堀史在村新織帆大丈素彩ハ成氏の軍令ハ従ひて一二陣の敗軍を接んとそ五六千の隊兵を領ていそぐ程ハ顕定親子ハ戰ひ敗れて今ハ拯ハ〻も又後方を見られ我一陣も亦敗軍ハ逮ひけん自家なる士卒の落てゆく後影まく見えて在村ハ嘆

文溪堂蔵

口を氣して馬を駐めて素彩を瞬近つけく呼くやう帆大丈和殿ハ何ハ思へるのこるゝで我陣も亦敗北の兆見えて我君ハ恙なや陣歿ゆ〻く狡知ねども左ても右ても三くびの負を入建復もべくもあらぬ然るを猶恁て在らば必敵の俘ハなん。

滸我ハ各宅眷あるハ疾くの彩て安危を揣らぶ後悔脇を咬んのことなれ素彩ハ聞て聞く賢慮寔ハその利あり然ハ〻ば仆仕んと応て躰て間道なる千住ハ〻ま赴く程ハ葛西の底不知野を過る時従ひ来る四五千の士卒ハ又蝟く落亡て才ハ四個の鑣奴のミ今も猶馬前ハ在り在村と素彩ハ倶ハ呆れてうち咳く心細さ涯しもなきを迭ハ然ハ面色して好々負へらん那奴們ハ亡て結句優らぬとハ。

より外ハ術もなく見耳も限られ逸る。あの野をさく諭んとく倶ハ馬なぞ早めける。

有恁ー程ハ大塚信乃ハ鄕ハ顕定を敷るも果さで走らせとりける遺恨ハ堪ねば自家の士卒ハ先さて往方を索れて只一騎迂のそ来る馬の左右ハ従ふた。

雑兵僅か五六名端々を績ける折る前面を見直すべ足掻を早めく二騎の落人あり。倶か兜を脱捨て皂裂の頭を裹める一個は綿繡の戰袍を一個は則絳白の段々間道ある戰外套を被てうち相譚ひつゝ人馬の背骸五六町西ゆ南ゆ曳り。信乃いうち相て鈴びか堪ぎ那錦繡の戰袍を被て落武者は必是山内の管領なるべしとのを従兵うち守て知る者あり告るうち否他は管領おひるぞ。小可隊相記あり。戰袍被るは滸我の權宰横堀史在村之又戰外套は其次職なる新織帆太夫素彩か紛れもあるべしとへば信乃又欺びて仰らば亦是我仇へのでく。そこの能か殘す二枝の表揮の征矢前拔半弓を直して馬を走らせ聲高ゆか其里か落ちく騎馬武者は滸我の侍臣横堀在村新織帆太夫素彩なるぞ我は是大塚信乃金碗成孝之若们汗侍邪智の本性暴ゆ我を虐げて捕ちく新織素彩を縛捕の頭人として我か徳の安今まで穿鑿ゆとの

急ぎ走りけれか義士山林房八か我死か代りて血深の衣は繞か為りく我背か在りて今復を舊恩舊怨思は知るやと吸れか在村素彩うち驚ぎて馬を駐めて見る処を能弯固めて弾と射る矢局差ぎ素彩か左の耳より頤まで貫深く射ちきて叫ぶの果ぎ馬より隊さて死んでけり是ゆぞ怕る在村は項を縮め泥障を蹴鳴ち赤馬を馳ゆく逃んとまるを信乃は透さぎ赶蒐る馬の足掻も弥疾く弓勢前接速る弦響と共か横堀在村は項の邊を丁と射られて苦と叫びて落もせぎ只は鞍局か俯る儘か走れる馬か乗せられて死活は知ぎ做かる又那四個の鐵奴は主よゆ先か逃亡せりを信乃は二さび赶まくまるか矢種既か盡ぎ只は得従兵の續くを俟て持せり鎗を掻合ちつゝ若们は我らへの歩るまぞ權且這里か居よかとのひ捨鞭をうち鳴して又在村を赶蒐け浩処か大江親兵衛は郷尚か長尾景春の陣長る梶原後平二景澄と荻野五九郎泰儀か親兵衛と戰ひ負て逃るを連

征箭を飛
あの
志乃
恩を復せ
志の
義士山林
房一ノ紀

アホ赶蒐る勢ひ已ことを泛ざりしが心ともなく葛西なる底不知野ホ來ホけるを這
里ハ茫々たる曠野なる茅萱枯芒花弥ゞ上ホ腰果ちて路去り迷ふ地方なるを
ども逃る者ハ路を擇まず又赶ふ者ハ青海波の駿足を乘れば荊棘延蔓れ
野草と物ともせず既ホして親兵衛ハ両個の敵ホ近づく隨ホ蓬し返せと呼ばけく
敏ホ死枯草踏開く馬をのよく跳らせく後れて馳る景澄の背を鎗の柄刺
きる時怪むべしこの業取の敏ホ死ゞ中ホ最大死なる坑あるべしと知ねば馬蹄を踏ゞ横ゞ
人馬愕然と陷りく在りとも見えざりしが景澄是ホ氣力を泛て三度來返して
鎗をのく刺殺さんと含直を傳る折ゝ犬塚信乃ハ猶も横堀在村を封捕ん
とて只管ホ馬を走ゆ景澄る程ホ見れば三騎の武者ゑれある一騎ハ其両敵を
赶ふ者多く六の地ホ在るべしと思ざりける犬江親兵衛ホ似さらべし且訝り且驚び
それらあらぬ欲とるるホ聲を揭んと為る時其武者ハ忽馬と業最隱る坑中へ人

馬共もく陷しが後れて走る一騎の敵突然と返しまそ鎗のく坑ホ勍敵を刺殺
さんと馬を寄せるを信乃ハ吐嗟と馬馳せてやれ白人なる下しと罵りの鎗を晃
めしが刺んと找ば景澄ホ見て你ハ誰そと問せも果ず信乃答て你知ずや我ハ是
犬江親兵衛ゞ義兄弟里見殿の御内ホ八犬士の一人ホ犬塚信乃成孝ゝ原来
好敵ぞ汝ゑ我ハ白井の隊長ホ梶原後平景澄是ゝ當の敵ホあらぬ勝
負を決せんとされと名告ホ相喚て鎗を交へく戰ふ程ホ既ホ過ホ逃死ホ萩
野五九郎泰儀ハ這光景を見ホ行く只得馬を乘復しまそ又景澄ホ力を勠
せそ連りふ挑ホ戰へども信乃ハ撓る色もなく左右ホ敵を受ホ劇ホ中ホ鎗法ホ
両敵共ホ腕乱れて引外さんとせ程ホ泰儀ハ項を刺れて馬ホ仰さるる隊しく
景澄是ホ敬馬怕れて透もなく逃ホ思ホ聊も其便りを泛て信乃ホ小髪を刺
れて赤も亦馬ホ墜ホ登時信乃ハ両個の敵の死活を敢見ず坑の頭馬を找て聲

高ゐ喚る声。方僅諺て這坑へ隕り一騎馬武者。犬江親兵衛ぞ。忘れ
ぬ我が犬塚信乃と既ゐ和殿の両敵。我鎗尖りく刺滅さん。で我這鎗の幹當ゐ
携りそ又鎗く出よりと告喚被ると両三番やり鎗と坑中へ繰下さまく做る程ゐ怪む
べ。這坑中より起騰る白氣あり。隱々として煙の如く天ゐ冲ると見る程。もあらむ又
忽雷と疾雷の裏く如く音吼えて。颯と吹出る猛風と。共ゐ犬江親兵衛ゐ人馬ひとて
く拾出されく。聊も身ゐ恙あらず馬も亦故の儘ゐく。主を乗せたく端然と坑の
畔ゐ立りく。信乃ゐ二度び胆を潰りく且ゐ且熟び堪ざり。眼を定め熟
視く。原来犬江恙ゐりた不思議の面會ありけるかな。昔我が德ゆく和殿の
親の終焉ゐ誓ふ誓ひ言の虚りくく。今日果りゆの娯りさよと報る言の葉ゐと
歛ゐた。この段特ゐ長やりゐれば又巻を易て下の回ゐ解分ると聽れかし。

南總里見八犬傳第九輯巻之四十二終

南總里見八犬傳第九輯巻之四十二上

東都　曲亭主人編次

第百六十九回

野坑を抬出されて親兵衛賜を受く
風葉を帚除りて諸勇士立談を

話表も犬塚信乃戌孝ゐ料ども葛西ゐる底不知野の頭ゆて犬江親兵衛
仁義為ゐ二騎の敵を斃りて他ゐ親山林夫婦の蒼恩を報りのこるぞ底
不知の坑ゐ陷りく。親兵衛も亦恙ゐく。件の坑より吹起る勁猛風ゐ吹騰され
け人馬故の儘ゐく出ると。ゐ為りく。信乃ゐ欽びゐ。もあらず眼を定めて
つらと見ゐ忻然とて先問ゐ。犬江和殿ゐ幾の間ゐ京師より来て今番の
役ゐ参り會りる。況や二騎の敵を迂来て。諺てゐの坑ゐ陷りく見えぎりりゐ。
特ゐ奇ゐ坑中より。白氣立外るとゐて。且猛可ゐ吹えく風の音雷霆の响と

共ふ自然ふ勢ひとなるるハ必是其身を衛る靈玉の大奇驗と伏姫神の冥助ふ
あらぬべからずてあの幸あらんも只這奇事のまゝで曩裏ふ和殿ゞ稲村ゟ御厩人ふ
預け置たるー其名馬青海波ハ我和殿ゞ憶ふの故ふ這回の陣中ふ牽めて来
たるふ昨宵其馬ハおのづゝ絆を解て走りー欣然ゝぎハ人ふ縋れー欣往方知
るべと空そらべ後悔腑を噬るのゝ當晩ハ我火豬と放ちて寄隊と敗ふ欲を
る折へければ井を索るふ違るるーふ見れば件の青海波ハ則和殿ゞ乗て在ちゝ
亦大奇とのゝべー我ハ方僅那滸我の佞臣ゟ横堀史在村と新織帆大夫素
行ゟハ三騎落てゆくを赶蒐て射く斃せとゝ汲れども在村ハ馬より墜ちゞ儘
乗ぜ馬の走るを赶捕へんとゝるふ乗ゟ憶ぎ和殿ふ両敵ゟ馬をハゝ鎗を
めく坑ゟる和殿を刺まくせを遮り制めて戰ふく斃て和殿の窮厄と拯ひ汲で
ける独びゝ何事狡亦是ふ優ちゞたゝ上れも汲せ六稔の昔日我身ゟ德の古那屋

ゆく必死の窮厄ゟー時和殿の先人山林ゟ我身ふ代りー義死の臨終我ゟ感謝ふ
堪ぎれゞゟ折ハ年四才ゟりー和殿をゆをゝ引ちゆく我山林ふ拯ゟく後年ふの子
成長りく倶ふ戰場ゟ莅むゆゟゞ我前面ふ立ち死ゟ代りて今日の恩義ふ答ん
とゝ言葉の露霜ハ代謝く六稔まくゝ便宜ゟりーふ今茲ふの冬君家の
軍役倶ふ防禦の使命ゟりく水陸二人所の大敵ふうち向ども爭何せ和殿を
京より還らぬハ安危を倶ふ做ーかゝと思ひー者と思ひゝや不測ふ越ゟ折を汲く
這里ふ和殿の窮厄を繹ゝも拯ゟく我前言を全く果ーて世ふゟゝ人ゟ後易くる
らんゝ噫嘻天ゟる平時ゟるゝも和殿ふの地ふ在ちゝりーかどゝのゟ一霎時も胸ふ
絶れゞ和殿の愛馬を牽せゟるハ是ゟ亦和殿ふ代る二枚の防禦使ちんと思
へゞ又只ふの意味のゝゟゞ見ゆ我樅ゟる這縄ハ和殿の爺姥の血染の衣と
我年来艱苦の中ゟ身ゟ添て失ゟゝ深く藏め措ゟりーを這回縄ふ作らゝ

きの
そこあらぬ
底不知野ゐ
きの
信乃
あべ
親兵衛を
すくふ
きとうの
うげすと

其芳名を自家の士卒ゆも敵ゆも知せまく欲まるまでの所行の死と心の誠
うち出く告も寄問も尋る閑談細やかえけれが親兵衛馬上ゑ頭を低て所作
坐ゆ感涙の進むと覚ま長嘆して果せるるく至誠い必や神の如し大塚主の
孝順忠信い人の及ぶ所ゑれども誠心誠意徳まゆ最厚しとも敦うぞゑ
あゆ不測の援をゑて相逢ふ日を待べけんや我身い必敵の鎗ゆ刺れて身いたの
坑ゆ命終らが人知ぎそるべけれ然がゑの再生の洪恩と千言萬句ゆ盡とも
嘸るべうもあるぞかし宣ゆ此上ゑ幸ひる哉就て咱等い光雪直塚们の伴當殿
兵を領て今朝ゑもかう来ゆる程ゆ料らぎも泡ゆけゑ這馬の足掻ゆ任せく御曹
司の御危戰を援けなり且勍敵長尾景春と戰き破ら走らそ其子長尾
為景と擒ゆせ〻ゑ又那河鯉佐太郎の政木大全孝嗣石亀次図太越卿二と
三人ゆ共幸ひ〻てかの析死ゑぎ月屬両図河原ゑ向水五十三太が宜所ゆ在〻ゆ

我ゑ先ゆ御曹司の開戰を援けまるく長尾を拉くく力戰せゑ都て是ゑ此
ゑも會話をまゑれども恁枯草繁ゑ処でゆ下馬ゑても屍を拭る石ぐゆ見ゑ
那里ゆ故る松の下い結縷草あそ憩ゆ宜〻卒ゑ那里ゑく倶ゆ意衷を盤
ゑべ〻と云ゆ信乃も見くゑく現那松蔭ゑそよゑンめれ和殿ゆ据ゑて肇て知ゑ原来
御曹司ゑ亦御出陣まゑく長尾と戰ひゑ〻狄鄙語ゆ云燈臺い倒ゆ下閣くゑて
今肇て吟く飢ま〻さよ況や政木石亀ゑぐゑい〻も最も芽出ゑ珍説ゑ蟲ぐ所
ぎいゑべくゑ卒々と云ゑ倶ゆ馬を歩行せく徐ゆ松の邊ゆ造ゑく下馬〻と餘
謹ゑぐゆ析ゑく犬飼現八杉倉直元田税逸友真間井秋季頭人隊長陸續と信
乃ぐ兵ゑも從へて寄隊の両將顕定成氏の敗れ走ゑ〻と迂捕へんとゑく索ねてゑゆ歩ゑけ
ゑゆ信乃ぐ一個の若武者と共伴ゆ憩ひ居ゑると遥ゆ見て現八ゑ自餘の隊長と
倶ゆ馬ゑ下立ゑく找ゑく信乃ゆ大塚和殿い顕定主を那里ゑ迂立ゑる。

呻ら咱ハ副将憲房と獲られば継橋綿四郎ハ守らせて臺城へまゐせ先。
卒立ち共侶ハ赤ねて顕定を捕へんぞと奮ひ親兵衛を見つけて胆を潰し又左
見右見て大江和殿ハ幾間ハ京師よりかつ来て這戦場ハ在りけるやと問へば親兵
衛微笑て然之咱ハ今朝ハ此地ハ馳就て御曹司の御危戰を援けまつり敵
兵の逃るを封ぐ為の野邊ハ多く料らぬ必死の厄あり幸ハ犬塚ハ拯れて
今這里ハ来ることを現ハ吟あぐ中ハ又奇べ最芽出て御曹司の御出陣もまぢ
かし知らぬ時過られば乙も甲も寛やかなれ吟今の急務ハ管領の往方を
求獵て懲さば異日又寇来べし卒共侶ハ立ち奮ふて聚ハ信乃ハ禁
めく徐ハ犬飼さを惰ることを這回館の御軍令ハ只防禦を旨として殘忍
惨刻の挙を饒しめざ非如寄隊の将帥とも逃ば脱ぬ寛仁大度の御
旨ハを稱ふべけれとのられて現ハ忽地覺ゆて然へとも我怨ハ命らるハ人馬を憩
へて敵ハ一人も在らざるを見ば岡山の陣所へかへるべしと各て後方を見ば直元
逸友ばかりを親兵衛ハ帰國の歩びを舒るとき當下
信乃ハ現ハ為ハ出ることを在村と素彩を射て斃しける事を首ゆく親兵衛ハ諺て
人馬為ハ野中の坑へ陷りし折信乃ハ来て其両敵を斃ぬ又親兵衛ハ坑
中より吹起る猛風ハ吹出されて騎馬の儘ゆく走ぬ来しるの尾ぬ其大男を
説示せば大家听く感嘆ぬ并ば中ハ現ハ為ハ矣庁向て信乃ハ犬塚和殿の挙
都て至妙ハ為ハ及ばれど就中横堀史在村と新織帆太夫素彩を射く
斃せハ愉快ハ那在村ハ奸佞多君を惑し民を虐げ能を娼ミ賢を憎み皇裏ハ
我芳流閣ぬ和殿と組敷るの多微らせば竟ハ那奴ハ虐げられて牢獄中ハ命終
人又新織帆太夫ぬ常ハ在村ハ媚諛て皇裏ハ和殿の辨捕を請美彩徳ハ来て
求獵しば惜むべ犬江の爺孃ハ死して和殿を救ハ至れり。ハるを今番那奴

ら。弩と毅を漏し。弥勒の世すぐ後悔其甲斐なくも天羅張得て路を譲らぬ和殿ゆ誅戮せられい造化小児の筆帳精細寔ゆ脱落あるとる。況や和殿ゲ山林ゆ報恩の前言を今番の役ゆ果さまべしゆ神ゆぎして誰ゆ知んをと待難て云云と催促ある人しもあるゲ鄙語ゆゆ親の心を子知ぎゆてもあべけれと必ず呵々と笑へば親兵衛い愀然さる貌を改め且信乃ゆふち向ひて犬塚よ犬飼も所ゆ咱ゆゲ京師ゆ在りし時政元主ゆ抑留せられて憂苦の中ゆ日を渉りけ其事既顛末い一朝ゆ盡ぐゆ開いと且く言省てん我尼鮮けてゆう多くゆ華洛を辞去ぜしい十一月二十四五日の時候ゆりしゆ憶ぎ路ゆ掩留て今朝稍ゆの地ゆ馳就ける首をゆへい箇様々々尾い又箇様々々と名馬走帆のゆ又信濃路ゆ這回の役ゆるゆを知りしゆ又千住河原ゆく愛馬青海波の河を渉りて来ゆるゆ逢ゆ並ゆ馬盗見法間野目奴九郎のゆ及二四的寄舎五郎須々利壇五郎ゆ。

又親兵衛們ゆ長尾景春と敗り走らすゆ且再戰して長尾為景を生擒りしゆ。亦政木孝嗣石亀次園太越卿二ゆゲ再生の事ゆ顛末及向水五十三太枝獨鈷素ゆ吉ゲ義侠のゆ並ゆ孝嗣い義ゆ仗て次園太卿二五十二太素ゆ言ゆと倶ゆ。ヨヲく其毎を知く義道君の閑戰を援けく軍功ありしゆ。都て毅素を其ゆ言を約ゆ為て漏をとゆく告しゲ現ハ以下の頭人隊長听々倶ゆ感佩して美談とゆ稱へけゆ。當下信乃い笑けゆ親兵衛ゆち向ひて犬江よ原来那青海波い昨宵盗見ゆ牽去られしとやう屈くゆ今覚得りゆ遽莫昨宵岡山の陣営ハ三面寄隊ゆ戰車ゆく囲れられゆ鼠も暢いゆ且背の方い景河ゆゆゆ他いゆて潜入く馬さへ竊出ゆけん神変不測とゆまくのゆ現活馬の目拔郎ゲ竊術とゆ怪しけれとゆゆ大家堪難て齊一咄と笑ひけり姑且しゆ信乃い又親兵衛ゆ向ひてゆう犬江這里ゆ曠野ゆて君命を偽る宜ゆ地方ゆうねゆも明日まゆ図ぐゆゆあうねゆ謹て差まうねと

文海堂蔵

に親兵衛阿と応て身を引降て跪げば信乃ども曩に洲崎の御陣屋館
みづから軍令を定させのち時大坂毛野を軍師に做され並に和殿と我們七名い
倶に防禦使るべしと仰渡されて且節刀に擬せられる御大刀を各一口賜りて這
回軍旅の間倘軍令に違ふ者あらば先斬て後に告よと掟させのち所に小るに和殿に賜るべきを則咱等に遮與ぬ又
殿と大村大角い御使して他郷に在れば和殿に賜るべきを則咱等に遮與ぬ又
大角に賜ふと現八に預けぬ所あるとて咱等の地に出陣の始より其御大刀さへ
腰に帯て身に帯刀のヨマ死を戮ぎ且青海波の名馬さへ奉せ来る心操い鄙に鮮
示せり如し小るに和殿折もよく今日の御陣ふかるを且軍功の抜萃ぬいまだ
君命を兼らぎして防禦使の大任虐くるを求びて館の御本意に稱ひ難し武
門の冥加あるに一期の面目羨むべし卒々御大刀を遮與んぬとて躰て腰を
拯りて二刀佩るを中の一刀を取れば親兵衛い謹て受戴り腰に佩て身を

退せて答へ臣等京師にて權相の為に豪留せられて亟に御使を果ぬ危
窮存亡の時なれども知ぬ己の身に他郷に在りける君恩當敬の義兄弟に異ならぬを
仰ぎ戴れば身を措所なきまで辱く拜戴受納仕り却て大村い何等の故に他郷に遣
はめしやと問ふを信乃い推禁て否ある些事由あれば今明々地に告かさる
そは微ふも知らべけれと答て現八を見つつて犬飼い那折大村に賜ふ所の御大刀いふ
まつる今猶これあるやと問へば現八然べと那仰ぎ後異日隊配を定められて咱等い
和殿と共侶に御曹司に従ひまつりて去の地の寄隊に向へば大村と共に遠くまで然べ
役果ぬれば他に伴の仰を使く御大刀と遮與ぬるもあらば因て當日軍師に就て悄地に
御旨を請ぬるに館聞召て開い我思ふ足らぬに現八を返璧の幕を大角に値
遇せしに他も亦大士なるべし明徴あると知れりと称ぬるに其の縁故あるとて件の大
刀を現八に與ぬるを定る方りて実に是不便に思ひ所いそ

儘毛野の渡しねの大角の別人をもて遣走しと仰せらるゝ那須大刀の洲崎ゆくそゞ
儘返しまゐらせそ犬阪の遽輿しらと聲低やかに谷る折りから燒雪代四郎直塚紀
二左衛門地喜勘太郎の伴當郷兵並ふ政木大全孝嗣石亀次郎大越鄭三向
水五十三太枝獨鈷素盞吉且二四的と須々利が麾下の兵まも長尾景春の隊
長らる直江色道卓佐美職政と力戰して敵を敗り追走せ四下に敵の在ら
ざるを俱ふ隊の兵を従へて猶親兵衛を援んとす索ひて這里ふ来りけれ親兵衛
是を労ゆ孝嗣以下新参の毎を則現八並に直元逸友秋季ゆふ慈しと宣て
引合せふ大家其義旗勤軍の大功を称賛を浩処ふ葛西三郎谷潘る村長
故発荘客毎釘脛衣して鎌竹槍を携らる幾隊の里見の防禦使を索ひて
俱ふ勝軍の壽詞を唱て且ゆゑ小人毎八年来里見殿の仁政を慕ひまろ必人を
傷ふ寄隊の敗北あるを追撃て一人も脚を立させらるゝ敵の首を捕る

ことを饒しゆゑを信ずてゆへ首級い齎しゆる開ふ我殿の權臣る横堀史
在村い那身矢傷ふ死らるゝ乗らる馬の鞍局ふ俯る隨ゆ来ふけれ分捕仕り
いひ奴他い民を虐らる奸佞の学えある者ゆ既ゆく死らるれ小人毎里見殿へ巡の
證ふせんとく其首斬て持参仕りひしふ又今来り路ゆ亦失傷ふ死らる落人
あり他い則在村ゆ次職ゆ同悪の佞人新織帆大夫素彩ゆを知れる者の告らば
亦も首捕てゆく参り奴いゆで実検を賜ひとおるく潮て二級の首をまゐらせと
信乃いうとゆて得と撿て這在村と素彩い鄭ふ我ゆ射て斃せし我君仁義の御
軍令あれども這在村素彩い君を惑し國を謬し罪死を容ざる悪人れば必梟首
せらるべし大義ふ在と労らへ現八も亦村長ゆ向て若们へ来りて便宜れ約莫
今日の聞戦ゆ敵ゆらへ自家ゆも陣致の者ゆ其亡骸を拾集めく便宜の寺院へ
瘞むべし与ふ親兵衛らゆて犬塚犬飼両賢兄いゆ恩ふ中ん残ふ克殺を去るい則合の

心の
御本意なるぞや然れば今日の闘戰に自家いたつて敵とらんとも陣歿して深く
皆是忠臣なるぬかり。然るに其死を救ぎして埋めく壤に做さるが長く怨を結ん
のみ各位も知るごく我に不死の仙丹あり。姫神授與の神茅あり深痍に死したる
者とらんとも二晝夜二十四時の中に蝕く是を用れば死を起して生に回ること譬言に早天に
枯る苗の甘雨を得て勃然と起るも速なる其経驗いまだ比素藤に數されざる
御曹司の伴當們の皆甦生りを見て知るべし。その我什麼と請談まれば信乃い所
にく欲びて。現犬江が揃る所婦人の仁に似たるなんどの者もあらんを我思ふ
丈博く愛まるい則天地の心に敵なるも仙丹あり活して還り遣さば必や両管領も
後竟に我君の大仁至德に感服して悔く怨を解るべし。意に今日の闘戰に返り合
せて戰死なる寄隊の遊軍廿紀内外助及建柴某乙又滸我の近習なる欲望見
科草なんど喚做る壯佼い俱に恥を知り君を將して恩義の為に陣歿なる倘

是なりと活りなば善を勸る一術なりんと說なるを現八推林めて。そもそも咀嚼も同意
なれども犬江が所云不死の神茅い僅に一箇の茅は龍に藏めるのみなるに敵と自家に刀
瘡戰死千百人に送るく用るに足るべきやと詰るを親兵衛等あるも其疑ひい理なるを
我神茅い幾十人に用るとも盡るとなき豊養あい自家の刀瘡児に用ひく是を用ひく折
も後に歿是を用ひて剩分ちて一茅は竜を燒雲の腰に帶させれども故の隨に高宅も
減らぬ。その我い心易かるべしと解れて現八感服して又ぶつもるかり登時犬江親兵
衛い村長なるふうち向ひく若們目今はつらん我不死の茅をもて敵と自家の兵の死を
救まく欲をるれども用ひて驗なるい命數盡て免れざる者欲然ぬ積惡陰慝の
歿人とたるべけれ其甦らざる亡骸い集めくその野の大坑に垂ふ就て我疑ひ思へ
よるに那底不知とる喚做を坑い敏に茅萱に掩れられい衍怨て陷る者の年々に
あらんに若們何ぞ埋ざるやと問へば村長なる答ていはく其我仰でいはんども那坑い昔

より埋めまく欲するに底深けれどその心あるを試みに石を投入れ処び水音幽かに響き折
あり然れども底の地黎耶を捺落かに續いたけんかとして誰かこれを底不知と呼
ばいかと言真実立を陳べ親兵衛に沈吟して開いかに奇なるかな我郷国に
行て騎馬を那坑に陷しかに下を受る者あり欲底に至ざる故に其水あるを
知ねど力を竭して累かに埋めまく埋ども坑あらんやと詰るを信乃諾ひく
我もかくを思ふ因てそかに愚案あり堂前五十四田河原の岡山原是土民們の
暴河の洲を浚ひ折其壌の遣る方をさかに心ともかく築成ることなり遽莫那岡に僅か
暴河を隔るのみ国府臺と相對へる敵倘那岡に据ることあらば城を守る為に害
あり利なきなべし然りとても礼に云ふを因に畢に卿大夫の恥へ我異日凱旋の折
あの美を館に迎えあらば必那岡を出明させん非如その路近くまでも民皆畊稼の暇
ある毎に日を累ね年を歴るまで一簣一車の功成らば愚公の山を移さに至ん然を
思ずやとて諄へ信乃現八若いへばかりに直元逸友秋季も政太郎雪以下の人毋
も件の論議を感佩して其英才をぞ羨みける故に義成主人の次の年より葛
飾二郷の民に課て五十四田の岡を鋤除せく底不知の坑を填めさせかに民皆其
盛徳を慕ふの故に招ざれども聚合まで其役を樵めらば僅に一稔可ふく件の
岡を鋤執畢りて件の坑を填め果らば義成主又土民に五稔の調貢を饒して
其頭の曠野を迷なく鋤せて新田開發の美を教かに民皆欣びて勉ざる者なり
まらば所も二稔可ふして新田を開くと數百畝及びしらば永く公私の有益なるべけ然ば
この課役に葛西二郷の衆民と安房総中れ吏人と心を同ふしかを教せて害を除き利を興ふし
時の人その新里を名づけて二郷藩とぞ喚做しける後の人二合半に作るに同所をも欣
且今も葛西假名町の邊に新田村あり是なるも其餘波をも欣左まれ右まれ道徳仁
義の君臣の迹仰べし。かくは是後の話に看官前後を照して見るべし。

第百七十回

神藥施し得く敵兵再生を
現八箭を拔て水死の將を救ふ

その日犬江親兵衛は博愛仁恕の心ゆゑ敵自家の差別なく刀瘡見及陣歿の兵卒ふ神授の仙丹を施してのく死を起し生ふ回さまく欲まるふ則信乃現八ら と商量ゑ真間井樅二郎秋季を施葉の頭人ゆて代四郎紀二六喜勘太らの三名とゆて其副とも他ら人這神葉を用るふく其事ふ熟しれど然び真間井秋季は兵四五百名を從へて代四郎紀二六喜勘太らと共伯ふ這葛西ゑ村長荘客と安を案内ゆて既ふ立先んとあける程ふ衢ふ長尾景春と戰ふく俱ふ疲を負ふく仆まる須々利壇五郎二四的寄舍五郎いゑ下の野武士らふ拔拔れて赤ゆ這里ふ床ふければ親兵衛労ひ勤りく腰ふ吊る葉龍より又神葉を含ゆて其疲ふ布まるふ疼痛立地ふ祛ゆ癒愈て心地清まふ微りゆ寄舍五壇五八欺びふ堪ぎ

二度の恩恵再生あ幸ひありと云親兵衛ふ感悅の詞を發く且信乃現八直元逸友秋季ふ初對面の欵びを演ゑども迭の口誼ハ具ふせぎも看官是を查まし。當下村長荘客们ハ仁ゞ神葉恁まぐふ即效の至妙るを見て胆を挫ふ感佩して其君仁慈ふ御坐せば其臣ふ亦かの如ゆ神葉をもく敵自家の死を救ゆ神童あり。是豈允文の所為ゑんや俱ふ神人ゑべしそゆく憑心しく思ひけり。恁而施葉の頭人ら五百個の隊の兵と村長荘客们を領て又戰場へ赴くふ施紡の神葉ゑ量裏ふ親兵衛ゆ分ちて代四郎ふ預ける。一葉龍ゆく事足れどそ今ら別ふ授るふ及ぶ只親兵衛ハ代四郎紀二六喜勘太们と叮寧ふ教言めて人の命ハ千金より重かり叟ふ直塚も喜勘太もゆふまぞふあらねども。今日の施葉ハ我私の生賢のく做ふあらぎ便是館の御本意也。恩ふ報ふふ德をのくもて其覺を俟ゑ敵あり。とも困ゑく一人もヨヌく救ふを善とも限ゑくのせよいそだれと諭ふ其代四

郎紀二六喜勘太们秋李も亦共侶ふあるゐ果てを罷りける。姑且まで五十三天
素ゐ吉ハ鄉ふ政木孝嗣ゐ樋口維龍を刺殺くる鎗の精妙事ハ光景箇様
箇様とのひ出て三大士ふ説示ゐを孝嗣ゐ忘ふ推禁ぬて已ねく盃よ哥々ゐふあるとゐ
アのゐ何らあんとのひゐ親兵衛ゐ向ひて。在下今日の開戰ゐ長尾ゐ隊長雜兵
さへ武人欲敵死あーかゐも素ゐ名利の為ふせゐ其首を捕らぎゐ徒て後ふ羨
アゐ里見殿の御軍令ふ敵の首を捕る者ハ是軍功の二の町ゐ必重賞ゐ遣ぶと。
掟さきあくーと人の告るふあるゐ故ゐて虚言ゐんと思ひーふ和君所藏の神葉を
のそ敵の死ゐとも救んとある。至仁の計謀ふ照ーて見れば実ふ仁君の御盛德感ぜ
るふ餘りあり。敬服至極仕るぬと謝されば親兵衛信乃現八も孝嗣ハ今番のゐ
ぜ。豊義ふ素藤を對治の折も敵の首を捕ぎと内ゑて。心操ゐ感ぜ称言ふける。當下
直元逸友ハ信乃現八ふ向ひてふゐ。両君ハゐふ思ひのゐんゐ。約莫這回の一大奇

事ハ那野豬ふのゐぞや。初寄隊の戰車を焼て。三面敗績ゐ。時那野豬ハ敵ふ
刺ぜ火ゐも焼れぜ。掻消ぎとく見えぜ。做りしハ最怪むべゐのゐふ寄隊の二將返
去て。三面各死を爭ふ戰ひ闌るゐ時件の野豬六十五頭ハ又忽焉と出て来て
寄隊の騎馬を駈仆ーけ。邦助ふよりて。徒速ふ埒ハ開ゐ。倘那野豬微りせゐ他
人ハ知ぜ卑職ゐハ成氏主の一陣を。敗り難ゐ勢ゐと。告れば現八點頭て开ハ
亦咱ゐも同意ハ那野豬の邦助ふよりて。然ぞゐ骨を折らぎーて寄隊の副將を
生拘ゆ。定ふ可賀々々と祝ぜ信乃も笑局ふ入て却親兵衛ふ任々と霊猪の
事の顛末を告れば親兵衛感嘆ーて咱ゐも亦京師ふ在ーー時故画の虎ふ霊亟
傷て拔ぎく山ふ入りーと。管領政元主の為ふ對治ぬける。奇談ゐ其首尾ハ固
様々々と。徳用堅削の毒悪政元主僕の奸詐並ふ五虎の確執横死及秋條廣
當ゐ賢才の計謀ぜ。當時の崖略を詳ふ説示ぜ。信乃現八ふゐも亦ーと大家

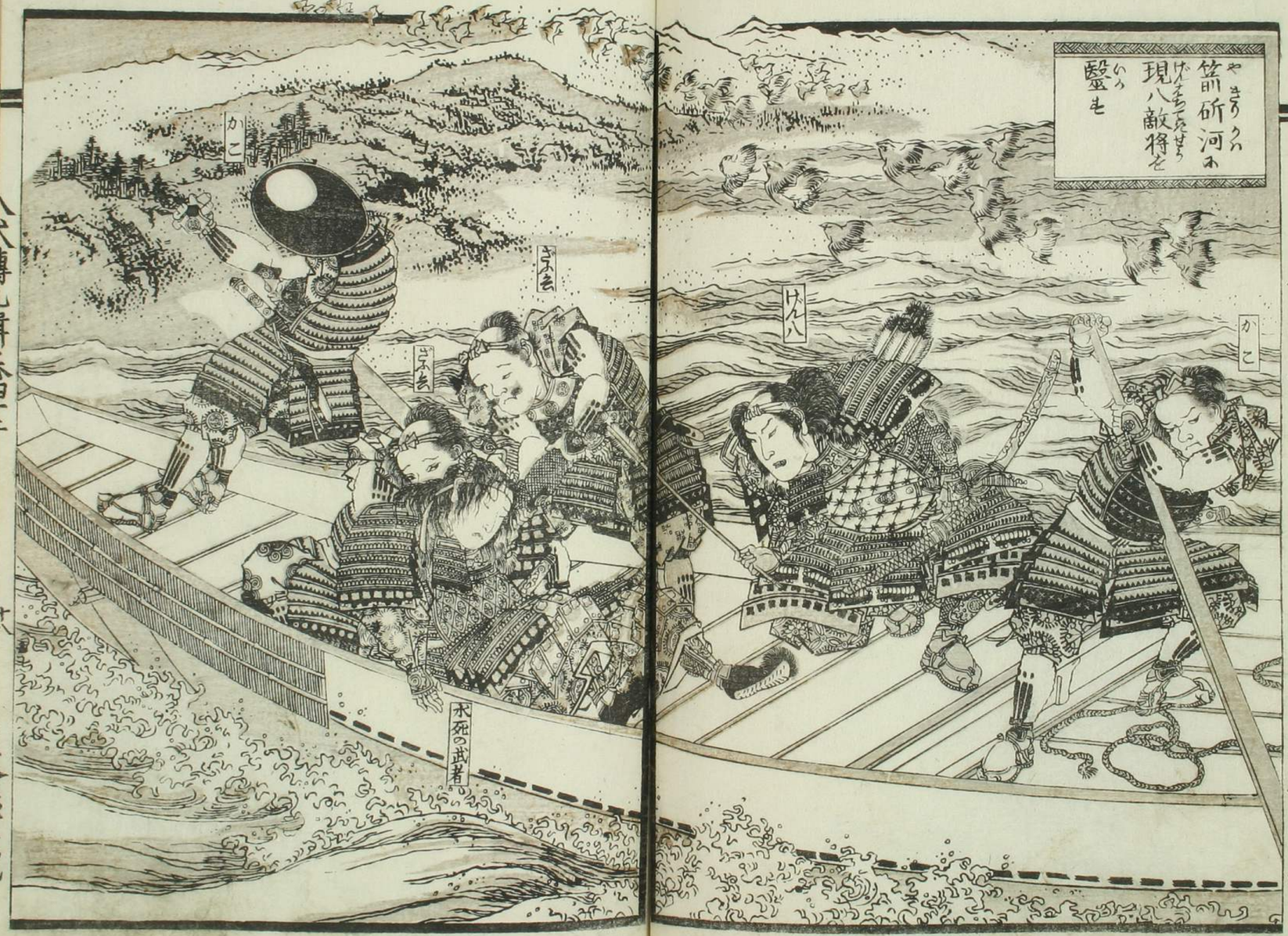
耳を敬く親兵衛が弓馬の本事い天助神祐あるが似くると其画の虎の奇譚。
軍旅の疲労を慰めく感嘆せざるいなくけり。有徳一程が季冬の外日の稍伸さ
るも短く覚て大陽斜が傾くけると現八瞻仰て信乃がいふ。寄隊い送るく敗
績をその地が在ども。といへば我们徒而居らんい要なし。和殿ら杉倉と共伯が
大江並が政木以下新参の人々を相伴あく岡山へ還りのぞもや御曹司の大江を。
さぞる待不樂ゆべれ咱ちいるより。假名町頭が赴て寄隊い既が大河をうわ渉
ゑて遠く逃去りるや不已を穿鑿り果して後が去を乗べけれといとゞ立るを信乃
諾るひて其説宜がまろ。御曹司の御厄戦を我们其折知らざりければ。
いまゞ帰陣の歓びを禀しとゞ且全勝の後日発を注進しならまいあべくぞいでくと
いひくも。軈て親兵衛と直元孝嗣们。あるろ勿さぞろ逆友と隊兵過半をあが留
めく。現八の邦助とも配分亟が定りゝぶ。信乃い則親兵衛と孝嗣次園太郎之

五十三太素が吉。寄舎五郎檀五郎並ども下の野武士笹高師们を従へく杉倉
直元と共伯が二隊の士卒と大江の戦兵と伴當を相従せく岡山を投くかつゆく
程が現八ら亦逆友と共伯が隊兵一千七八百名を領て假名町へとくいそぐけり。小程が
真間井樅二郎秋季姥雪與保直塚紀二兵漕地喜勘太ども秋季の隊兵と毎
と共伯。其地々々の荘客们が吏役を課く。自他陣殺の士卒を換ども自家い雑
兵のミゆて有名の兵を力疲見のミ是あり又寄隊ども山内頭定の遊軍絶内外
助惟定建柴浦ム弘望足利成氏の近習科草七郎望見一郎ら深痛數々
所をぬいるー。又長尾景春の先鋒の頭人樋口小二郎維龍梶原後平景澄荻
野五九郎泰儀ら処々が分散て仆れて在りそぶ中が梶原景澄い犬塚信乃と
鎗を交へー時小髭兵の外を刺れられども。幸ゆく痍深らざりければ脳を破るが至ら
ぎ。又荻野泰儀い項を刺れーが。ども其食道を外れく左の方を傷られるのミなりを

りく。恃る必死の毎も共ふ亦再生の業の驗あり。代四郎ハ腰ふ帯る神業を一個々々ふ其古ふ塗ら一て且瘡口ふ業を布くるふ輕ハ即時ふ甦生るもあり。重ハ一時或ハ二時乃時の程ふ呼吸ぬく。皆我ふ復るるを。登時秋季與保ハ再生の敵兵を勦り慰めく。里見殿の軍令ハ箇様々々と仁義の要領を説ふ。闘戰ハ已とゝ必ずる所ぬ。其本意ふ背ハ。専當の敵を殺る果ても首を捕るを功とせられぞ既ふ勝負定りて。閉戰果ても首実檢と称れぞ。仁慈ハ古のうゝのことぞ。非如敵の士卒ゝとも戰ひ難義ふ及ぶ時君の為ゝ戰死ぬるハ則是忠臣ゝ。誰ら憐むべらざらん。其陣歿の毎ハ犬江親兵衛が神授の仙丹をりく。半て返ー遣をべーとある。御曹司の御諚ふよりく。我们施業の頭人ら。汝達降んと願ふ者ハ則留め召使るべー。又其本貫ハ還らまく欲る者ハ隨意返ー遣さるべー。古の義ふよりて主張せよと。言叮寧ふ諭ー示せば。大家夢の覚る如く。其大仁と神業の經驗即妙るを欽びく。感涙坐ふ找むまでふ敬服せざふいるるりけり。然ハ是ども有名の男士ゝ古の再生の恩ふよりて降参せんハさまぞゆく。放ち遣られんとを。願ふ者も亦尠ゝ。秋季與保古の義を以信乃現八親兵衛ふ報て。且義通の下知ふ。放免せるゝ寄隊の頭人ハ絶内外助建柴浦入。樋口小二郎梶原後平二萩野五九郎科草七郎望見一郎是ゝ古の餘稱ある。然ハ古の頭人ら。ゝ異日君邊ふかゝ。里見の仁心。箇様々々と神業施ふをりく。里見數世の後も。山内扇谷の両管領ハ敢境を侵さ。ぞるーハ只この一挙ふよりそゝ。間話休題。古の日又神業の奇效ふよりて再生る。寄隊の雑兵の汐々ゝ降らんと願ふもヨメりり是ゝ皆國府臺の

城へ駈入れて。軍役ふ充られけり。或ハ又敵の士卒の神茅の效あらで。甦らざる者の亡骸ハ。足命數限りある者狹然らぬ。其性不仁ゆゑ。積惡の者ゑるべ。那在村と素行ゞ死首を土民ふ捕られて。再生の便着あるぞ。ゆゑ。これ天罰の甚しき者ゑぞ。亡骸のゑハ人並ふ聚合て。底不知野ゑ。坑ふ藏めゝ葬るふ及ばぞ。恁而この次の年ふ岡山の壤とりく。件の坑を填め果て時。國府臺の守城の頭人真間井樅二郎秋季。継橋綿四郎高潔。相共に。那坑迹ゑる塚の上ふ石像の地藏菩薩一軀を造立ゝ。土俗是を底不知の。千人塚とぞ喚做しける。ゑも亦後の話。却説犬飼現八信道ハ隊の兵。ヨく從へて。權且假名町ふ陣を移して。寄隊の二將顕定成氏景春の敗北の往方を探り。極るふ皆大河をゑ渡して。往方も知ぞるゝと云。民の噂紛れもなく。現八ゆて。あらんあらふ居らんも亦要るゝ。疾岡山へ參らんとぞ。次の日の曉。天ふ田稅力助逸友と共侶ふ。假名町を退陣ゑ。連ゑふ士卒どもゑ。岡山ふ近くゑ隨ふ。先雜兵を走せく。陣營ふ告禀ゑしふ義通君ハ。昨日自家の全勝の勢ゑあゝ。時東六郎ゞ計ひ禀して。國府臺へ歸城ゑゆゑ。ゑの故ふ當所の陣營ゑ。老煉の士卒一千有餘をゆく。守らせゆふとゆゑゑゞ。現八力助ゑハ岡山へ至るふ及ばぞ。這方の岸ふヨヨく維ゞ措れゝる戰艦ふ先逸友と士卒を載て。前岸へ渡し果さゑぞ。却現八ゑ。胡意隊の兵二三十名を率ゞ。徐ふ艦ふうち乘りぞ。漕せく前面へ渡しけり。ゑの士卒ゑ。搗合く混乱さゑゞと思へゑ。浩処ふ擐甲ゑる一個の武者の浮屍。骸海のゑとゑる流れ多ゞ。今横走る艦ふ堰れ係りて流れもゑゝぞ。現八ゑ心ともゑく見ゆ。疑ひ訝りて。眼を定めて猶よく見れゞ。寄隊の大將品ゑる者ふゆゑ。頭鎧の火形ハ白銀ゑるべ。眉額ハ黄金ゑる。水ふ透徹りて。隱々と見く。光景ハ。宛小年魚の走る如く。澤瀉の花の淪

むふ似られば現八はよく訝りて肚裏ふ思ふやう。昨日も亦隔昨も岡山下の闘戰ふ。寄隊ハ一個の仂武者なれども。謀ゑ這頭の河ふ陷て溺死せべくもあらぬ。今引揚てよく檢せざれば我疑ひを解くよしなけんと尋思をあらく聲を立て。屋よ兵毎今の艦ふ流れ係りてある。那屍骸を掖揚よと呼べば篙師們阿と応て一人蛭く鈎索をとりて。件の屍骸を拽出れば。自餘の篙師力を勠して連りふ艦を漕ぐ程ふ。艦ハ躰て前面の岸ふ寄りけり。然ども現八ハ尚岸ふ登らず。今係留る浮死骸を艦ふ掖登さて是を見るふ果して寄隊の大將ゆゑあらんずむ這人年齢ハ二十許ゆ面の色白く眉厚くゆゑ。相貌野らぬ。身ふ上結絨の薄錦鎧の上ふ桐ふ鳳凰の浮紋ある故金襴の戰袍を披下あらく皐皮の尻鞘拔ゐる黄金裾袴の大刀を佩ちて。開ぐ乳の上三寸許鵜茶の外を射られたる。征矢前一枝鏃深く立てゐ儘とれあり。且頭鎧の眉額を又よく見るふ。純金ゆゑ彫做ゐる竹均ふ群雀の花鞦ありければ原来是その後生ハ豫聞ふ德ロへ寄隊の一將扇谷定正主の嫡子なる上杉五郎九朝良主狩然らぬ定正の處長子ゆく洲崎へ寄ちる水軍の副將と。ゆゑ上杉式部少輔朝寧主なるべ。要ゆゑあれと。尋思をあらく其前をやそう援令ゆて見るふ前幹ふ漆せ。よつ四箇の細字あゆゑ大山忠與と讀れ。現八憶ゆ愕然ゐる肚裏ふ又思ふゆ原来昨日水路の寄隊と水戰の勝負ありし時ゆの朝寧を道節ゐ射て水中へ落せ。ゐゐん然ばそもあれ這屍骸安房狩相摸の浦よりして流らく一宵經てゆの暴河へ漂ひ入らく。今我艦ふ拽りしより稍見を知る事不用意ふゆゑ不用意ゐらば前より約束あるゐ如ハ噫奇ゐるゐる妙ゐるかも。ゆの人一身甲冑ゆゑるふ水底ふ沈ぎして浮流れしも亦奇人意ふ這鎧ハ薄鋏ゆ。水ふ入ゆゑも沈ぎとのふ那南倭刀の類ゐる狩然らぎハ琴高ゐ浮劍の類狩ゆゑ左まま


やまうくん
笛所河内
げんちゃうせう
現八敵将を
いのり
殺せ
かこ
げん八
かこ
さぶろう
さぶろう
水死の武者

右もあれ是ふよりく猜するふ昨日洲崎の澳ゐ必寄隊定正主の大軍と水戰あり犬阪が謀る所の八百八人刈れて敵を血ふせるるむ。あれども昨日這里ゐ寄隊の士卒の陣歿あるまう犬江親兵衛が仁術をりく。ヨく生して返せ。ふたの人い是寄隊の總大將る定正主の愛子るんふ。知らく其死を救ひぎい我君大仁博愛の御盛德ふ欠る所あるふ似て後ふ悔しく思ふともあらん歟是も亦知るべくば。然ばいとく。ふの人矢傷を身ふ負ふて水中ふ落しより大洋數十里を漂流まく既ふ一夜を歷さらんふ非如犬江が神某るりとも救ひ得るべけれと思へども先親兵衛ふ告く商量るゐ不如と肚ふ向ひ腹ふ答く主意既ふ決りるが躰て一個の雜兵を基の城へ走らせて親兵衛ふ兎を告く那神某を乞せるが親兵衛ふ時を得さ伴當才ふ二三名を招く其使と俱ふ走りけれが現八則親兵衛を艦ふ請乘せ席を讓りて告ると上ふ寫ゐし如く且其意衷を解示して件の屍骸を見せるが親兵衛隨即檢し畢く現八ふ向ひて曰ふ犬飼和殿の推量如ゐ寄隊水軍の副將と少ゐて朝寧ること違ふべくば。ふの人命數いまぐ盡ぬ。且平生隱惡るく死して二十四時を過ぎ活ふ生ざることあらんや。然ば今ふの死を救ふ拘置るが那大敵をいく懲ふ足らぬべ。ふの兎を異日犬山が偽へ少知ることあらばさぞ腹を立べけれども。ある道理が仇の子ゐ正敵ふあらざれば飽まぐ盡ゐ要る所多ゐ實ふ和殿の意見の如く是當の人を活ゐ置ぎい館の仁慈天地ふ違ふべ。兵毎又蛛く這死人の戎衣を脫せよとふふ雜兵ゐる多て找ゐ寄る者兩三名左右して水死の武者の戎衣を解ゐ果しが親兵衛則腰を撈ゐて。不死の神某を含る出る。先死人の口中へ兩三番推入れて又ふの矢傷へ推入れつ。そが上ふ又某を布ゐるどく又其胸

臍へ塗り畢て却筋力ある雑兵ふ吩咐て死人を倒ふ抱せて徐ふ推立せて。其腹内ふ在る所の潮水を吐せる壁ふ壜器と輾ーて其口より出る水幾斛なるを知ず既ふく吐盡せ時やとり推居させて是を見るふ初ハ土の如くなりける面部總身稍血色を出ー来て中脘温熱あるふ似れハ親兵衛ち欣びて徐て這人必生くべ。徐ふ城内へ舁入させて臥させるふ暫くとりーとふふ現ハ夫ろ〻て又雑兵を城へ走らせて轎子一挺舁せ来させて則其轎子ふ件の武者をうち乗せて舁せて墓の城へ遣ふ現ハ親兵衛ハ左右ふ立て程ふ犬飼ど隊の兵毎も艦より出て轎子をうち守りて斉整ち低而犬飼現ハ犬江親兵衛ハ俱ふ國府墓の城ふかへり来て則犬塚信乃ふ件のよりを告知せて且東辰相ふ就て義通君ふ吟えて却水死の少武者をそぶ儘閑室ふ臥あり。士卒ふ是を守ら〻るふ約二時許ゆく那人遂ふ甦生ちて動ー又脚を動ーゐどる程ふ稍我ふ復りけ為を頭を抬げて。己を守る士卒を見て。うち驚くの〻所以を知ず其身のあふ在るよりを悟難く士卒ふ問へば士卒則其義を告るふ心ゆく驚れ怪ふ身ハ愁ふ蘇生ある。果敢る敵の城内ふ俘囚ふ做りー悔ーさよと思ふめらう可為もるー低而現ハ親兵衛信乃等ぶ義通君の旨を請まる。且辰相ふ告て直元と共侶ふ這蘇生の少武者を城の内注廳ふ召出ーて其姓名来歴を鞫問まるふ詞を卑くー礼を正くまく叮寧ふ問慰まゐ。少武者ハ里見君臣の仁ふ愧義ふ服ーて懐陳まふとを汎む。言皆其実情を招るまけり是ふよりて這人ハ管領定正の庶長子る式部少輔朝寧ーるるうも正可ふ知れ又昨日洲崎の澳の閉戰ふ寄隊敗績まける事の光景那里の告を待ぜーて這里ふ風く吟えけり支得と失ふ天ふ在り又人ふ在り求る所ハ則得乗ると所ハ則失ふ〻〻其得失の人ふ在る者ハ又不用意ゆて得ぬ

るあり。小心あて反く是を失ふことあり。這得失い天ふ在り。人のよく做を所ふわるぞ。
譬ば老氏の所云泰山ふ貨あり。貨ふ心ある者これを得るとあざ如し。看官ふ意
せよ。蓋這陸路二人所の鬪戰ふ満呂復五郎重時い寄隊の大將朝良を深川の
磯ふ赶蒐逼りて既ふ擒ふ捕べくりーを反て大阪毛野ふ獲られ。這ゐ失い人ふ在り
又洲崎の澳の水戰ふ大山道節忠與ちを上杉朝寧を射て落しーれども矢場ふ
其首を捕るふ由るく反て現ハふ其敵を獲られて剰親兵衛が神某を朝寧ハ
再生ち。這得失い天ふ在り人のよく作を所ふあらぶ是故ふ曰得と失い天ふ在り又人ふ
在りよく思ハぞいあるべくらぶ世の人ふの理ふ暗けれが惑ふて且天を怨ム人を咎めざるハ
るーを醒さまく欲ちるハ作者の老婆深切ぞ。是本編の本傳ぞる所以ん。越ふ先
其緒を解く道ハ即朝寧を射るるハ後回水戰の段ふ具へ看官前後を照してアるべ。

南總里見八犬傳第九輯卷之四十二上 終

南總里見八犬傳第九輯卷之四十二下

東都 曲亭主人編次

第百七十回

神變を操りて伏姫猶子の初陣を華やかを
舊君ふ謁ーく信乃父祖の忠義を詳ふ也

是より先ふ犬塚信乃戌孝杉倉武者次直元及犬江親兵衛仁ちハ新參の
義士政木大全孝嗣並ふ石亀次郎大越鄭二向水五十三太枝獨鈷素ふる吉
須々利壇五郎二四的寄舍五郎ちの義士と其徒さへうち合せ一隊の者ヨヨく
從へく。十二月八日の下晡ふ岡山の陣営ふかへ來ぬ程ふ義通君ハ自家勝軍の
より時ぞ。時東六郎辰相ぞ薦め稟ふよりて岡の陣営ゆ鳥山真人以下老
煉の士卒一千有餘を留め戍らぞ。既ふ國府臺の城へ還らせぬ由と雪えりぞ
信乃ちハ徑ふ笹前斫河を舫渡りぞ。甚臺の城ふ歸陣ぞ。隨即東辰相ふ就く。

寄隊は皆敗績なく。迹なく落亡せり。政木孝嗣們が義侠勤軍戰功の多。
犬江親兵衛が歸東武功拔萃の多。並ぶ姥雪代四郎直塚紀二六漕地喜勘
太郎が武勇の挺出の多。又二四的寄舍五郎須々利壇五郎們が忠戰の多。又犬江
親兵衛が意見なく。神授の靈丹を施行して自家の士卒は疾く敵とのへども
忠死の者は死を起し生を回して降らんと請ふ者は是を留め本貫ふかの去すく願
ふ者は饒して放ち遣るべし。但し滸我の佞臣横堀在村新織素行は信乃が射て
斃されし時。土民が其首を捕へ。齎せ積悪天罰の多。又大飼現八を猶殘
燼を鎮んの為ふ權且假名町ふ在陣の多。又真間井樅二郎姥雪代四郎直塚
紀二六漕地喜勘太は或は施茱の頭人を奉り或は施茱の裁領とせく。猶
昨今の戰場ふ在勤の多。今朝しも寄隊の三將再戰の時那野豬六十五頭又
忽焉と見れ歩く。自家を援けく。寄隊を敗り。出没不測の多きでも漏き

ずく告禀をしく。義通感悅なべくもあらぬ。六の宵正廳ふ出まくく。信乃親
兵衛。並ふ直元喬梁政木孝嗣さへ召よせて。對面ありけり。六の他犬飼現
八田税逸友を尚假名町の陣中ふ在り。又潤就鳥多古内美容は深疵を
負ふく。臥てあの城内ふ在りしと。親兵衛が來ぬるふ及びて。又神茱の奇效ふよりて
亟ふ愈ることなほ古内のごとくぞ。鬱ふ義通の從軍なる者の疵を負へる
皆親兵衛が神茱ふて。一人も恙なくけり。又次國太郎三五十三大素多吉們い
義侠とのへども町人と又直塚紀二六漕地喜勘太は再臣なり。又須々利壇五
郎二四的寄舍五郎們。他郷の野武士なりしも亦俱ふ功いあるべけれども。防禦
使及隊長なると。必同列なるべきとく。是ぞ六の次の日犬飼現八田税逸友姥雪
代四郎ぞが次り來て。義通君ふ拜見の後另ふ皆召出されて。功を褒させの
ひけり。間話休題。六の宵義通君は犬塚信乃犬江親兵衛杉倉武者助

継橋綿四郎政木大全を召よせ。両茶の礼を賜る。東六郎執達う。給侍ゆゑ七浦六郎朝夷三弥。白濱七郎を侍りけ。当下義通信乃親兵衛大全ぞ。軍功を誉させ。うち譚ひ。曩ゑ犬飼現八。斎藤兵衛太郎を生拘りく。当城へまゐらせ。是軍功の首ゆ。今日を又寄隊の副将上杉五郎憲房を擒ふ。岡の陣営へ牽せ。其勲功。全く現八ふ。似う。然りけれども。信乃ゞ火豬の謀をのそ。寄隊の戰車を焼くふ。あるぞ。今日の全勝を。ゆ。有徒れば其軍功を正副伯仲をといん。狡是ゆい。似るべくもあらぬ。咱ぞ。二犬士と直元逆友ら。ゞ。開戰を援んと。曩ゑ岡山より出陣。ける。途ふ長尾景春の三隊の勍兵ふ撞見して。開戰難義ふ及び。折思ひけるに。政木大全ゞ。親兵衛と交遊の義ふ仗りく。他ふ立ち代らんと。同憂同宿の義士。次圓太郎二五十三大素ふ吉とりゆ者と共侶ふ。其徒六七十を従へく。突然とーく。援け来ぞ。那鋒矢を折けども。尚勝負を分ざりーふ。又幸ひふ親兵衛ゞ。京都より。かゝ。ぞ。伴。当毅兵新参の義士們と。倶ふ。数十名。我ゆく。援て。一瞬間ふ。那勍敵を。殺頽し。轍ゑ走らーて。剰。景春の愛子と。少え。長尾為景を擒ふ。く。当城へ進らせーハ我面をーも。起ーる。這大功ハ信乃現八ふ。拮撟をとゆ。まくのゑ。孰を伯と。孰を仲とせん。只感悅の外。あるぞ。と。年ゆ。倍て。怜利。も。詞。委ゆく。稱へゆゑ。辰相是を。執合ーて。御諚畏ゆ。羨りゆ。抑二犬士の才幹武勇ハ。左右ゆ。べくもゆ。ゆ。ども。就中犬江仁ゞ。殺伐攻戰の場ふ。于て。仁慈の心を喪ゆ。敵ふ。施。某の一條ハ。宋襄の仁ふ。似。れども。武をのそ人を。征ける。者ふ。威勢。必長久ゆ。ぞ。徳をゆく人を。征ける。者ハ。十世の後まで。川流。あく。淳和せぞ。ゆ。則是館の御本意ゆ。を。親兵衛ゞ。よく。仕ゆ。と。誉ゆ。親兵

衛推禁めて。御家老仁を差殺るあやまりて。舘の御盛德い格別に臣多るハ今日まで今日羨りて。御軍令ふ従ふのみ。細人の威勢あるハ敢忌憚るとて。懲して新ふ做まあるぞい爭ひ已とたゞ舜ふを信乃ハ諾るひく其言愚意も相似たり辟言ハ那靈豬の如ハ牙ふ蕉火を結着られば戰車を焼ハ然るとるとも其折一頭も火ふ死ぬ又敵ふも撻殺されぞ征方も知ぞるりけるふ亦再戰の折ふ顛れ出く自家を援けて敵の騎馬を駈仆て又駈破りて撥消も如く見えぞるりゆハ意ふ這奇事い則當家を守りゆふ伏姫神の冥助るぞい。猛ハ獸のいふく。徳る掙ハを做をとあるんや畢竟我君年來の御善政の餘福ゆく臣多ぐ功德るぞるを御褒賞い倒ゆ當りくくひと謝るを義通君推禁ゆ。信乃其靈豬のるいも又一層の奇事あり。六郎貝ふ告ぞや。と仰ふ辰相阿と応て膝を找めく談るもう犬塚犬江自餘の人々も听ねか。御尚ふ郎君岡山より御歸城の談定りく既ふ出んとあるふ程ふ怪むべ。一箇の野豬大ハさ犢ふぞるハ一個の武者の鎧の表帶を牙ふ引掛け背ふ載て走るとと飛鳥の如く。岡ふ登りて郎君の御馬前ふ來よければ。伴の衆兵吐嗟と騷ぐく。防ハ禁んとせ程ふ野豬い背ふ載て。武者を撻と振隊半て走りく往へ方い知ぞるりゆハ。未曾有の奇事ゆれば咱ち則雜兵ふ件の武者を扶起さゆくよく見るふ大將品の人るべ。戎衣都て綺羅雄ゆるゞ既ふ半生半死ゆ在りくハ茱萸與へ勦せく。且其姓名來歷を鞫問るふ其武者いハざるとを。則寄隊の大將ゆ。滸我の左兵衛叔曾成氏人鄕ふ自家敗軍の折鈍くも暴豬ふ馬を仆されて。身も駈られハと思ひ。のこまくへ。ゆく來ぬるを覚ぞ意ふ這里い敵陣ゆん。命運の傾く所今ゆら免るくふ路

あらぎ。左も右もせられよと陳ずれば。咱等則答ふらく。御推量の如く這地方は岡山の陣営ゆく。目今義通歸城の折へ御心易く思召ね寡君義成は仁人なるゆ。父祖の舊交ものへ御命ふ及ぶべくもあらぎ。先圀府墓の城へ俱ーまろうん卒ぬへと慰めくそぐ儘馬ふ投け乘せく。士卒ふ駆ふく守せく。當城内へ俱ーて来ろ。則一室ふ屏籠て番士を置て守らせ。獨那君のこころぞ犬飼大江ゲ橋ゆく。當城内へまあらせー。憲房主あり為景孺子あり。又那須藤盛実あり。ぞも麦人之隊長ゑれば各檻室を異ふーて衛士ヨヨく附置ぬ。城内實客ヨヨ多ふ是和殿ぞのる柄之愛ゑゆふあらぎやと告るふ感ぎる。親兵備はらへ直元いうち驚くきぞ且呆れ且歎ひく答るやう原来かの折成氏主も靈野豬ふ駈られく。岡山へ移く去られー秋臣ぞい闘戰稍克ゆく。敵を漏さじと思ひーのを。然る光景を見ざれば知らぎ。とむるゆく。悟るふ由もゆるけの。當下信乃は謹く。辰相ふ答るやう。目今創て業る。那靈豬の掙ぬ。実ふ奇中の一大奇事ふて人のよく做ゆ能ゆふあらぎ初臣ぞは前斫河をうち渡ーて。寄隊を逆へく戰ひ。ども成氏主の一隊ゆ。直元逸友をのを相向はせく。臣ぞは一トくびの前を飛ー。鋒を交へはぎ。其故如何とるゆ。那君は臣ぞ大父大塚匠作の主筋ゆく。父番作も當初は其餘禄とめく。成長れり。又義兄弟犬飼現八ゆ為ゆ是現在の故主へ今い恩仇地を易く。讎敵の思ひをせるゆとも只君命をのを倡て。鋒を交へ前を飛ー。戰ひ克て或は生拘る或は其首を捕らば人其是を何とるゆ君子の忍びぎる所ぞれ。正人ゆ憎るべー。ゆの故ふ今日の再戰ゆも臣ぞい真間井秋季を為く。顕定主と挑を戰ひ現八も亦継橋喬梁を副とーて憲房主と戰ふく。却成氏主の一隊ゆ杉倉と田税を指向く。二面俱ふ戰克

まい。霊猪の援ふよりて。介るふかの折直元逸友両個をも。成氏主を擒ふ
せば臣もゞ做さふあらねども。臣もゞ防御の正使ゆく。其軍配ハ外ゆくぞ。則
臣もゞ隊配ゑれば。五十歩百歩の差池あるのみ。臣もゞ擒ふ做せ。ふ同じ。その
故ふ神明地霊那霊猪とりく。成氏主を駈馳せそ。岡山ゆゑ御陣へ饒りく。
りく。郎君の御ゆふ入れく。這回郎君初陣の御ゆ柄ふ做されゝば臣もゞ故主を
擒ふもと云悪名を汚ぎゆりあれと。今とを悟れ其奇其妙。凡智ふ量知られ
や。必是伏姫神の神通廣大ゆて物ふ憑ゆ。真助ふ疑ひゆゆ。と思ふ
も疎ふ。ふ心の誠うち出く。言細やゆふ解諭せば。義通感悦ゆぐもあるぞ。
況や辰相直元孝嗣もハ説れて思旋らせば。信乃ゞ誠心始と云れゞ。裏ゆゆ
飽ゆぐ情ゆゆ。那君とも怨ることゆ理義分明ゆる高論い人の惑ひを醒
ふ足れゆ。ゆも学問の力ふそと感嘆まれば親兵衛も有理々々然と。と

黙頭く。危言とぞ稱へけゞ。然ゞ義通凱陣の後。その義を厳君義成
主ふ告ゆ。ゞ義成則斜斫河原ゆ麿利支天神へ堂料五十貫
文を寄布まゆく。且其堂内ふ伏姫神の神號木主を置くと。許を
べ。と制度せゆる是ふよりく。麿利支天の別當西妙。並ふ初那野豬六十
五頭。虚舟より援陟して養置ける荘客们ふ米銭許多賜りゞ。皆困
恩を拜戴しく歓ざるゆるけり。ゆを是後の話と却説。その宵國府臺
ゆる城内ふ。信乃もゞ云云と説。直を程ふ小夜深ゆゞ親兵衛則
計ひ稟しく。政木大全ハ苦戰の疲労ゆゆ。疾憩室へ退りく。睡ふ就べ
そ。身の暇と賜ひゞ。案内者もゞ孝嗣を倶して外面へ退出ふけゞ。登時信
乃ハ又辰相もゞふ談ゆゆ。その地の大敵皆散落して稍静悄ふ垂と。
明日ハ夙ゆく急遽脚の使者ゞ洲崎の御陣へまゐせて。先その義を告まゆ

て。且那里の御安危を伺ひなまらぶいあるべくらぶ。但し彩徳口なる防禦使莊
次小文吾いいらるや。先他ぶふ仰合されぶい不便ふそゆめと。議されぶ亦
親兵衛も俱よぶ。臣ぶい京師より御使を果し来くらまぶ稲村へ進ら
ざれども。鄙ふ信乃よ偽達せられて。防禦使たるぶよりの合命を奉り。且御
大刀さへ賜りられば。寄敵の地ふ在らん程い閉戰を援げなるべし。寄敵
既ふ退くるふ猶當城ふ掩留せば。忌れるよ似く不忠るべくや。と。議論を辰
相ちぶて二犬士の意見其理あり。然らば行徳へ振照倶教二を遣して。
那里の安危を問もべ。又洲崎の御陣へ。継橋綿四郎をまゐらせて。その地の
勝軍を。汪進せん犬江生い従来の駅兵両三名をそへ。鄙東の義を告な
ばて。寄敵弥在らぶ。做るべ。その折稲村へ参るとものまぶ遅ふあらざるべ。
と議されば二犬士の意ふ儘せく。直元と共侶ふ退りて連署の注進状を

筆東ふ寫せるぶ。既ふして暁天ふ及し時候振照倶教二弘經い義通君れ
命ふよりて。駅兵幾名ら領て彩徳口ら。犬川大田ぶ陣営ふ赴ふ。那里
より莊次小文五吾の使として。満呂再太郎信重と。安西就次景重ぶ隊の
兵を率て。快船ふうち乗らて。暴河を渡り来て。犬川大田ぶ勝軍の告文
と。信乃現八へ與る書状を呈覧ふ是ふよりて。這再太郎い満呂復五郎
重時の養嗣ら。ぶ者ら。も又就次い安西出来次ぶ。獨子ら。ふよりも
知られて。那里の閉戰ふ莊次小文吾ぶ千葉自胤と大石憲重原胤久ら。を
擒ふ。ら。亂久い深痍ぶ。命危ふよりも告文ふ載らるふ且再太郎就次
ぶ口状ふて具へければ。東辰相欽び誓言く。這両個の少年を見参ふ入を
ぶらば義通則再太郎就次ふ牽出物を賜りて。則這里よりも方僮
振照弘經を遣せらば若们ぶ還りらるざる以前ふ這方のふい知らべ。只

その上に館へ注進をいそぐべしと仰合させて。身の暇を賜ひけり。その時犬江
親兵衛が那里ゆも刀瘡児ヨヽと呼ぶ。則神茱一盒を荘介小丈五郎が
餽り遣せしが那隊の士卒の重瘡いたく原瀧久の如く必死の人も死ざるを
ひとりけり。偖而継橋綿四郎喬梁と犬江親兵衛が暇乞の朝安房へ
急遽脚の使を差ゝ。洲崎の陣営へ赴けり。有偖ゝ程ふ五十二太素
ゆ吉が次圏太鄭三郎と倶ふ見参の礼果て。両圏河原へ退らんと請ひを義
通固く留めぬれども他们ハ只ゝ氣を使ひ任侠を磨くのみゆく。武士ゝ活ゆを
欲りせも熟ゝ活業もひへ枉く身の暇を賜るべしと願ひ禀まふより。親兵
衛孝嗣も是を禁ふ術ふ及ゝと呼ぶえ上ゝ。則五十二太素ゆ士品ゆ六七
十名ゆ。當坐の賞禄をヨヽく賜ゝく。異日稲村より召れるゆ必ずあるべし。
と仰せる。その時亦孝嗣も意衷を陳て。既ふ犬江ふ代らまく欲りあり。志い
果ゝゝ。今ハ犬江のかへり来て。且寄敵落亡ゝれば。その地ふ所用ゆ身ふ
ゆ向水们と共伯ふ退るべしと。親兵衛何でか饒せ義通君
も其言を信へ呼て放ちあるべくもあらず。暫待ゆく厚ゆければ孝嗣ハ今ゆふ
辭ひ禀さんハさまゆく只得次圏太鄭三郎と倶ふ當城ふ留りけり。尓
程ふ犬飼現八ゆ寄隊敗軍の往方を穿鑿果て。田税逸友と倶ふ
假名町を退陣あて。當城へかへり来ぬる程ふ箭斫河を思ひけるに水路の
敵将扇谷式部少輔朝寧の水死を甦生らせて。更ふ擒ふあぬるゆ
既ふ上ふ見えゆる如ゝ。現八及力助逸友ゆ敵将足利成氏を霊野
豬ゆ駈廝ゝて。義通君の初陣の華ふ做せりと。奇談ふ胆を浅ゝ相
賀ゝて。逸友と共伯ふ義通君ふ見参せ。又真間井樅二郎姥雪代四
郎直塚紀二六漕地喜勘太ゆハ神茱施行の事果て。その日の曛昏ふ

かゝる事ふければ。親兵衛い明日の早天ふ代四郎以下の每と。孝嗣次圉太郎二名。寄舍五郎壇五郎。その黨さへ相伴ひて。安房へ還らまく欲し。徳遽しく折るれば。親兵衛が京師ゆくありしを。又歸路のゆい義通君ふも辰相ふも。告るふ具ふ及ぶるものゝ。事ふ觸てい竹知る者あり。然らでも信乃ぞ竹ゞ竹つる隨ふ義通君ふ告稟せゞ人咸これを知ざるいなく。奇異ふ驚ぬ。武勇を誉てゆく。茶話ゆそ話ける。間話休題。介程ふ信乃親兵衛い。敵といへども生口の敗將隊長を侮り卑めず。義通君ふ竹ゞえ上て其款待ふ苦困なく。敬言固の士卒を徼めく。至礼るゆを饒さでやゞ。現八も共伯ふ。三四室なる圉圉を看輪りく。憲房為景盛実等と問慰るふ。憲房為景を羞く頭を拾げ。衣ちち被ぶく。陽睡て居り。又成氏の身邊ふ造るふ。是ゆ亦敬言固の士卒ゆちち圍れく。燈燭の下なる裀の上ふ坐て。ゆと

叉き頭を低く垂り。當下信乃現八親兵衛い鎖を備子ゆふ啓せそ。俱ふ檻室の内ふ找ゞ入く。額御ゆ拜て安否を諮へば成氏い驚ゆなくらるゆと解ゆ。急ふ礼を返して。和殿ゆ是誰そと問ふ問れて信乃い膝を找めて敬く答るやう。早くも忘れさせ給る狹臣ゆい則生人なるぞ。君ゆ兄ふ御坐せ。春王君安王君の小傅なりける。武藏國豊嶋郡の人氏大塚直作二成ゆ孫犬塚番作一成ゆ獨子なる。犬塚信乃金礒成孝ふて侍る。徳壽さへ言故ふ。それど往時嘉吉の擾乱ふ結城十萬の義兵三穂を靡く。竟ふ弓折矢勢竭く。両公達い敵の為ふ俘囚と做り玉ひ。折臣等ゆ大父二成ゆ殺く出猶戰ふく。陣歿をゆそけり。と口碑ふ傳へり。當時番作十八歳父の遺訓より重囲を殺脱。像見の名刀村雨丸を。腰ふ帶く。両公達の去向を悄地跟まつく。美濃の垂井ふ至る程ふ痛しゆる。両公達い金蓮寺ゆそ御事ゆ。

番作は其御終焉を見るに堪ず。愴然と跳り出て創るの武士を呼び一刀に斫伏して両人公達の御首級を奪ひ奪ふて辛くして三勢の敵を殺脱れ信濃路に赴よけれど路傍の道場に両公達の御首級を悄地に瘞めなりし小ふる当晩番作い宿を投め草庵に入て束と唱微を少女に逢ぬ開い結髪友の妻なり。其父も亦結城に匠作と倶に陣歿者母さへ早く世を去りて所寓る死身の今は天縁の熟き所遂に送に捨ふ忍ひ則是臣等が母へ折り父い金蓮寺に受る痛痍に堪ざれば。

説麿に赴き湯治して稍刀瘡い愈れども是より行歩自由ならねば夫婦相推て辛くして故郷に武蔵の大塚に帰り是より氏を改めて大塚と唱微して兵法武藝を郷黨に教へて年を歴る隨に臣等を生ひ幸に死い口是の三子で母い臣等が六十七歳の比舊病重りて身故りぬ。

父も年来ヨリ病りしに則父の姉壻る大塚墓六と唱微せ細人を則大塚の郷の荘官に。其心術便僻り且我父の姉亀篠も同悪ゆ憑しく思ふ父が年来秘蔵せる村雨丸の名刀を言に假托け術を以て奪令ゆ欲せしと父い猜ゆて防げども既ゆ年闌て病痾旦夕に身逼るを知て命長らへと覚期ゆ一夕臣等に父祖の忠義と村雨の大刀の伝来を説示せと右の如く。汝成長りし時尚我の御所へ参上して這名刀を献りて。且其大刀の伝来と父祖の忠義を弥増上て仕官を願ひなれと教る詞の露ゆ。光王丸を刀を抜く腹掻斫て俯伏りぬ。その時臣等も十三歳親の遺訓に従ふ。憑しく思ふ伯母夫婦許養ゆ堪がたき難苦を忍ぶ年を歴て。身い稍成長りしに今茲より六稔以前文明十年夏月の時候臣等尚我に赴く隨即御所に伺候ゆ村雨の大

成氏擒ひなりく
夜三犬士手吊
慰めらる
けん八
武士
武士
武士

刀を進らせ。ふ猶思慮足らぎーて。其名刀八夕人ふ拔易られーを悟らぎう。
況然ハ横堀在村ぐ贋物へと者破りく一言半句も分説を听ぎ反く
臣等を隣囲の間諜児るべーとく。猛ふ居ヨの力士ふ課く。擒捕せんと
欲せーぐ臣等勢已ことを泛ぎ。絹捕の力士を殺拂ひて芳流閣とろ嘆做
る。高楼の屋上ふ攀登りく。脱れ去まく欲ぜー程ふ。御内の力士犬飼見八
ぐ登り来ぬるふ組打ーて両失脚ぎつ。滾落く閣下る河邊ふ在りける。船ふ
受られ纜断離れて。身い氣絶ーて在りー程。船い急湍ふ推流さまく。行
徳の浦ふ寓りーを。當日地方の豪傑。大田小文五吾親子ふ救れく。死ざる
ことを泛れども。滸我ゆく受くる刀傷の。破傷風ふ做りーぐ身い病臥く
古那屋ふ在り。古那屋ハ則小文五吾の親。文五兵衛ぐ歇店の號へ。折ぐ横堀
在村ぐ沙汰ーて。御内の侍新織帆大夫素彷ぐ臣等を緝捕の頭人を奉

アく。賜兵を多く從へて。彷徳へ来て。空數奉りーぐ臣等ぐ窮死逼迫く。
るべうもあらぎりーを。小文五吾ぐ妹夫這里ふ住る。犬江親兵衛ぐ父へけ。義
士山林房八ぐ其妻共侶身を殺ぎ。其鮮血をりて。臣等ぐ痍ふ濺ぎー
ぐ。奇禁の效衛ぐ。我破傷風亟ふ愈て。身ハ口い恙るぎとを泛くるのみ。
らぎ。房八ぐ面影のよく臣等ふ肖さるふより。小文五吾則其首をりて。新織帆
大夫を欺ぎ。還ーて。再厄遂ふ解けられば。義兄弟と共侶ふ遊歴浮浪六年
年を麻ぎ。程ふ臣等ハ同因果の義兄弟俱ふ犬をりく。庵字ふ做る者八
人ぐるべぎよりも知られ。且未生以前より里見殿ふ宿因ありく。家臣ぐるべぎと
悟れども。ぐまぎ其時至らぎーふ。今茲の夏四月の時候。君臣の天縁竟ふ熟
ぐく。皆共侶ふ安房へ徴れく。「龍遇特ふ浅ぐ。恁而這回の闘戰ふ臣等と
犬飼現八ぐ義通の隊ふ隷られて。則這地の防禦使ぐ。聊螳臂ぐ抗ー

文溪堂藏

より連勝して這田地に至れり遮莫微功に誇んとて家の賤譜を稟ずあらぎ呂い父祖の忠魂義胆を御聽に入れんとそヨヌ辯に及びぬ其將六日は菖蒲なるべく十日の菊に似れども己れの折をもて先人の志を告まうさぬ不孝なりんと思ひより言憚らるくぬ心の誠うち出く言葉に説果てゆをう後方を見るべくも身を退うまて坐を讓れば現八やをう膝を找ゆて成氏主に向ひて額衝て且告るやう臣等い素是微賤の小卒侶る瀬に立ぬ御視徽を饒されんや然るを思尺去なりて名告るべ烏滸にへども本賢へ態まく武藏る豊嶋大塚の氓他郷より流寓の糠仆が擂子ろーと極深の中より御内の走卒犬飼見兵衛に養れて滸我の藩中ゆく成長りぬ養父没して卑職を嗣く則犬飼見八と喚れーい一番時の程ゆく今を里見の防御使る犬飼現八金碗信道をそは臣等も貴藩に在りーー日兵員ゆ因卑職ゆれども君に仕へく私るく忠義を盡むに至りて祿のヨヌ少と職の尊卑に依るべくもいぞ是を足をもく髫歳ゆりー初より師を擇ん技を励まく兵法七書弓馬剣術緝捕白打に至るまで学び効ぶとゆ一ーー然りけれども御内の冢宰横堀史在村い能を媚ぶを賢を奉げぶ反て臣等が媚ぶ求るとるゆを憎ぶを職を轉じて獄吏に做ーぬ臣等へ牢獄の小吏へるとと其情願に有るゆ屢辭ひ伺りーを在村不敬の罪とー誣て臣等を牢獄に繫ぶる。然而一日大塚信乃を緝捕の力士们芳流閣上に挑を負て死を致ぶ者ヨヌるーーぬ在村則計ひ稟ーーん臣等を獄舍より饒ーぬ。件の緝捕を誅ーーぬ臣等則芳流閣上に攀登りく組打の顛末へ日今信乃が口状に具へ然べその折氣絶して觔斗徳へ流れ来る。我に復りて由来を問ふに信乃へ疎忽の失るのを擒捕らるゆ罪に有るゆ且臣等が実父糠

仇ハ則信乃と同郷なり。信乃を紹仇のみ間あり。奇遇ハ又只これのみにて。
信乃と臣茂ハ宿因あり。異姓の弟兄さる思ひ。徽ハ迭ふ身の内ふ癒あり。
形牡丹の花ふ似くり又感得の霊玉あり。小文五郎と親兵衛も同因同果の
癒あり王あり八人ゐるべきなり中ふ。あの日この時小文五郎と四人相逢ふとを沼
ゐる。偽れば信乃ハ罪ゐる者ハ必捕るべくなり。然ばとて臣茂只一人阿容
阿容として尚我へ還らば又其罪を議せられく。必在村が為ふ死ん進退
維谷りぬとの故ふ信乃と倶ふ躯れて彷徳の古那屋ふ居り是より浮浪
六稔と歴く。義兄弟茂と共侶ふ召れて安房へ参りーハ。ふも亦信乃が口
状ふ異へ薄情ゐる君ハ只在村が奸虐私論の誣言とのみ信容さぬのみを
のく今も猶信乃と臣茂を憎ーとのみ思ー召まるめ信乃と臣茂が意衷ハ
ゐくくを非如恩仇地を易く今君命ふ依るとの人ども舊君故主を敵と

逆へて前を飛ー鋒を舞ーて死を爭ん本意ふあらぬ。ふの故ふ始より君が一隊の御陣
へハ杉倉武者助直元田税力助逸友をのみ指向く信乃と臣茂ハ顕定親子ハ隊
と戦ひふ料らぬ霊猪の援あり君ら敗軍の時ふ臨まそ。駈く背ふうち駝せて我公子
義通の陣営ふ致せーハ神明佛陀の冥助ゐ。信乃と臣茂が始を忘ゐ胡馬の
北風燕鵲南枝の心を監とゐひけん一大奇事ゐそひふ。とのられて成氏ゆ。羞て連
ふ額ふ汗ゐ。ゐまゐ答ふ及ばぬーを信乃ハ又慰めく君知ー召れぬ鄙ふ横逝在
村と新織素ふハ御陣の敗を見ぬ二騎連立て落亡せと底不知野の邊ゐ。
臣茂ら迂蒐く射て斃ーゐ然るを地方の荘客が其首を斬りそ来て実檢ふ入れふ
ふ宣ゐ君這回の軍令ふ只当の敵を殲ることを許て敵の首を捕る者と功とせ。
然ると在村素ふハ倶ふ死首を土民ふ捕られて軍ーふ梟られハ年来君を惑
ゐて賢を害ひ民を虐げく家を富ーたる天罰ふそひるると解れて成氏嘆息して。

いつく顛末皆金玉に異ならず我不明にして始より和郎等の賢良英才を思
ふて鄭國の宝に倣しつる悔ハ楚懐の憂に同じ島の頭ハ白くなるとも生て游我
〈深りかくけん覚期ハ既に究めつ。と答て嗟歎に堪ざりけり登時犬江親兵衛我
を拝して辞ていはく。臣等殿さのうる歎せゆひて臣等も里見の防禦に使る犬江親兵
衛仁に似たり。言自負に似てゆへども。寡君義成が仁義の家風に相従ふ我们
惻隱忠恕辭讓是非の礼ひゆえとくのゆへ。昨今の閉戰に自家の
ひらえ敵の士卒の或ハ深痍を負ひ或ハ戰死せ者ハ皆是其君の為に命を惜ねば
忠臣ゑ豈是を憐ざらんや。その故に臣等が秘藏の神茅を施ゆて君が隊の兵士等
えつる科草七郎望見一郎その他寄隊の士卒の死を救ふて其恩ゑんと願ふ者ハ饒て
其主に復しゆえ敵の士卒もかくの如し。君に於て何ぞ義成安房へ逆ふ。
昔舊交を偕めゆえんと言叮寧に慰れば信乃現八も復共伯に臣等君ゑ辱めんとそ

父祖の上さうち恥て立去と禀ふ。其忠義の心操を知せまうくんと思ふのゆえ
又ハ見参せべけれと告別ふ外面へうち連立て退出けり。その時左右の檻室に
在る。憲房為景盛実等ハ皆ゑ守護の士卒に至るまで。這ハ大士の忠孝博愛
始と推て故を忘れぬ真面目に是ゑ感服せざるいなりけり。然而犬江親
兵衛ハその宵東辰相に意表を告て義通君に身の暇を請ふ程に真間井秋
季姉雪代四郎直塚紀二六漕地喜勘太们に施茅のゆえ果てゆへの来ふけりとそ親
兵衛ハ次の日の早天に信乃現八並に直元逸友以下の隊長諸頭人に相別れて。姉
雪代四郎直塚紀二六漕地喜勘太们の伴當野兵及政木孝嗣石亀次國大
越鄭三二四的寄合五郎須々利壇五郎と其隊の兵六十餘名を引て名馬青海
波ゆうち踏りつ洲崎の陣営に赴くに昨日の朝洲崎へ暇兵両三名を参せて歸
東の義を注進ふ。洲崎の濱の勝軍ハ既に朝寧に主の口中ゆく為ふ

今はらいそぐ要るゝと今番の路を貪らば先大川大田を訪ふ那里の勝軍の事の光景とよく尋問ひ知りて両館に凛上んとそ其の日初徳へ立寄りけり然るの時荘介小文吾は猶今井河原の柵に在り昨日旨持傳杖朝經と二の精兵を測高の陣へ三忠遊脚の使ひを起せり閑戦全勝の支並に生口の交名を注進せるとの旨石濱の千葉の老黨士卒は自治橋に集りぬと知りて驚死を怕るゝ大くは然で八這孤城を入〻く抱へ〻て主君の妻妾諸臣の宅眷と資財什物を各舟に執乗せて城を棄て落亡けりその義を風く河原の柵に居る者ありて荘介小文吾うち笑ひて我も捉ふ

ゆゑ〻ゆゑ〻に盡剛の野武士山賊の據るともわんとて隨即登桐山八郎良干に家兵一千二百を分ち授けて亟に石濱へ遣て件の城を守らせけり有徒り一程に今日とは知る犬江親兵衛姥雪代四郎と政木大全石亀次圓大鯰郎三と新附の野武士三四的寄舎五郎須々利壇五郎們を相伴ひて國府臺に来ぬれば迭の欽びをべうもあらば躰て柵の大廳に賓主の席と設ひ月屬會話の時の移るゝ覚ぎ滿呂復五郎再大郎安西就介大樟村主も這席末に列りて倶に欽びを盡せり。當下荘介小文吾次圓太ふうち對ひて曩に稲戸津衛が好意を片見の躰処を脱れ去りし時足下の宿所へ立まて報知せまく思ひしかども人に知れんとを怕れて果さりたるとち勸解れば又次圓太郎三に毛野が智計の帮助を再生ら欽びたまへば便宜ありしに今番ら多く時至りて安房へ赴くと云欽びを告るとを又荘介小文吾以下の毎に孝嗣の人と為て最慕ふく思ひしが其管待大江姥雪代四郎兵衛に昨日飽られ神茉ゆく原亂久の深痍に出たるその他の疵児に用ひて即効あるとに若ら但惜むらく戰死せ敵自家の士卒の骸に惴りて皆埋めしかば神茉ゆく原とをいざ何とぞかく幸ひにも意ふに比自是命數歟と欽然ら業報ゆえと云主客の相譚に闌る時滿呂再大郎と安西就介が酌を執て盃を勸る程に日景は既に敵に

○文溪堂藏

去るべ親兵衛急ぎ別を告て且同伴の衆人をのそゞ立ち青海波の馬を牽
せて今井河今又渡を船果て上總路投て立出けり然ば親兵衛ぞ其の日の進止さ
ぞ待らん安房ぞ在を君と親とをも尋ぬ只其情義の故とのそ這頭ぞ路草茂
喫げ〻い相応しくぞと思ぞ者もあらん并い人を知ざる之蓋這陸地二ケ所の閉戰ぞ一
箇も軍監ぞ。親兵衛い悄地ぞ東辰相と商量て且義通君の命を稟て其
職を兼ぞ其ぞ異日軍功を媚む者の誣言を防んとて故意彷徳へ立よれる之然ば
ぞの小集へ私の所以のそるぞ亦是公事ぞ既ぞ陸地二ケ所の軍談へ
ぞぞ說盡しぞ是より又洲崎の澳る水戰い甚麽ぞ分教ぞ赤壁阿
瞞勢勿負燒殫艨艟有周郎。ぞ前板阪東將帥の像賛のそ猶詳ぞ
知ぞ欲さば又卷を改ぞ且下回ぞ說分るを聽ねかし。

南總里見八犬傳第九輯卷之四十三終

東都　曲亭主人編次

第百七十回

定正水路ぞ大兵を行る
音音江中ぞ一船を燒く

話表ぞ這時武藏ぞ五十子の城内ぞ十二月五日の早天ぞ陸地の諸將。
山内顯定其子憲房足利成氏扇谷朝良千葉自胤四家の隊長
白石重勝大石憲重横堀在村原胤久等各數萬の軍兵を將ぐ下總の
葛飾ぞ真間國府臺及行德を投ぐ向ひぐ今城内ぞ在る士卒ハ
三萬餘名ぞ過ざりしぞ五日六日ぞ至りぐ甲斐の武田信昌の名代ぞ武田
左京亮信隆を首ぞ近國の野武士伊豆相模ぞ海賊毎勢を見て
利を測り寄を負ぐ敵を侮る烏合雲集の客兵を慮ぞ二萬餘名俱ぞ

定正の隊に附き欲りして各先非を謝し忠義を倡て皆五十子の城に
雑参せ事の便宜い是のごとくに上總る故の槇本の城主千代丸圖書
助豊俊ど舊臣濱縣馬助（浦安牛助友勝が僞の姓名なり。）を密使として降書を齎し
且其家臣の宅眷くる老弱四個の婦女子を保質に参らせ海上火攻の
約束あり。獨臣田薪六郎助友が父道灌の名代として糟谷の館より領て来
り隊兵の僅に五百に過ぎ況や今番水戰の利害を論じ理義を詳に
説く定正を諫るに犯さるとなりしかば定正怒て堪ぎて追退けて是を
用ひず遊莫定正親子に相従ふ水軍の兵も既に五萬餘に及びる。斉ど
中に南海道より移り来ける海賊の頭領に水禽隼四郎緑林錦帆
八四九郎近範と唤做せり此い是鄕尚に三河の苛子崎也犬江仁姥
雪與保蛮崎照文等に對治せれし海龍王修羅五郎今純友査勘

太と伯仲を爭る驕勇の人煅煉して舟をりく家とをられば水戰の進退
辨ずと極めく賢しく且一千餘の支黨ありれば定正其罪を許せ則先鋒の
頭人とを威勢かの如くそ且赤品百中（僞姓名なり。）の如き者の帮助あれば
猶且敵の胆を拉ぐ為に總兵五萬を僞りく十萬餘騎と倡へ然
れども這隊の水軍い十二月八日の早旦に洲崎の港口を攻破そ稲村の城を
拔くべと逆ト定こりければ定正朝寧父子い尚五十子の城内に在り恁而七
日の早旦に大石源左衛門尉憲儀い精進し沐浴して鎧の上に淨衣を
被く駿馬に乘りて百個可の士卒を率いそ谷山に赴く躰
馬より下立く膝を登りて山の半腹なる洞内を覗ふに那風外道人い青石の
上に結跏趺坐して香を焼き合掌して經文を誦して在り當下憲儀を
恭しく拝して朝ひく師父よ喃大石憲儀ど詣い人鄕尚に教ぬ人ぬ水戰に

本軍前板に精進をせ[illegible]
みと儆訓せ[illegible]と恨へ[illegible]
思ひの足ら[illegible]進をせ[illegible]
佐記に見えれば恨に[illegible]

宜に日い既に是明日ふるり及びく那順風を賜ふべきや。艦出い幾時候を好
とせんとの義を諮問まれとのられ。寡君の名代ふてをのれ教のへと請問
へば風外道人領ぜく善哉々々。信男信士現明日い八日ふるり及貪道
るでぶ教を更んや明日丑三の時候よりて諸艦齊一漕出く。三浦を
澳ふ猫児を下ーね其折俺大るるに亦小るる及順風をりく。蚊く那澳へ
推のそ遣ん徳而其詰旦黎明の時候よりて俺又猛烈に順風を
起ーく敵を火攻ふ便宜をなさせん。その餘のりい前ふ示ーー如ーー疑
ひそ勉めよかーと言諄ーぞ宜示せば憲儀額衝に何と答く示教うけぞ
いひ及退りく寡君ふ反命せばさぞ教びいひ復ーそ見参せばけれと告別
ぞ身を起ーて山を下り馬を早めく五十子の城ふりるる。隨卿前條の
趣を送るく吟え上ーば定正いく信仰ーて兎毛の杪ふ置く露許も

敢疑ふ心るく。然らば疾艦汰ーて。這曛昏より諸軍兵を分ち載せ
よりめれと。詞急迫ーく下知まれば憲儀い唯々とぞるふ答て躰く退り出く。其
隊毎るる隊長ふ下知をぞいるぞまるふ冬の日ぞれば短くて夕陽西ふ淪ーより。
士卒ハ反て准備ふ遑あるぞ。左右まる程ふ七日の月の没る時候ふ五十子の城
内るる将帥五萬の軍兵まぞ皆悉出畫て陸を離れ水ふ就く柴浦より
大森まぞ海上遥ふ見耳せば乗浮めるる千百の戰艦い布儲るる基石の像
く五彩の旌旗八色るる戰幟い夜半の浦風ふ閃めぞて緑波も寄せあぞ。
晃々とーて星影ふ光を爭ふ八千鋒い神代のむー早蟠成ぞ魔軍降伏
天泰らけぞ例もかくやと負ーく思ふ無心ふ勇をまり欲ぶ寄隊の大軍ハ子
二刻の時候よりーて衆艦漸次ふ漕出ーく。三浦を望く走らまる第一番の
先鋒の頭人大茂林小彦和中と濱川小渡鋏久ふ新附の海賊の頭領

水禽隼四郎緑林。錦帆八四九郎近範を副として。其隊の海賊と倶ふ五千餘名巨艦四五十艘ふうち兼ゝ第二第三の隊い小幡木工頭東良士卒相従ふ者五千餘名大石源左衛門尉憲儀士卒八千餘名有名の兵頭是ふ従ふ者勘くゝぞ第四番い定正の長男上杉式部少輔朝寧を副将として。武勇の老兵眤近の青侍華美ふ擐甲ふる者一百餘名雑兵と倶ふ一萬二千餘名ゝう第五の隊い總大将扇谷修理大夫定正随従の兵頭箕田源次兵衛后綱信城左衛達頼九本佛九郎望洋城峰麻生介廣原是等と宗徒の隊長として従兵二萬五千餘名總軍五萬ふ餘れるに千百十數箇の巨艦ふ真帆陽く白浪ふ轔る舵の响笛高工们が謌ふ棹の歌皆野千玉の夜を犯して衆艦三浦の澳邊ふ造るよ豫風外道人の契り風樹差ふとるく。猛可ふ順風吹起りく。投方便宜へければ舵工等い都て烏夜る惑ひぞ。又蝕く三浦の澳ふ到るふ武田左京亮信隆い艦を出ふ最遅けれい始よりあく諸艦ふ續くを胡意遥ふ引下る那身い隊兵のことを扨く艦を寛く行後れさせく浦河の澳ふ猫児を下ろ風の便宜と候ゝふ。定正朝寧ハゝゝ諸艦の隊長士卒ゝを波上の暗ふ紛れく是を知る者あるゝけり。然ば寄隊の諸艦い既ふ順風ふ吹送られく。その暁寅の初刻ふ夙く三浦の澳ふ来ゝ。衆艦都て帆を縮し猫を降し相歌く。風外が約束の順風の亦復吹起るべ。其天の明るを候ふけゝ中ふ仁田山晋六武佐ゝ敵の戰艦を燔盡さぐ火藥の頭人ゝけれい柴薪焔硝をヨヱく積載ゝ三三十箇の快船を営り。且千代九豊俊の保質ゝ老婦人音音ゝ豫り守前日より柴浦ふ在。ゝ。ゝ酒癖ありければ當役を兼し日より過失ゝを怕れく絶て酒盃を採る

とゝろゝゝに既ゆく十月七日の下晡に造りて同船する隊の兵等に向ひて曰
ふ。我ゆゑに汝達も連日勤務まゝるければ疲労くるるらん既に是今
宵真夜半に大将御艦を出さゝるべし人も我も従ひまゐらせ死活の境に赴くに
もく嗜る酒なれども思ひの隨に喫まもあらば何をのゝくよく胆さへ肥して春と
忘れて死地に就く忠戰を致さんやその故に我既に奴隷毎に勝附く其頭の
准備もゝる人先や和郎等と献酬をく醉を盡して解纜を等んとのふを
大家うち呼てそは辱なし御計ひ敢ぬ御酌仕らんと妥合る間に奴隷の輩
ら酒を湯に酒菜を出して梅を排る船の内なる客の間特に陝ければ音音も
膝を並べて居り當下仁田山晋六ら盃盞を執抗げるら音音を見ゝ合笑て
昔い知らぬ今は是枯樹に降まる雪の白髪額に寄る波濤松柏の肌膚に
そと思へども酌い婦女子に極れり是師てよと指出せば音音も倶に微笑く。

嗟夫御見出に與りまゝるゝ恥しくそ仕るられ足駄の端緒に敗亦素も時の用
ゆい達ゆゑ相応にかゝる聆娘役梅ぶ香ゆゑる枯野の密房非如刺とも
甲斐なくそ不甘る喫めされそと戯れるゝ十分に師とも溢さる老女の煉に
大家ヤヤとうち点ずて受けの流しに行更も現是酒い狂藥ゆゑ礼に始り
乱に終る武佐素より強飲する隊の兵も咸高量ゆゑ呑と宛大蛇の如く
刺と恰も蜂に似るに音音い喫ゆゑ。よく提撕く昔採る杵柄の美音謡に
あゝるゝに奥を添る早歌に舌も達らぬ武佐と倶に衆兵乱醉して艙に凭
れて反吐を突くあり額を敲く呻吟くあり。艫の間に侍らる雑兵奴隷舵丟高
師まで罇を敲けく足るとゝ知らぬ殺を穴縞そ好ゆゑを思ひぬ皆悉醉
臥く喚べども応へぬ。拔けども起ぬ死人に仁田山晋六们既に日い暮れ更闌て
主将定正の衆艦いゆゑ已ゞ與る火茱の船も皆定正に従ひて倶に漕去

志を知ざれば。獨武佐ゞ無る船のゑ舊の侭ゑ紫浦ゐ在り口い音音のゑ醉
ざれば。枕を乱して熟睡とゑる武佐們を相て嗟嘆ゐ堪ず肚裏ゐ思ゐゑ。
這仁田山晋六武佐い六稔以前戸田河ゑ我児子等（故十條カニ郎尺八ゑ。）を害しゐる。
仁田山晋五ゞ弟ゑ。大石親子ゐ仕へぬる二代の權宰之と。ゐ人の噂ゐ空知り
ゑ。然らでも這奴い火藥の頭人自家の為ゐ害ある者へ這奴ゞ預る火茱の
船い方僅寄隊ゐ從ふゑ。ヨヲく漕去りれども時ゐ臨ゑそ這奴ゞ存ゑ者い放火ゐ
頭人ゑ故ゐ先ゐゑる火茱の船へ必便宜と喪ん然ばそかゑぞゐ醉て睡
ア晋六ゑと醒しも果ず刺殺さば姥之とも武士の妻ゐ似げゑと人や挾
せん。要ゑそれと尋思をゑゑ。崔亘しゐる張灯の光ゐ就て船床ゑ鐵砲一挺
悄と引よせゑ。火線を含ゑゑ火を移して見れば這鐵砲ゐ両丸さへ竜てあり。
ゑる究竟と并ゞ侭ゐ右ゑのゑゐ引着て臂近ゑりける長盆ゑと。西復ひ隱ゑ

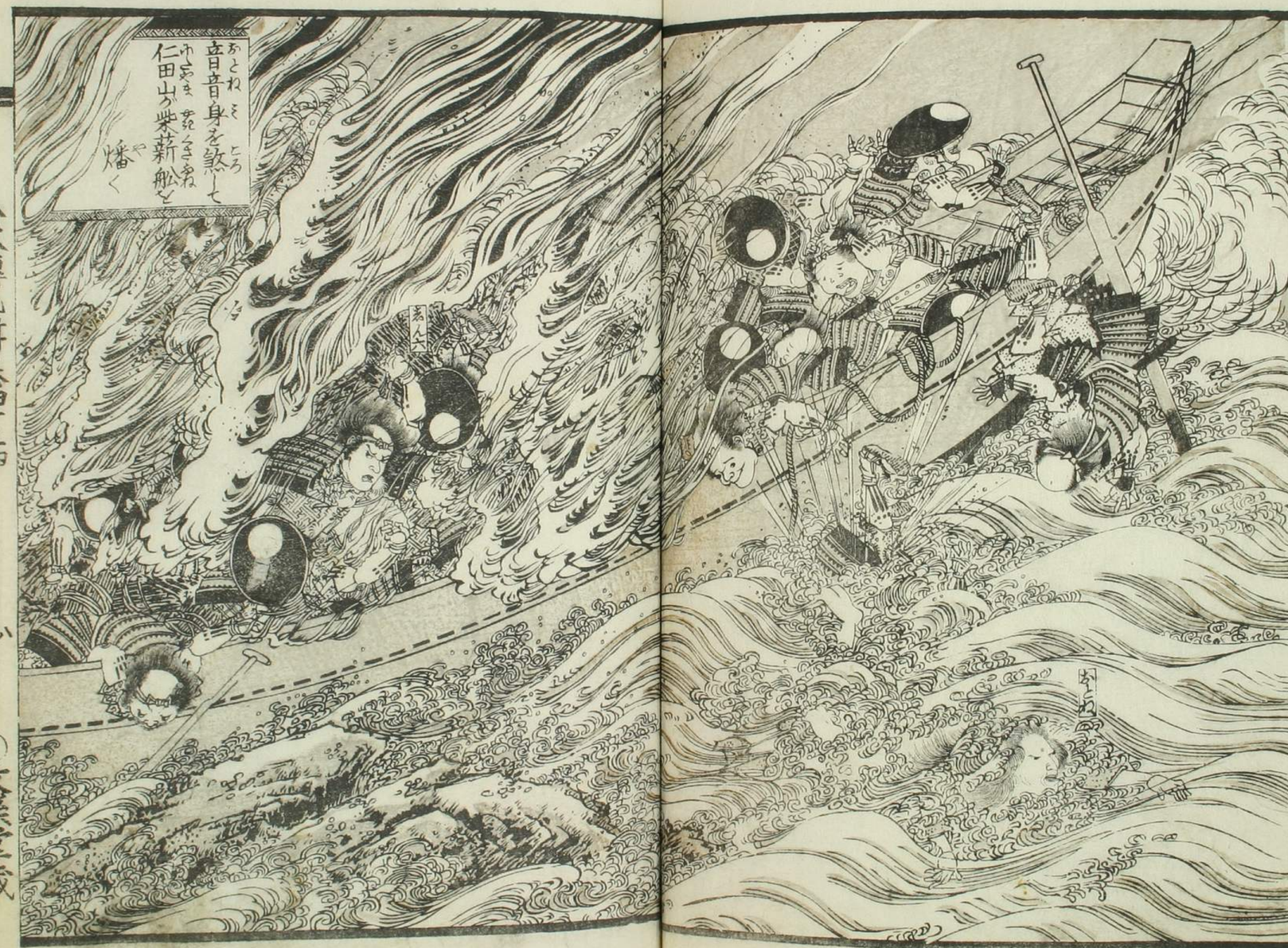
今更ゐ。東ゑく胷を推鎮めゑも果しなゑのゑそなくその物思ひ曳ゑ單節
妙真刀自ゑ。儒ゐ別ゑゑ。城内へ捉竜らまし後の事安危什麽と人
伪ゐ訪ふりとゑも浪枕身ゑ浮舟の憂ゑりける両箇の愛孫へ別ゑ我
使い今も恙ゑく。大江腋子と共侶ゐ枯れゐ冬野の草枕旅宿して尚京師ゐ
在欲と思ゐのゑゑく。南末與美の甲斐ゑ別ゐゑりける。我今寛家の覚ゑを
俟ゞ計ゑゞ如く船を焼て脱ゑ去ゑゞ暇ゑくば我身も倶ゐ火煙ゐ入ん。そゑ
両館莫大の御恩ゐ報ひゑる老の命を惜んや只両個の孫両個の媳ゐ別い
鴛鴦の剣羽や。竟ゐ水ゐ身を果ゑ過世ゐそとへば。ゑゐ品わり波濤ゐ入み
だの雨も無氷ゐ。ゑん冬の夜の浦風寒ゑを群知鳥慰めゐせず友喚ぶ聲の往
へ方い何処屋光り天ゐ餘波の銀漢俯仰瞻ゑ點頭ゑく。夜い丑三刻を過ぬゐ
け。這白徒ゑいゑゞ醒ずや。疾々覚よ。と思ゐと言ゐ出さそ咳くのゑ叔母として

候つ長夜ふ蠟燭將ふ竭んとすや。船ふ機を張燈の火光小暗くなりける。然ばかりなる更闌て霜氷る夜の潮風ふ吹醒るゝ武佐们ハ稍明るとおもふる時候のえどろかれ睡り覺ゝ。俱ふ頭を擡げて四下を見るへるに敬篤ぜてあるいふぜん鈍か咽吭渴ぜ睡り覺ゝ。俱ふ頭を擡げて四下を見るへるに敬篤ぜてあるいふぜん鈍か

御主君尉殿（大石憲儀をふ）の御船いゆゝ両館（定正朝臣）ハ乗船きゝて洲崎へ推寄せるひけん這頭ふ一箇も艦をゝ寄ゆゝ。

あるしを武佐噪ぶ深念として聲苛めゝく喚るゝ既ふ時分を失ゝく。御伴ふ後れる越度ハ勿論越度ゑれども然りとてかくて在るべきふあらぬ光疾船を出さまゝと焦燥ゝけふいそがせば。高師们ゞ稍覚て何と応んゝ遽ゝく帆を揚げ纜を解く程ふ武佐ハ又一言小頭人を身邊へ招ぜとて呼くゝ我今即妙の計あり。朝ふ後れる分説あハ那保質の老女奴を又蝕く殺もふまくとるゝとふを小頭人ゝ誘りて并ハ又何ゝあ故ゝるやと問へば答て然ばとよ我今船を走らせて。

御艦ふ赴着をゝ。禀さんゝ臣ゝ御伴ふ後れるゝ中途ふ禍事あるべ其故ハ前日臣ゝふ預けさせぬひる那千代丸豊俊ゞ保質の老女奴を里見の間諜児ゝけん隙を覘ひ胆太くも臣ゝを刺ゝくゝけるを搦捕んせ程ふ支黨の男人數十名忽焉として快船ふ乗走らゝて援け来つ這方の船ふ乗り移りゝ老女を帮助ゝ戰ひゝと臣ゝ並ふ隊の兵ゝ力を勁せ奮勇ゝて敵を漏さゞ殺沈め老婦を擒を捕りのこ必這闘戰ふ時移りゝ今ふ及ひひしと実ふあゝふ哄禀ゝて首級を実検ふ入れるゝ必遅参の御咎を免るゝのみゝるゝで反ゝ御感ふ干らん這説什麼と悄やゝふ其計較を告る程ふ船ハ柴浦を漕離れて大茂林濱の澳ふ出けゝ。登時件の小頭人毎ハ武佐ゞ奸計を皆听訖り額を分ゝ俱ふ憶ゝぞ含笑て并ハ最奇妙ゝるゝと誉て後方を見ゝ返ゝ音音ハ聰く其機を猜ゝて准備の鉄砲含るゝもたゝく。



文溪堂藏

銃口其方へ推向けし。雄胆魂氣聲悍やかに若們驚き噪がるゝを。伎倆は既に知られつ。今武佐が奸計は反て是我実情を我を誰とか思ふらん。是裏に戸田の河邊にて武佐が兄仁田山晋五が緝捕の手兵と血戦して。竟に戦殺されたりける十條力二郎尺八が母犬山道節が舊老僕にて。今は里見殿の家臣たる姥雪代四郎が妻音音は我なり。武佐汝も寃家の半隻思ひ知るやと明々地に名告被りて鉄砲の火蓋を鑽りて𢫢と發せば。那時遅し這時速し武佐はいたく驚き慌て立ちあがる程もなく吭を撲地と撃ぬかれて叫びも果ず仆れけり。吐嗟と為り隊の兵毎は音音を擒捕んとて。推稠竜る間もあらせず音音は鉄砲を更して船の内に積措れける毒裏の火薬に擲ちて身を仰さまに舷より海へ水入と飛入りける其水音と共侶に火線の燬児許多なる毒裏の焔硝に燬と燃移る這時速し猛火激烈威勢迅速現百千の雷霆の一度に墜るに異ならず。人は而るを䒍さへ船さへ一瞬間に燒盡されて遺るは僅に船底のみを水に漂ぬ。音音も恙はあらじや。あり磯瀉測りがたき死活の海に水澪の建られぬ迹もなかりける。

第百七十五回 數艘を借て大角義武を捉ふ 降旗を建て豊俊定正を愚にす

却説犬村大角礼儀は那日の早天に五十子の城を立去りて。先谷山に赴きつゝ大法師と商量して随即所従の雜兵二名を安房なる洲崎の陣営へ遣して那計策の成まるよしを犬阪毛野に告げしかば。毛野は得てこそ来ぬるを俟んとて躯く相模路に赴きつゝ便宜の浦邊に在りし程。次の日の夜に至りて両個の使の雜兵と倶に堀内雜魚太郎貞住なる隊の兵三百餘名を領きて快船あまた乗して約束の浦邊に来つ。犬村に對面して則義成の密旨と毛野の意裏を喧え傳れば使に建ける雜兵なる。毛野の回翰を合出して先大角に呈閲し且其反

と命じ真ふ生。是ふ由り大角い其言を聴て貞住ぢが業り快船い安房へ返て一箇も留めぢ隊の兵ゑ皆東西へ分ち潜せろ。水戰の日茂俊ら程ふ既ゆて大角い洲崎の陣の事の光景及大阪毛野を軍師ふ做さまと自餘の七犬士い防禦使ゑるの並ふ大角ゆも賜るべ。御大刀を現八ふ渡しゆ。犬飼い犬塚と共侶ふ國府臺ふ敵を俟つ那地の防禦使ゑるとゆく。毛野が是を與りて。權且藏措ゑ。則今番の便宜をゆく。堀内貞住ふ是を遞與て。大角ふ偽へ。大角い其君命を兼り。這賜を受まる其悅びゆべ。又只是ゆのみ。犬塚信乃犬飼現八ゑ。東辰相杉倉直元们と俱ふ義通君ふ俱。國府臺の城ふ敵を迎るの。又大川荘介大田小文五ゑ。彷徳口ふ出陣て。俱ふ敵を俟つと云水陸の隊配この餘の事千代九豊俊ふ彷いまる。毛野が反間の計畧。又這密策ふ預りの浦安牛助友勝。音音鬼

多畢節妙真の敵地ふ赴。の時具ふ吟えゑ。大角深く感佩ゆ貞住ふ悄語く。吟くが如。這一策い則是苦中の苦ゆて危。最殆ゑ故何とゑば音音妙真両媼と曳の畢節女兄弟が千代九豊俊の密使と偽唱へ。柴浦へ至り。時定正必保質ゆ。件の四個の婦女子を城内ふ留め置べ。恁而水戰の日ふ至て。定正焼れて敗績ゑとも脱れ。五十子の城へかへ。東ゆ必怒ふ堪ぢ。音音妙真曳の畢節を戮さるとを汝ゆ恁れい犬阪が計る所則自家七勇婦四名を售て。徒其死地ふ入るのを抑又危ぢや然りといへども暦日ふ危をりく黄道吉日と生事危けれい必慎む慎む時い失寡。犬阪この理を知ぢ。叨ふ苦計を彷ゆ。因て又なのふ大阪一舉ふ敵を破らが。逃るを追ひて五十子の城を拔べ。段ゆて。この苦計を彷ふ。定正城ふ入るとを汝ぢ城兵防禦ふ他事ゆ。何人ゆ亦暇ゆ。四個の勇婦を害

せんと。已に知り又敵を知りて大阪が計る所。必や違ふべからず。非如他ゆ及ばじ。我も亦水戰の一計ゆ與れり。然るに四個の女流ゆも軍功及ばず。二の町をば生く安房へ還るべくばかりん後の思ひ出ゆ。と告る意衷ゆ貞住ゆ有理々々然也。然もと答く感嘆あり。

ゆく俟つ程ゆ十二月七日ゆ做りて。大村大角礼儀ゆ堀内雜魚太郎貞住と共に倡ゆ甲冑ゆ身を固めて。隊の兵三百餘名を率ゐて。新井の海邊ゆ赴く。貞住と隊の兵を分ち。俟ゆ這累在らせて。却大角ゆ。その宵初更の左側ゆ雜兵十名許を從へて。新井の城ゆ赴き。城門を敲く。喚ぶ。是ゆ今番肩谷殿新附の野武士の頭領。赤品百中と喚做す者。年来足柄ヨリ武澤ゆ來る。同志の輩を駈集む。明日の水戰ゆ拔て先鋒せんまくまと。その義前日山内殿より。當城へ通達せられん顯定主の付契ゆ在り。その義稟りぬと。喚門ひけり。當下門衛の士卒是をうち守る。応と答へて左右ゆ容れず。隨即門卒を走らす。徳と注進をなすげれば。這新井の城主なる三浦陸奥守義同うち守る。その義ゆ隊山内殿より。諜り合されうければ今ぞ疑ふべくもあらず。然いとく。今の世の人心由断せず後悔あらん。咱先對面して其付契を相く艦を借せべ。參よ兵毎其赤品百中と伴當一両名とあと門内へ入ることを饒りね。必由断せざらんでくとのひとも。身甲の上ゆ猟衣烏帽子を着ひて。ゆ刀を腰ゆ跨へて。力士三十名許を從へて。玄関ゆ出る程ゆ近習ゆ燭を執て先ゆ立ち大刀を執て後ゆ跟く。小心者用ゐらげりけり。ゆ程ゆ護門の士卒ゆ君命の趣を大角ゆ傳へ示して。那身と伴當一両名を角門より裡面ゆ入らせて。玄関ゆ案内を。當下大角阿容る色ゆ引れて玄関ゆ登る。點り連ね燭台の光く星ゆ異ゆ。上坐ゆ城主義同。発見ゆ尻を撻く。左右ゆ侍る力士ゆ狼の如くゆ見る。蚪の像くゆ疾視へる。面魂凡庸ゆ。近習ゆ主の後方ゆ居り。跳

も本事ある者ならんと見えざるに今ろけり既ふく大角ハ程遠処ふ跪くを義同みづから聲を被て赤品百中とハ和郎ならやと問へバ大角額徳ゑる頭を拾げて然ハ顕定主の齎せるか。借船の符契ふ在りいらぐ戰艦十艘と焔硝紫薪を借まく欲もふの義を仰付さるべくと乞へバ義同點頭てその義ハ豫ふ為ふ和郎の隊の兵幾名ならやと問へバ答く然ハ同盟の毎ハ三百餘名ふを近ふ海邊ふ留めくおて来ぞ。小可が伴當ハ僅ふ足十名のミ夜分の憚りあれバ人とのひく聊退ふく。躰て鎧の懐録より符契を舎出く呈まれバ一個の近習身を起ーまく。把て主君ふ呈閲ふ為ふ燭を抗さて懐よりまく隻符を出ーく自他合せ見て相違なしと獨言ふ符契を藏めく又大角ふ向ひくふやう。持参の符契ふ疑ひるけれバ敢異説もべくもあらぞ。艦ハ昨日より准備さをく。焔硝紫薪と共ふ遠くう曳馬頭

上ふ在り。旌旗水幟ハ甚麼ぞや。と問へバ大角然ソひ其二種ハ扇谷殿ハ預けるりひく。を相携くハへバ只ハ御艦と紫薪をのミ貸ーるりぞ物足りてんと。推辞を義同ふあへぞ。そもその准備あるべけれども我艦ふ我水幟と建ぞ者人ハ貸ぞえや。且愚息義武ハ項者風寒ふ感冒されてらまぞ病牀を出ねバ両館領家の催促ふ従ひまるとて沼ぞ。他ハ内ふ我さへふ送感ふ方ふ在りのりて義武ふ代る従勇士ふれバ黙止まふ和郎今我艦ふ乗りく先鋒ふ找むて幸ひ乗我も亦両三個の兵頭ふ雄兵四五百名と授けく。俱ふ戰ひを助くべーとふを大角推禁めく。并ふ然る故もひあど小可今番両管領の為ふ死をのく敵を敗らまく欲まるふ今内ふ他兵を雑へられハ素より望む所ふあらぞ且小可ハ扇谷殿の先鋒ふく。當家の加兵ふあらざるふ縦艦を借るとも。當家の水幟を建られんハ亦事の宜ふあらぞ。這理を思ハ

大角謀く艦船を借る

ゆるぎやと。と気色を変て論ぜれば。義同一番時流吟じて。実ふかうれど其理
あり。和郎一番量微りせば。這席上の孤客ふーく。我ふ對ひて徒まで意表を
送さそ論ぜん。武勇ふ顧て望ふ任せん。疾々退のけへとく。躰て士卒ふ吩咐て
准備の馬頭上ふ送らせれば。大角面を和らげて。開ゐ赤くいかれ郎君の御矢
安を猶も御保護あれ。と口誼を舒別を告く。外面へ退り出れば。城兵五六
名蕉火を振照し。犬村主僕を角門より出ゐく。馬頭上へ送る程ふ。堀内雄
魚太郎貞住ハ。五百個の隊の兵と倶ふ甲夜より這頭ふ俟て居り。這海濱ふ
維ぎて。新井の戰艦ヨリ。陸中ふ両管領の需ふ応ず。准備の艦十餘艘あり。
其一艘ふ。焔硝柴薪さへあり。と。船小屋より番卒出て大角ふ遞與せり。
貞住も共侶ふ欵びを述受含く。其艦毎ふ士卒三十名づ分ち乗せふ。
谷谷携ゆる弓箭火銃器械あり。且楫を含ゆる艪を操る。舵工さへ匠ー

かるされば渺茫る大洋の間ふ迷ひ。齊々と艪拍子揃へて漕出を夜のまど
丑ふ過ぎけり。有低ー程ふ。三浦義同の獨子ゆりける。三浦暴二郎義武。今
宵も尚病牀ふ。無龍く在りける。件の事の趣をうち咨ーよる。遺恨ふ堪ねぐ。
横児掻遣りゆ身を起ゆて。枕方近く惜せる。鎧を含ゆく身を固ゆ太力を
佩ぶ一具あり。兜を看病の女房ふ持せる。走りく親の身邊ふ。跪くまう
暴ふ。奮然とて。意ふ。當家ハ是人も知る。両管領の親族ゆふ。
今番の戰ふ値ざるハ。児が病着の故ゆ。是非の及ぶ所ゆれども。赤品山百中
とう。吸ふ。做くる。相模野武士ふ。先を駈させく。我艦と貸て。乗せゆう。
隊の軍兵をも。ー遣りゆ。ざるハ甚麼ぞや。今より艦を出させく。海ふ浮て。射
方の大兵と。ゆるく明日の先鋒ふ。找ん暇。稟さとゆも既ふ立まくまくけるを。
義同急ふ。吸禁ゆく。ゆれば義武。和郎の遺恨ハ。然ゆるとゆう。身ふ猶熱邪を

○文溪堂蔵

帶くるふ。夜を犯し海ふ浮きて。暴れ潮風ふ吹冷されるが寒熱忽地再發して。
太刀拔くとも克ぬまぐふ。狗滅を做さえのこと。とても勇士の本意といへ。然ば
這回の鬪戰ふ我い伊勢長氏の壓とて。出陣を禁られ。加兵ふ親族をもく
名代ふ出せとある。重役ふれが非如をの義ふ及ぶとも。後ふ外ふるふ。已ねくと窘
まい義武聽ぎ推返して。否我身ふの曛昏より熱邪退ぬと覺しふ。今ふ
心地清ふるふ縱病着復起るとも。武士ふる者い百萬の大敵と血戰して。
命を其首ふ捨てこそ名を後の世ふ揚げもせめ。浦團の上ふ起臥まく。婦女童
蒙ふ看病せられて。死ると本意ふ做さぬ。いでもあらんとられども。當家い平
氏ふりけるふ上。移氏より養嗣せられく。本領安堵ぎるーしるふ。両管領家い親族
ぞ。藤原氏の血肉ふるふ。這回大事の鬪戰ふ不知。出処の野武士們ふ艦を貸
たるのこふーく。阿容々々として出ぎもあらぬ。世の胡慮ふるらんのこの義ふらい。饒

させぬと。詞烈しく答も果ぎ。衝と身を起し外ふ出く。急ふ隊の兵を召聚
るふ。惣雄の壯士等い。今宵出船ふを恨まく。倘兵頭を出さくとりやあらん
と思ひーふ甲夜より各甲冑をく。戰飯ふ飽ぎる者ふく。今ふくと俟つ折るまば。
這武者汝を笑くとぞ。隨水崎蕃人甲良亀九郎。小磯真砂五郎ふど。喚
做ふる。兵頭を首ふく。ふるふ銃ふる前後を乱さぬ。雄兵都て一千有餘。城の玄関の頭
より正門の内ふる。翁城ふ処陝まぐ。聚合ーふ。義武い忻然と。鑣奴等が牽寄
ぎる。馬ふ揺哩とふち跨く。海邊を投さいぞぐ程ふ。又是准備の戰艦。あふ二三十
艘維ぎてあり。番卒毎出迎へ。艦ふ柴薪焰硝を。舟ふ入れく。水懺を配建ぎども。
當下義武い其戰艦二十餘艘ふ。隊の兵五十名々分ち乘せて。其身い胡意快
船ふふち乘りて。大角の赤岳百中と逐まくも。頃い十二月八日の曉天ぎれば。渺々る
大洋の波瀾鳥くして。星影移らぎ刃成を寒風ふ面を撲ふ。諸軍兵ふ並て

憶ぢ戰栗る。肌膚粒竦色蒼然く。身ハ生るぐる。鮫児ぬ来るらんと。思ふ可ふ堪ぐられば。弓含るる支。斫らく如く。其弦凍て断るもあり。獨去の艦隊の主將る。三浦暴二郎義武ハ今茲十八歳の少年ぬれども。武勇力藝。親ふ劣らぬ。勇ハ萬騎ふ敵をべく。膂力ハ千鈞を挙るふ堪たり。遽莫今宵ハ病後ぬ出陣。心許るーと。思ふもるるーふ。幸ふーさぬの曛昏より。寒熱共ふ瘧りく。氣力衰へねば。夜風の烈しぬを物ともせず。疾百中ふ赴着んぬ。連りふ舵工をいとぐせけ。然ば又犬村大角ハ。有徒るべーとハ知るようもるく。既ふ義同を欺ぬく。一十箇の艦を借ふく。漕出せども。去向をぬぐぬ。堀内貞住と。船を並くゆく。程ふ那城内ぬもるーー事の趣。城主三浦義同と。問答詰論の顛末。悄語々々告知をれば。貞住以下の老兵まぬ。覚ぢ俱ふ含笑まぬ。愉快のヲとぞ稱えける。浩処ふ新井の方より。漕ぬ来ぬる快船あり。忽地ふ聲を發て。其首ハ漕ぬく。衆船ぬ。野武士の長と。ゆんるる。赤品百中もあるるぬ。倦ふ我ハ三浦陸奥守義同の嫡子る。三浦暴二郎義武る。ぬ。權且艦を止めよと。喚りく。近づ来ぬれば。大家敬馬くぬ。中ふ大角ハと見るるく。毫も噪ぐ氣色る。然ハ赤品百中ハるふ在り。何ぬの所要ハぞと。答る。詞も果敢。義武の快船ハ。這方の艦ふ漕よせく。其隊の兵ぬ。鈎索ぬて曳よせ。寄せ撫。程もあるぬ三浦の伴船二十餘艘。水崎蛮人甲良亀九小磯真砂五郎。追風ふ儘せ推續ぬ来く。犬村ぬ十許艘の艦の前後ぬ。捕囲ぬ。ぬも鈎索ぬ一箇も漏さぬ。皆生擒ぬと。撫留めけり。當下暴二郎義武ハ。大村大角ふ向ひく。やぬれ其隊の頭人加勢の野武士赤品百中ハ和郎る。よ我名ハ豫ゆ。ぬ聞ん我ハ親の名代ぬ。疾五十子の城ぬ参るべーとふ。憶ぢ風寒の病着あーく。出船遅々ーて今ふ及ぬ。和郎ハ新附の加勢ゆく。我艦ふ乗るかハ宜く我

隊ゐ従ふべ〜と威勢猛く宣權を大角呼て冷笑ひて開ハ謂ふ是爭ひる
るべ〜。咱等ハ幾日五十子の城内ゆく水路の郷道導児こるべ〜と定められ為
者多ゐ今ゆく他人ゐ譲らんや。這艦ハ三浦氏より出されしとも我私ゐ借と
るゐあらば扇谷殿の處分ゆく課く所要ゐ充めへ則是扇谷殿の
船ゐ同じ。然るに這艦ゐ乗られしく和殿の隊ゐ隷けとのつるゐ管領家をも
憚らで隊ゐ従へまく欲ゐ欲年少〜とも遠慮ゐ最鳥滸人と云ひ君れば義
武満面朱を濺ぐ。恢難ゐ聲高ゐ呼ばとて舌長〜軍神の血祭ゐ
首と捕んと覚期せよと刀の柄ゐ搦るを大角猶も怕ず色ゐ。非
理の理ゐ道理ゐ威勢とりく克まるや。和殿腰ゐ帯剣あらば我も亦
身と讓る是ゐ双ゐ敵ゐあらば已と云ざるとゐ敢敵ゐと撐まとも一朝の
怒ゐ其身を忘る〜ハ是君子の慎む所小人の悔る所ん然るを和殿事を

好むハ敵ゐ反忠ゐるゐやゆん。幾ご里見を攻伐ぜ〜同士鬻を做ゐ何を
りく管領家ゐ忠とせん義とゐん然る狂人ゐ敵ゐるゐ〜とゐわせも果ゐ義
武ハ衝と身を起て艦ゐ脚踏機々大角を斫らんと叫ぶ聲と共ゐ刀を旦光りと
板放ぢば左右ゐ在りける老兵毎吐嗟と云ひ推隔ゐ抱ゐ禁ゐ諫る程ゐ猶
且這隊兵頭水崎蛮人ゐ磯真砂五郎も義武ゐ怒罵る其詩聲ゐ驚
く。船と揺ひつ移り来て。俱ゐ義武を諫る。那赤品百中ゐ過言ハ憎くゐへ
ども他も亦管領家の御隊の兵でゐ同士鬻を做されゐ非如今番の闘戰ゐ
御軍功ありとも後難免れがたゐ。枉く饒させゐひと理り切ゐ和解ゐ
義武ハ老賢ゐ意見を聽ざらんハ是ゐ〜。うち頷ゐく退ゐく刃を鞘ゐ藏ゐ
ども尚理ゐ反怒氣と共ゐ口ハ諍々と罵りけり。話分両頭。ゐの日十二月八日の暁
天ゐ扇谷定正の諸軍船ハ三浦の澳ゐ猫児を下〜く。風外道人の風説を

の。起き順風を待つ程ふ幾千の艨艦あ櫂亘ーる張燈ハ波を照らー水ふ
映ーて。漁歌龜もちれ寄るるべ。浩処ふ洲崎の方より快船一艘漕のそ来つ
降人と書寫ーる。弦樹張燈を指抗く。うち振りく喝るを。旦ハ安
房の降人千代丸圖書助ゞ密出使ゆく。濱縣馬助と喚做者ゑ火急の言
上あるをのゝいくゞ直訴ゑ申ちく欲ち。あの我を禀ーゆとふ聲共倍ふ近つ
くを。扇谷の士卒小舸ふ乗く出迎へゝ鈎留めそ。引て大石憲儀の艦の傍遠ふ
わゝ白ゑ。偖と注進ゑけれ。憲儀則水幕を抗さを出て濱縣馬助ふ
對面ゑ這馬助ハ浦安牛助友勝ゑ當下友勝ゞふを。豐俊隊約ーちゝ
去如く。今日ゑも旦開の水戰ふ豐俊里見の衆艦の背よりうち起りて。火を放
ちく飯ふ去べ。但ーその折乾の順風の最も烈ーく吹沁つゞ。豐俊ゞ放火ハ里
見の衆艦ふ蒐らぎーて向火反く我艦と焼ん然れば豐俊ハ里見の衆艦を

漕脱て逆く又蝕く火を放ん。その折御艦を找めさを。俱ふ火攻ゑゆゞ全勝十
二分ふけべ。この我を諜ーまちん為ふ復ーそ推参仕りね。と実ーゆふ説瞞ゑべ。
憲儀听く點頭て。躰く小舸ふ乗移りく。引て定正の艦ふ造りく。件の我ゑ
告ーゞ。定正悅び大々ゝるゞ。其我我ゝ疾衆艦ふ下知を偽く。
旦開の進退を示ゑべ。豐俊主僕大功あゞ賞禄ハ異日の沙汰ふあん先。
この旨を答諜ゑそ。馬助とやらンをかへー遣のね。とふを友勝側面ーて憲儀ふ
向いてゆ。既ふ天明ふ程ゑゝんふ。小可憖ふ安房へ還るゞ里見の士卒ふ怪
ゑられて。事の破れゑゆ做りふん。縱目今の御答を。豐俊ふ告げゞとゆ。御同
意ふゝ。ゝきゞ事違ふべくもいゞ。この我を禀ーゆね。と請へ憲儀ハ點頭て。
造即友勝のふゝと又定正ふ告ーゞ定正ゝく感悅ーて現其遠慮ゑ謂
あり。然べ其馬助を。憲儀汝の隊ふ隷ゝ軍忠隨意ゑべけれ。とふ憲儀異

議もなく御諚美りゐひ必柴薪を積める船毎ゐ既ゐ御伴ゐゐへども其頭令
課くる家臣仁田山晋六ちゐゐ考らんいまぐ参らぐ第一義なる柴薪ゐ頭人
なくい不便なるべ。然れが晋六が来るまで這馬助を代として那役ゐ充ひて便
利ゐそゐるゐ。ゐの義怎麼と請問へば定正宮。又點頭て現他が主なる千代
丸豊俊ゐ既ゐ放火の頭人と且主僕倶ゐ安房人ゐ。渡上の掙ゐ自由なる
人ゐ其一役を課るゐ。反て仁田山晋六ゐ優ゐとともあらん退て柴薪船と遞
與ーねとゐくゐ貌ゐ吩咐れゐ憲儀唯々と言美ーて船を漕せゐ退ゐて。却友
勝ゐ柴薪船を預けて其進退を任せゐ友勝ゐ思ゐ倍くる事の首尾の十合
なるゐ矣を忍びつ欺び謝ーて。そゐまくちゐ留りけゐ左右なる程ゐ絳煙引く東
天稍無暁と云ゐる時候。風外道人の約束違ゐ。乾のくゐ天引くる横雲の
間よりーて。勁風颯と吹起りく。激波高く艦揺めけゐ。ゐの期と云くる寄隊の

大兵寒氣も倶ゐ忘るくゐ。孰う欺び勇ざらん素破乾の順風吹出くゐ。
皆疾猫児を曳抗て寄せよくと呼りて位置を守りて漕出ゐ先鋒ハ則
當面軍の兵頭大茂林小彦和中濱川小渡錺久士卒五千名並ゐ新附の海賊の
頭領水禽隼四郎緑林錦帆八四九郎近範其徒二千餘名を左右の副
とゐ共ゐ雄兵七千餘名其艦一百許なるべ。次ハ晋領四家老の隨一なる
小幡木工頭東良士卒三千名。次ハ上杉式部少輔朝寧ゐ大石源左衛門
尉憲儀を副とゐ信城左衛門遠頼九本佛九郎望洋等是ゐ従ゐ其兵一萬
餘名。次ハ總大將。扇谷修理大夫定正従兵三萬千百十數名其田源二兵
衛后綱白峰麻生八廣原等及阪東ゐ有名の郡司御士の是ゐ為ゐ者
勘うくば又降人千代丸豊俊の密山使なる那濱縣馬助もち紫薪船と預けら
れく先鋒ゐ従ひく找なる武田信昌の名代なる武田左京亮信隆と新参の

浮浪人赤品百中と仁田山晋六武佐のごとき中途に障るとある秋六の時までも其船見えねば定正を首あく朝寧憲儀東良若はちと機密を知りしる老兵ら今ぞ他ぞを俟んとく躊躇ふ八元おあるざれば寄隊三千箇の戰艦舵を轉ら巨艦を鳴らして整さとて前後を乱さず乾の順風に儘せて徑に洲崎推寄せて稲村瀧田の城を屠らく義成親子の首を捕んとも勇ざる者なりけり。事の勢正に是曹魏江に浮きて呉を吞ぶく欲り。胡元海を渡りて東に寇せ一日も怠やありけん戰世の人の心は死活の海を海とも波に彼岸遠く後の世を思ざるこそ薄情けれ。

第百七十四回 萬里一水道節小仇を射殺 八百八人毛野大敵を麾ぶ

却説あの時安房の洲崎に見の陣営あり國守安房守義成主昨十二月七日に至りて軍師大阪毛野防禦使大山道節並に兵頭小森但一郎高宗及諸兵頭老兵と恩赦の罪人故の上總の榎本の城主なりける千代丸圖書助豊俊若を召集へて明日の水戰の隊配を定めらる。印東小六明相荒川太郎一郎清英木曽三助季元小湊目堅宗若も倶に這席ぞ與りける。斗ゞ中に大阪毛野は獨君命を兼ねて諸隊の前後を配分ぞ鋒則小森高宗に千代丸豊俊を副として毛野が謀る所なり其船毎に柴薪焔硝を積入れる放火を宗とぞ與人次は大山道節に荒川清英印東明相を左右の副とぞ次は軍師大阪毛野に木曽三助季元定に從ふ從軍の諸頭人の天名は牧舉ふ湟おびあれども自餘の九大士と東辰相荒川清澄杉倉直元田稅逸友登桐良千満呂重時鮹船茂足東峰春高堀内貞住若は或は陸地の敵を防人與或は悄地に謀を授けて他方へ遣りぞ中に大江仁姥雪與保は京師より

と。剩蜑崎照文と田税逸時。苫屋景能を。重ねて京へまゐらせられば。當陣ゐ勇士多くば。義成も艦を出させ。倶ゐ大敵を防ぐべしとあり。軍師徽智禁め禀して。當陣ゐ本事ある兵多くねども。事十分ゐ謀り給へば。大敵も怕るゐ足らず。且明日の水戰ゐ君ゑの処を動坐あらば。反く守衛薄くして。萬一の時誰うよく陸ゐ登る敵を防ん。且奸民郷兇の野心も料りがたければ。猶ゑの御陣ゐ御坐をして。後安くゐべけ。と其理を舒く諫めしく。義成ゑの說を信容れて。曩ゐ水戲水馬の調煉を。檢覽の與ゐ建させる。望洋甚堂ゐうち登りく。明日の水戰を觀べしと定めらる。折ゐ瀧田の城より堀内藏人貞行が。老侯の使として。安危を拜問の與ゐ來ゐければ。義成歡びて對面あり。幸の次にそそぐ。瀧田へ別ゐ使をのそこの次を請せる。明日貞行を當陣の一頭人ゐ充んとそも。獨小溪目の明日の隊配ゐ漏しくば。痛く望を失ひく。思難く。毛野ゐ仰せ。在下い原是老館の御使を美りく。瀧田より參りしかども。同僚東峯鮸飯ゐ既ゐ用ひる所ゐ。在下とのゑ。甚麼ぞや。明日の水戰ゐ俱しゐ故ゐ狹ゐ。ゐろ行ぐくゐと。啣言ゐ。毛野い听ゐ。含笑て。否とよ。和殿ゐ。別ゐ用る所ゐ。いそがざるゐ。ゐれば。其義ゐ及ざり。耳とよせ。と。膝を找めて。悄悄ゐ誨る。明日水戰の時ゐ臨く。朝風必巽ゐ。其折和殿い五百の雄兵と俱ゐ快船十餘艘ゐうち乘りく。敵ゐ曾いで蔓直ゐ。独く武藏の河崎へ渡ぢ。鮠内葉四郎と。雜兵猿岡猿八ゐ。俱ゐ其故郷い武藏ゐ。矢口へと。狹いゐ。ゐ。ゐ。邪里の地理ゐ具ゐ。因く他ゐと。従せ。那地ゐ届りく。進退ゐ。固く。樣々と說示せ。小溪目い欣然と。美歡びて退ゐく。事の准備とあり。恁而大阪亂智い大山道節と共侶ゐ明日の軍兵を整ゐ。諸頭人と船長ゐ。君命を偽へくゐ。約莫明日の水戰い各ゐ。進退ゐ。意ゐ。称ゐ明の

時候より乾の勁風起るとあらば敵の大兵船を找めく舊直ふ推寄せ来べ。然りとも我諸隊の艦い猶皆岸ふ在りて動くべからず其風変りて既ふ敵を逆へて火を放ん事を要とす。勿論館の御軍令ふ隨ひまつり縦勝ふ乗るとも濫ふ敵を殺すべからず只生拘を全功とす。倘違ふ者あらば立地ふ足を斬れ。艦ふい今宵柴薪を積載て旦開の戰飯い各各艦ふ在て握飯を食べ旦纏腰飯を忘るべからず。あの美い天津九三四郎が稲村より来て炊飯の支役ら。ふ指揮ふければ事ふ礙滞あるべからず。あの御旨を心得よ。と言厳ふ説示せば大家敢異議する者なく共ふ言美を称ふ。

その日管壹兒堀内許より召出されて。その隊ふ在り。郷高ふ義成主ふ見参を饒されて旦恩命あり。這回の開戰ふ大功あらば舊領城地を返へすべし。と仰らるれども豊俊い舊臣の浮浪して安房上総ふ在る者いまだその義を知ざれば那身一僕ども

あらば。遽莫先鋒の次将ふれば面目あるべ。徒而その夜い無火を焼て既ふ暁天ふ登りて明日の水戰を見まく欲を致せ光薫。将帥義成主ふ望洋臺ふ登て堀内負約を首めて老兵士卒二千餘名。壹臺上臺下ふ列て高張燈を樹亘まく。最も堅固ふ備へり。水隊い軍兵一萬餘名八日の暁天ふ至て一隊毎ふ士卒咸艦ふ乗果て敵のうち寄せ来ると候程ふ天い向明と称る時候より。乾の勁風吹出て磯打激波凄ドく。艦を遣るべ便宜ふあらねば士卒齊一感悟して果せる哉軍師の先見毫も違ぬ既ふ乾の勁風発り敵艦寄せる程ふ程ふあらず。徒ていとの風吹変りて巽ふ至て吹るべけれと思へば都て勇こもり寒風肌膚を冒せと忘れて弓弦と潤しの火銃の丸を能く敵を俟つ威勢あふ振然たり。小程ふ。扇谷の諸軍艦ふ既ふその順風を得て鋭び勇ざる者あら各正帆を七八分ゆりて風のまふく走らまるふ比皆是巨艦ふ。

も危ふからぬ。三浦の澳より洲崎まで。水路五六里ゐ足らぬれば。今いま一里許のやうなべくらんと思ふ程忽地ゐ風歇ぬ。波理りて衆艦都く毫も走らぬ。是ハいかゐと訝る程ゐ其風猛可ゐ変りそらく。便宜を失ふ折ふし。洲崎の岸より卒突然と快船十餘艘漕出て。前ゐ敵あうちも逆ゐぬ波を横ぎり。一瞬間ゐ武蔵のくへ漕去りける。是則別人ならぬ小湊目堅宗ゐ艇内普茶四郎。狙圖猿八等と五百の雄兵を従へて。目今那地へ渡来りけり。當下軍師大阪毛野ハ一萬の軍兵一千有餘の戦艦を二隊ゐ分ちて。鼓を鳴らさぬ戦ひ振らせて。遠ゐ士卒を找れば。則先鋒の頭人ゐ。小森但一郎高宗千代丸圖書助豊俊ゐ隊の兵二千。艦二百四百艘波を開て漕出て第一番ゐ。水戦ゐ降人千代丸豊俊と寫せ。扇谷の先鋒の艦ゐ。大茂林小彦濱川小渡並ゐ水禽隼四郎錦帆八四九郎ゐ。後方ゐ續く寄隊の衆艦大石憲儀小幡東良将帥（正副将軍）も是を追ふ。原来千代丸豊俊ハ順風の便宜を喪ふ故ゐ里見の衆船の背ゐ火を放ちて。胡意找して先ゐ立て欲然ゐ。其里見の士卒ハ他を怪まず制る者ゐ。舵を連わく近づ来ぬれハ故ゐ。ゐろ〳〵ゐ。疾濱縣馬助と召せて。問ぬと。哭る聲も果ぬ間ゐ小森千代丸ゐ隊の頭艦ハ。射る箭の像く漕よせ。俱ゐ准備の小柴ゐ火芽を夾て。敵の船ゐ投入〳〵攻寄せ。折から烈ゐ潮風ゐ放火の勢一乗時もあらぬ。寄隊の艦ゐ在る所の柴薪ゐ其火移りて。發と煙立つ程もあらぬ。先鋒の衆艦免る者ゐ。猛火と做りて焔々ゐ。軻遇突の威勢逞りもるゐ且猶浦安牛助友勝ハ扇谷の柴薪と預りく。先鋒の艦の後方ゐ在り。件の放火發ると見るより。同船の軍兵四五名を斫仆し又斫伏せ。左右る船の柴薪ゐ火を放ちく。猶も拄る敵兵茂中ゐ

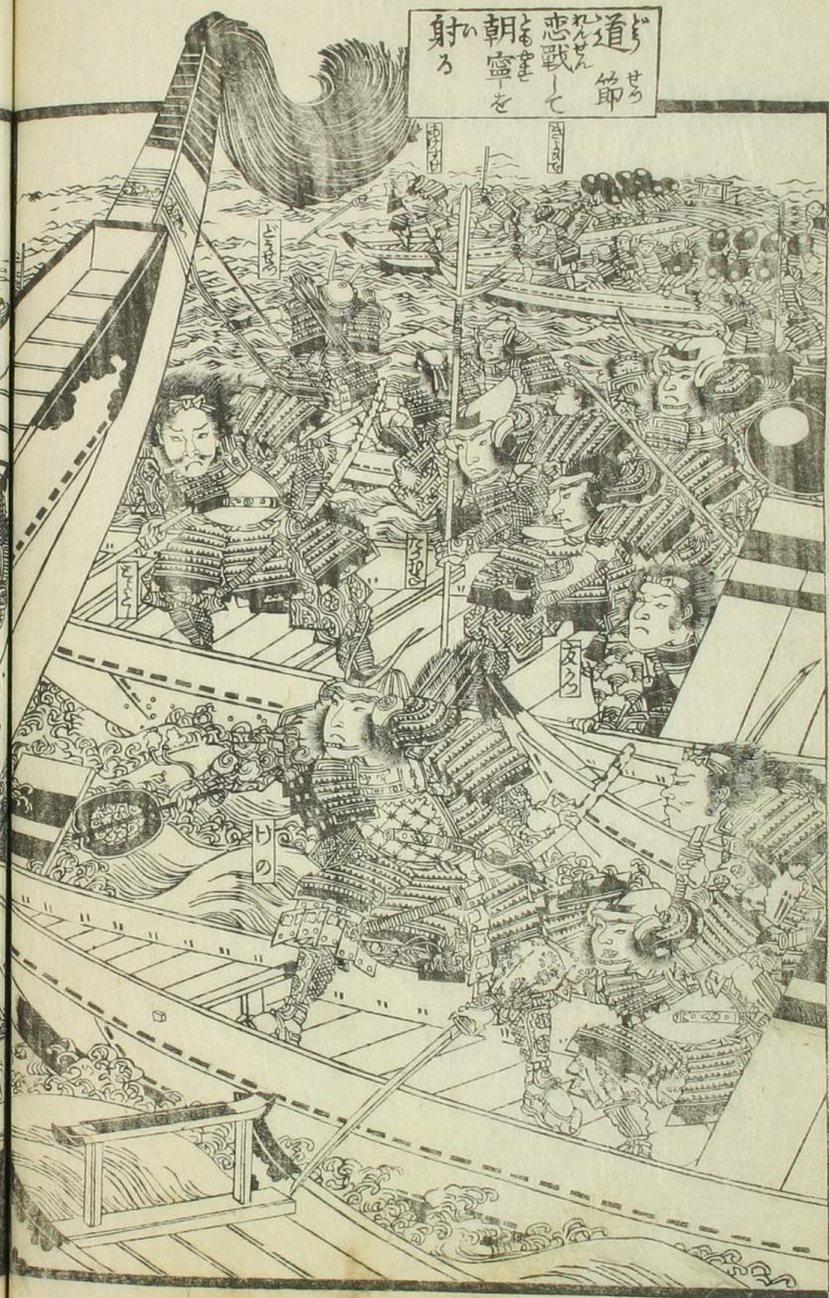
儘せる所殺を大刀風と共に聲震發て愚る哉定正憲儀寄隊の兵在皆
聞れ豊後国に敵に降ん我い其舊臣る濱縣馬助と名告りしい実にあ
らぬ軍師大阪の密策に従ふ。定正を哄り欺る。実い里見恩顧の頭人浦
安牛助友勝なると知ざるや。若们い是鳥の群鳥這圏套に入りしれば皆炙
禽に成んのみ笑べしと。喚りつみづから艨艟を推衝と漕脱て自家の先鋒に
加りて俱に敵を攻撃ける。小程に風火いよく熾に寄隊の船い一箇と
其燬を受ざるもなりしに将帥士卒の差別なく。こちらに慌噪
ぶつ。慶を喪ひ。燬を脱れんと欲りして海に入る者い水に溺れて命を殞し。
然るに猛火に身を焦して免る者極て稀なり。斉が中に式部少輔朝
寧い心疾に小将えければ又蚊くも艦を漕辟せて風側より三浦のかたへ
脱れ去んとある程に印東明相荒川清英俱に快船に乗走らせて二
隊の従兵七八百名返せくと喚りて透もあらせず追蒐来られい朝寧れ近
習外官の老兵皆只主を殺せじとて。近つく敵と斫拂へ朝寧も亦防禦
射て且戦ひ且走る逃るに順風の艦なれば明相清英勇るに不わねど波の上
自由なるに殺る漏をべく見えくる折に大山道節忠與に定正を生捕んとて
連りに艦を找る程に見れば落ぬく敵船あり。明相清英二隊の艦なり。趣
へども竟に及ざりける。其敵の旌旗水幟い是紛ふべくもあらず朝寧なりと
思ひ〻ば心ひとくいそぐれ。他い則定正の庶家子と故主の為に寃家と
半隻ぬ〻も當君里見殿に是獲敵の骨肉と疾殺を捕らぬ印東
荒川噫ゑ寛し。と焦燥て且我舵工を罵励せども間遥に遠ければ亟に
赶もつれがれ道節忠少く焦燥て那里に落ぬく敵の船い扇谷式部少
輔朝寧と見しい僻目欲恁ふ我い煉馬の舊臣今い里見の股肱の

文溪堂藏

臣八大士の隨一なる犬山道節忠嵩なるを知ざるや。返せ返せと喚りて。前面の言ふ程あれども豈脫さんやと執る弓八三人張ふ十五束三伏なるふ征箭ちの刺ふく。最も易げふ能弯固る鋼尖を敵ふ向ふく波の立る隨ふ眉尖刀引提て見ふる処を道節ハ矢聲劇しく漂と射る射られく朝寧一霎時も沼堪ず身を仰反せて大洋ふ隊ず水底ふ沈こけ。是ぞ驚く其隊の士卒ハ吐嗟とぞふ釣児をのく。王を極ひ揚んとく。舵を留めくあつける程ふ印東荒川二隊の艦ハ波濤を閑ふつ漕よせ来て乗移りく。敵を擇ず斫伏せ就中明相清英の大刀風ふ中る敵兵あるとなければヨヽくハ舵の下ふ平張伏し或ハ跪ゝ頭を敵ふく。命をしむ者勘くれど明相清英うらふ笑ひく。ゼ益の殺生をべくぞと。皆悉く結杠せけり。有徳し程ふ道節ハ艦を走せ舷ふく来つ。這光景を見て喚るふ。小六太郎一

開る西なる。其ハ汝る奴们を降をとも生物るとも敷漢ーのゝ何ふせん器械艣舵と奪合く。潮のまふく流し遣りね但ゝ閑ふせぎるべ死ハ我射て隨ー遠前ふけーふ落て水底ふ沈ふなる一将ゝ他ハ必朝寧るゝん惜むべ遠前ふけーふ落て水底ふ沈ふけん首を獲ざりー悔しさよ先求猟んぜ求猟ぜや。と詞を急迫ふく罵ふーゝ。士卒ふ下知して今朝寧の隊ふる四下ふ釣児を入れて撥撈らるふ水底深くて届るべ又小猫を下さるく那亡骸を索求めく引揭さぜく欲るふ流れや去けん舷ふ契して剣を求るふ異るゝぜ竟ふ其功あるとるければ道節屡嗟嘆して恁と知らば赶迫く必撃捕るべりーふ遠前ふけーふ悔しさよと獨言のゝ士卒ゝも倶ふ慰難くりける。前巻第百七十回ふ現八前を拔く。水死の将を救ふとある段を照し見るべし。當下明相清英敵兵の器械艣舵と皆悉捉棄く。結杠りー隨ふ流ー遣る没架舩の往方定めぬ扇谷の士卒ゝハ。恥を思ハぐ蜻蜓の命生ゝを欲ぜ流ふ儘る

火攻の功成て毛野
又東良を虜
八犬傳九輯卷四十四
廿六


道節
恋戰して
朝富を
射る
八犬傳九輯卷四十四

船の内より共侶ふ伊豆相模の方と見且て那見よ遥ふ那里へ向く船ふ我老館（定正）とふふを御坐をめれ臣ゑと倶さをのぞをとのを道節明相清英ゑと遥ふ伝と相て原来定正どざゝれ疾敷ふ捕んと舶人公們をいそゞ立てゞ迂蒐る順風の舵ふ導られ伊豆狭相模狭武蔵野の逃水へとそ逃さゞと惴る心そ勇れける案下ゑの日里見の先鋒の頭人小森但一郎高宗千代丸圖書助豊俊ハ浦安牛助友勝と相倶ふ寄隊の前後より火を放ちく寄く敵の衆艦と焼ゑ〜ゞ扇谷の先鋒の頭人大茂林小彦濱川小渡其隊ゑ士卒共侶ふ焼れく命を殞さゑゝる〜。然ども寄隊の總大將扇谷定正ハ大石源左衛門尉憲儀箕田源二兵衛尉白峯麻生介廣原と近習の毎のをふ〜て又蚊く數箇の小舫ふ乗移り疾五十子の城へかゝ入らんとく武蔵と投く脱去る所ゞ中ふ第一の隊長ゑる小幡木工頭東良と頭人九本佛九郎望洋の隊の両艦ハ辛くして燬を逃れらども既ふ其舵ハ焼亡て小舫もあ〜ぞゑ〜ゞ倶ふ漂ひ〜と小森高宗千代丸豊俊浦安友勝並ふ木曽三助季元ハ其隊の快船數艘をもく透間もわゝぜ赶蒐ゑ高宗と豊俊ハ九本佛九郎ゑ隊ふうち向ひく。兵を找めて攻戰ふ佛九郎望洋ハ本事ある猛者ゑれゞ左右ゑく敷ふ伏られゞ其隊の兵も皆死を究めて免れゝ〜ゑと思ひけん敵の船ふ飛乗々々或ハ引組ゞ刺迭へ或ハ倶ふ海ふ入る在昔書永の戰ひも徒やゝ有けんと思ふめる。望洋ハ近つく敵を殺拂ひ殺退けて竟ふ千代丸豊俊と鎗と合ゝ一上一下と迭の奮闘男術を盡ゞ両敵の船寄てハ辟ゞ辟ゞてハ合ふ生死の海ふ潮成を知死期時孰先ぞと見る程ふ豊俊既ふ腕乱れて那身危ふゝりけれゞ小森高宗是を見く又蚊くも船をよせ合せゞく遂ふ九本望洋を斷敷ふ為れども倶ふ軍令を守りく首を捕らを敵の残兵の降

るを饒して這鬪戰に果ふけり。尒程ふ浦安友勝木曽季元に両隊の快船二三十艘を飛が似くふ走らせ来る。小幡木工頭東良の没舵艦を船亟木香桁の像くうち囲まく。拗んと競ひ蒐るを。東良に毫も怯ずに他に是管領四家光の一人ゆく。武勇援萃の雪えあり。且其家臣木代漢彷太名増瀬五四郎と嗅倣くる。両個の猛者あり。けり。俱ふ其の隊ふありければ。主僕力を勁せ敵を防ぐく。撓む士卒を罵辱る刃尖鋭かりければ。友勝季元勇敢しとゝども。尚鬪戰を角ゆく。両敵雌雄を分ざりけり。然が其の時犬阪毛野胤智に小幡東良の猶勇るを豫より少知りて。友勝季元卒尒ゆく。捕漏さとの。ゝん狭とそ其身も船を找ぎて。間近く寄せ合せく。舳頭ふ発児を建させて。銕をもく輪縁ある。軍扇を採て尻を撤く。端然としてうち見て居り。然が里見の衆兵も是ふ機を汐く奮勇十倍勝ふ乗る。程ふ浦安友勝木曽季元に俱ふ

那両個の猛者。木代漁彷太名増瀬五四郎と桃戰ふと。平嗚許。季元竟ふ瀬五四郎をぐらりぐえと斫仆さ。其の時小幡東良に鎗の尖頭ふ血を濺ぐく。近づく敵を幾名狭刺殺して寄せ立ぎ。今瀬五四郎が斃れを見ぐ怨ふ堪ざれが奮然しる鎗を延く。耶と聲ゲけて。季元の肩尖を畏懲と刺さ刺きく。季元身を仰反せて海へ乗と。隊ゝ東良ゆうと鎗を直ゝ。ゝ刺んと推下さ。季元に水中ふ敵の鎗の蛭纏ふ楚と撞りて身を浮せ。曳る。隨ふ敵の艦ふ跳り入りて其鎗の幹を握扱て東良ふ引組で。摎仆さんと角へども。東良も坂東ふ名高る力者ゝけれが敢又物ともせぎ竟ふ季元を組伏せて首を掻んとゝ首を捞りく。援きくせ程ふ毛野に持る軍扇を礫と擲りる術錯ぎ東良眉間を打傷られて。颯と潰る鮮血と共ふ眼眩ぎて。仰反れば季元下より反復あ。壁く索を被きくるふ東良膂力剛けれが其を抵で掙せぎ。當下里見の雄

兵船及浦安友勝い竟ふ木代漁伯太を斬仆して自家の士卒共侶ふ季元を相援けて折累りつ東良と堅く結束りて牽居けり然が小幡の隊の兵船の悍死者い既ふ毀られ其餘い敵ふ殺立られて今東良の虜ふ做るを拯ふ暇もなくれい誰り亦よく敵ふ中らん皆又を捨跪ふく倶ふ擒ふ做りふける恁而季元友勝い生口小幡東良を這方の船ふ移し乗せて軍師の実検ふ入れ〻ば毛野ハ只ハ管嗟嘆ふ堪ず憮然とて云へるやう現孫子を讀む者ハ非如温順の君子とハへども不仁の心の起らぬみ〻其人を殺しても〻已を利ずる方の教ふ由れば〻現兵ず凶器ずる哉抑我両舘里見殿御親子ハ今の世ふ又ハ易らぬ仁君ふ御坐せども我毎敵を迎へて死生を爭ふ這戰場ふく何ぞ仁慈を行ふ由ゆらん是則乱を攪めて民保ふ湯武の心ふ同じかるべ〻已ゑくと獨言ずる貌を伝と更めて却東良ふ向ひていふやう小幡生今日の掙死視を敬篤ずを生ぞふ喜取愛ず。我風火の謀をもて寄

隊の衆艦を焼けしよりず定正王を首ふく其隊長諸頭人雑兵ふ至るまで敢敵ふ中る者ずく皆免れずく欲ずる故ふ友て死ずる者ヨ多ずる然を和殿ハ乗ずる船の楫を焼れ故ずるべけれど敵ふ中りて血戰して事のあふ至りて〻ハ尾礫の中ずる真玉ふ似ずる我其武勇を愛ずるの故ふ解恕して かへ〻ずさ見和殿一箇を饒〻ずとて我勝軍の負べもゆゑぞ。あら我君の御心ハ我私の慈善と思ひて兵毎ふ其素を早く解ぎ。上ぞ兵ハ執索の雑兵何ぞ兵ぞ東良ふ被〻る索を早く解く撥遣り棄れば東良ハ身の福ふふ且恥且感謝ふ堪ず姑且して毛野ふ向ひていふやう思ひ出ずる慈悲放免現江湖上の噂ふ錯ずぞ里見殿君臣の仁心ふ至んとハ是ふ就ても恥あれ這回扇谷殿の攻伐ハ佞人們の薦ずる所我始より其事を知れども諫ず聽るべけふあらざれば心ふもあらず我衆と倶ふ今日の水戰ふ従ひ〻ふ一戰ふ及ぎあて既ふ大敗ず主將の安危を知るよりもなく我身一箇免れんとて今ハ何

ら名の面目あり。故の城地に還んと。君辱めらるゝとき死に臣死せざるべし。齋の田横、鳥取部の萬の義烈に及ばざるとも。我も亦然ざるの志に致さゞるべし。已るかな是まで。と言ふも詭らぬ傷る。雜兵の帶する太刀を見るとて。拔合るゝもの。項に楚と推加てみづから首を斫落して。軀に撲地と俯さるける。思ふ優る東良の勇猛義烈に驚嘆する。友勝季元士卒們いはゆる小森高宗千代丸豊俊も既に敵に戰ひもれく。船と併べて在りしを這為体を視も。听もあそ。俱に感嘆をさるける。そゞ中に大阪毛野に憶ぎも膝を拍鳴らして。嗚呼果せるかな。忠臣義士の生を猷ひて死を樂む志。誰も低こそあるべけれ。定正賢良ならざれば。彼に都て道に違へと。猶其大夫に道灌あり。且那子に助友あり。又這小幡東良あり。あをもて其大職を失ぬ。削らるゝとも。どもいまゞ亡びざる所以は。先や這亡骸を宅養に贈りて。我君の大仁大慈を知らしめん。各〻兵毎其生口を解饒して。送るべく這意を告知せよ。とふに士卒皆ちろ泣く。恩赦の一義に及ぶ程に。毛野は又艅艎に課く。那艦に相応しかるべき艇一艘を擇出さゝるべく。小幡の士卒に取されば東良の殘兵を敵に恩を謝して。隨即東良の首と其骸さへ拾起しつゝ故の艦に移し載々別を告く。順風に儘る帆を揚く。相模地投く還らるべく。船の迹なき如く世間に脆きは人の命なり。かくて又毛野渟智は高宗豊俊友勝季元等のその日の掙を誉ゝ。いはゆる各戰功甲乙すべし。千代丸生は萱罪を償に足りぬべし。就中木曾生ならずとも。あるべきことなり。杉倉翁の季子なる武者助の弟なれども尚青年なるとのゝ。今番初陣なれども。小幡東良と戰ひ時水中の掙に。実に奇にして亦如ず。藍より出て藍より蒼く。父後負しなるべし。和殿其肩矢疵浅痍なれども。潮水に入りてれば風く療治せよとのゝ。とのゝ。脆て准備の業を令出して。其鎗傷に塗ける。勞勤を閑ちなれば。季元深く感謝して。心八入に勇ましける。當下毛野は又に

約束の開戰に大角ぐ今まで出て來ざるは故ありもあらん。心許なし。獨那人のさるらぎ。敵の爲に保質にせられる妙真音音曳を單節も恙あらぎや。胸安からぬ疾五十子の城に推寄て一旦城を攻合る志猶大敵を懲さに足らぬ四婦女の安危を訪ふ由なし。今勢に乘らぬて竟に志の圖を失ぐ。蛇を殺して頭を送る後の患ひなくらぎや。疾柴浦へ船を找ん諸軍兵士の意を沼て先腰戰飯を拔くべ。とらぶを友勝等皆諾ぎて現那四個の婦女子は今も五十子の城に在ん定正逃て城に還らぬ必敗軍の恐に堪ぎて四個の保質を戮べいそぎのよい理りとよへ亂智點頭て我も亦始より飽まで苦計を施されば志の田地に届りなり非如定正燬を免れて城にかつ入るとも只心怯れ胆落て防戰の備をるさんの亟に保質を戮まに暇あらぬ志の義に心易らそんと解れて大家感佩を但犬村大角ぐ三浦暴二郎義武と爭に安危ぐ具らぬ開に又下回に解分るを聽ねかし。

南總里見八犬傳第九輯卷之四十三四　終

南總里見八犬傳第九輯卷之四十五

東都　曲亭主人編次

第百七十五回

南弥六靈を顯して子を祐く　礼儀時を失ふて時に爲に有り

志の日文明十五年。十二月八日の曉天に甲斐の武田信昌の代軍をりける武田左京亮信隆に豫欲まるよりあれば定正の衆艦と共に纜を解めらる胡意波上逆に後れて那隊に従ぐ浦河の澳に猫児を下さて悄地に順風を俟つ程に天に稍明るんと思ふ時候成る炎の颯風起りて是空九竟と舵工に下知して前面に向る鋸山の禁路に投て漕ぎ出す相模の浦河より上總の鋸山に最近て。水行二里に過ざるに順風に儘て便宜あれば一瞬間に其衆艦に件の浦邊に果けり。當下信隆に艦を棄て磯に登りて隊の兵を皆從へて。悄地に山路にから入て。已に故の城地なる廳南へ赴ぐを地方の

民も知ざりけ。ある日後ふ沙えけり。話分両頭。その日洲崎の陣中ふ荒磯南弥六が身後の蜻蛉児ふ。磯崎増松い其実父荳野の阿弥七と椿村の隊士八と共侶ふ烽火臺の加役ふ充られて。件の臺下ふ在りけるふ遥ふ眺亘を洲崎の澳の水戰ハ自家十二分の大勝利ゆ。焼盡さる。寄隊千百の戰艦の燬を免るゝ人と稀ゆ。猛火と做りて。波上ふ焔々る光景ハ冦戍る巧石の海ふ。不知火ゆ似たるべく。敵の衆兵身を焦して。炉裏ふ叫ぶ聲ハ焦熱地獄の罪人の呵責もかくてあるべけれと思ハ毛骨竦然く。人皆駭くそ。中ふ増松い総角気ども。性とて武勇と好めば。自家の士卒の勝ふ乗る。挺紀を呈次そ。親と隊士八ふ咀くゆ。我们烽火の加役とて。その処ふ居れども。自家既ふ戰ひ克て。敵又寄ちべくもあらざれば。烽火を颺く。急を報るとあるべくもあらぬか。ゆゑや。船を乗り出て。焼殘りる敵の船を流さで。命も留むべく。且水ふ溺れて命を殞る。敵の亡骸を。揚るべ。開

中ゆ那衆隊る。大将品もあらぬ。然ども仁慈を旨とあゆ。館へ致ス忠信ゆ。ゆと空くあて。這臺下ふ在りけゆ。優るべ。その議を思ひ。ゆゑと言光実達く談ずと。阿弥七急ふ推禁めて。その亦要を挺りて。汝い尚総角なれば。館の憐を思食て。その加役ふ做されふ友く。御軍令ふ違ひなば。後の御咎を。何いせん。無用々と。君れい隊士八も亦その意を好とて。倶ふ不の字をいるのを。従ふべもあらざれば。増松ゆ。ゆ。と思ふ。あらぬ。争ひ難て。黙然とて在りける程ふ。敵の衆艦い燔盡されく。開戰克て自家の勇士い敵の残兵雑舫ふ乗りて。命を渥りふ逃去ると。猶脱さでとく。快船と。漕走らせて。赶ふ程ふ。洲崎の澳ゆ。兵燹火絶て。敵の乗棄し巨艦の。或い過半焦るあり。或い舟底のみ殘るもあり。波濤の揺動々々。漂ふを。増松遥ふ眺望て。今那艦と。食るべもあらぬ。熟の時を。ゆゑと。思へば。心焦燥て。連りふ嘆息あり。折ふ。天津九三四郎。員明い。戰飯餽の所役果て。聊暇を。ゆ。

その日の水戰を見まく欲さふ伴をも倶せぎ。劍太刀。身に身甲ふ鉦脛衣まで。這頭の浦邊ふうち出ぐ。舊家老隷の老僕詰茂佳橘と相倶ふ料ぎまくふ來ふけるふ增松ぞ三人とぞ前日洲崎の陣營ゆそ義成主ふ見參の折迭ふ面戎認まくあれば。增松い歎びてのまぐ口誼も果ざるふ。件の意衷を慥々と告て好夕を請と。向へば九三四郎駭嘆ど。噫和郎い年尚十五ふ足らぬ里の総角ぞりけるふ慥る忠勤を思ひ起せ。恐らく南弥六の靈憑くいるまゆぞあらんぞ。我も亦恁弱ヨ病るる。主君の與ふ館今番の従軍を許さぬゆぞ絶ふ是戰飯司の蛭児所約ぞ。ありけるど本意ぞ。とのぞ思ひふ今日ハ偶暇ぁり。いでや和郎と共侶ふ那海上ふ焼殘らぐる敵の艦を含集へて。那亡骸を曳揚て。然ども這情願を先館ふ請まりて。御免許を稟るふ。ぞば軍令を破るふ似ぐ。とのひて後方ぞろへ。爲よ詰茂和老い。昨日堀内嗄ふ從ふく。御陣ふ參り在るて幸ひ。

情由い目今听れ。如いぐ增松と咱ぞ與ふ堀内王ふあの義を告て館の御免許を請ぬひ。館倘御許容るぐば小可走りて又來ぞい障らぐ。と思ふて去向とのぞ。館ふ答て急ふ增松と阿弥七と隧八ぞふ揖を為て君ぐ在ま陣所を投て走りけり。爾程ふ天津九三四郎いあの烽火臺ぞる本番の頭人ふ增松ぞ情願と目今詰茂佳橘とりく館ふ請まりてるりさへふ箇様々々と告知せぐ。這臺下ふ維れる快船二艘と釵児桙索さへヨく求ぞ。開ぐ一船ふ增松と阿弥七とうち乘せ。又一船ふ隧八と九三四郎とうち乘ぐ。倶ふ艣を推て舵を操りて漕出ふ。皆是上総人。これば波の上自由ゆく暴風激波をものともせぎ。又只這四個両船のこるぐ烽火臺の頭人い尚総角ぞる增松ぐ忠勤を賞感して。倶ふ他ぞと帮助んとぞ。別ふ快船十艘ふ雜兵百十數名とうち乘せて。

増松九三四郎等ハ従ハせ〻ル増松九三四郎等いたの目の挿ハ便宜と為て焼
残りくる敵の巨艦の流るゝと雀躍して這方の磯ハ維ぐ者勘くゝ又釘
児をとゝく海を捞そ両敵の亡骸を索るハ自家の士卒の戦殁い稀ゝ敵の火ハ
焼れ水ハ溺れる屍骸い数多ハ盡べくもあらぬ有様ー程ハ扇谷の先鋒の小頭人
水禽集四郎緑林錦帆八四九郎近範い原是海賊の頭領なれば水戯至巧の
本事あるとも敵ハ艦と燔れー時俱ハ水中ハ火を逃れて波濤を被げども敢死
るぞ既ハく其艦ハ焼亡て流る板子を抱ハ身を浮せ波濤のまハく流れて在り
焼残りくる艦ハ逢つゝ乗く逃れ去らだ思ハのゝ亡骸亀の浮木ハ似てあと
かく海廣く波暴けれ〻ゝ便宜を為ざるハ烽火臺なる加勢の雑兵们い船より
是を見ー是も亦敵狄自家の軍兵の浮屍骸なべーとそ為ハく釘児を食延て
極よるく船ハ載ーゝ緑林と近範い俱ハ古の便宜を為られ猶も死ーゝ面色

ハく一乗毒時氣力と頭ハく共侶ハ働と身を起き其威勢初ハ似き腰ハ残ー大刀
引抜く船ハ敵の雑兵を斫仆ー又斫仆せ〻ハ驚ハ噪ぐ餘の雑
兵も中る者ハく散動て痍を負ハ者ハ多くハ当下天津九三四郎い隊八と
只二人別船ハ乗く在り今ハの異変ハ驚ハて俱ハ船を漕ぎ寄せ来く件の船ハ
乗移りそ〻ハ白徒卒小ハ為ハて水禽集四郎緑林
と刃を交へく一上一下と聲をかけく殺結ぶ程ーもあらぬ増松も亦是を見く吐
嗟とぞ親河弥七と共侶ハ九三四郎を援んとて船を這方へ漕ぎて来ぬ
錦帆八四九郎近範いも是を見くく増松ハ童年ハ為と侮りて敢又物
とも思ハぬ近つく隨ハ其船ハ躍て閃りと乗移ると河弥七い乗せ〻とそ械ハく延
ふを近範い隻脚を飛ーゝ蹴仆ーて又増松を敷ハんとそ振晃めく刃の電光ハ
ハく反狄近範の目前ハ燦と起ハ陰燐の光ハ近範憶ハ眼を射られく苦と

百と六目夫
まつ松
増松勇を奮ふ両刀敵を撃

ちろのり
ゆう夕
ゆう夕
あと七

叫びつゝ兵兵く程ふ増松ゐるとカを援て斬るる鋭く近範が右の拳を斫落
甘近範徒ても猶弱らぎ左のまを増松ふ組んと栈ひを遣反して鎧の袂カ
撲地と斫るる裏斫る窮所の深疵ふ近範竟ふ堪難て殿居ふ撞と平伏
俯くる脚を阿掻て死ぬげ。余程ふ又一船る天津九三四郎員明い水禽隼四
郎緑林と刀を交へく刀尖より火出るまでふ戰へども緑林素より猛者ふして武藝
剽姚凡庸ふ員明危ふ見ければ椿村の隊八を俱ふ刃を打振々々援けく連
ふ桃を戰へども緑林威力莊ゆ右ふ中り左ふ拄る最も劇しく大刀風ふ員明も亦
隊八も身ふ負ふ痛疾ふ堪難る隊八を憶ぎも腕乱れ拄難てやく危ふ
程ふ又只磯崎増松い今剛敵と斬る捕うーかど蹴られて滾び親阿弥七を勦り
慰ろふ眠あらぎ又員明を援んとくいそぐく船と漕よまるふ既ふて員明い只受
大刀ふ傲れるのを。吐嗟目今。斬る果さるべく見えけれ。増松心焦燥て間いらまぐ近か

らぬ水を隔く船より船へ閃りと蜚入る自得の剽姚緑林目足ふ敬焉ぐく見る処を
丁と斫る斫られて緑林一霎時も沼堪ぎ刀を棄て仰さまふ撞と輾べ員明い沼ぐ
と刀を合る直ーと。登ーと蔓りく刺んとまるを増松急ふ推禁めく。ゆ天津
主権且這奴を活ー置ぎ其姓名を知るよりも定正主の存亡を誰ゆ訊ね誰ゆ問ん
惴るの要ゆるるるべやとふ員明有理と悟りて然らば結杙ん。ゆ隊八索ゆ俱ふ
てゆ沼ひ。ゆよりくとゆそぜば隊八を。ゆやくふ痛疾を忍び身を起ーて濆絆と
ゆく緑林をゆも緊ゆく結杙りける然ば又阿弥七も近範ふ蹴られしのゆ怎る
ければ又艣を推く船を寄ゆて。苦戰ふ勁敵降伏の鈸びを舒るゆ。這他加役の
雑兵们が乘る船ハ間遥ふ遠うければ這闘戰を知るもゆ。知ざりーも稍ゆ知
ゆくうち驚ゆく聚ひゆ。且増松ゆ挿沁の拔萃るりーと稱賛ゆ。余ふ這撞
松ふ本性武藝を好めども素是莊客阿弥七が第二の子ゆ。且寒家ふ生云月

たれが敷る剣の技いかも学ざりけるか約莫去の日の挿沢に巧此糸の八郎朝鎌倉の源
太平輪馬の牛孺丸も伯仲ぢべ乙段あり開をいかぞと原るか上の出像か見え
たるか如く鉄帆八四九郎近範ぞ這方の船か程り来て増松尼ふるし時怪む
べ。其六義父荒磯南弥六ぞ在し世の形貌変らぢ身か細鱗の衫甲か重鉄
打る肱甲十王頭の脛当して黒金表装の大刀を跨へ忽焉として影の如く立顯
れて近範を遮り禁めてゑを動せぢ身か一圏の陰火と做りて増松ぞ口中へ閃
め入るよと見る程か増松奮男日屬か似ぢ武藝剽姚向か前るく矢場か勁
敵近範を斫て両段か做ゑーのこそ〻ぶ又緑林か痍を負せて輒く他を生拘りて且
九三四郎と隊八を拯ひ沼る戰功か則是南弥六の灵の致ぢ所ぇを九三四郎蓬
八か夢ぞるぐも是を知ぢ只か阿弥七のこ近範か蹴られて仆れるー時ぢの奇異を
認めーとの其言分明るのこそ〻ぶ増松か那時より眼光さへ聲音さへよく南弥

六か肖ざるとるく心術猛可か大人備られ誰か非とそ疑ふべ乙員明ぢ首ぢ蓬
八並か加役の雑兵都ての奇談ぢ知る者か呆るくまぢか感嘆ーて那南弥六ぞ義侠
る死して後も霊亡ひぢ貫助と其子まかーせーハ伏姫神の亞るべ。と稱ぢ美談か
ちくりける然ぺ亦幸か九三四郎も蓬八か其痍ぢ躬ぢ疼痛甚るーりぢ俱か
汗衫の袖を列ぢて其痍口か巻るどあて却緑林と責て去の両個か姓名と定正の
存亡と問けるか始ハ左右るくいざりーりども深痍の上る攻合か堪ねハ則其身と
近範の姓名出処又定正か憲儀后綱ぢか援けられて小舟か乗りて逃れ去
ぢらんとのか又只ぢのこそ〻ぶ加役の船か引上る敵の屍骸ぞ舟中か扇
谷の先鋒の頭人大茂林小彦濱川小渡ぢ去の餘か有名の士ぞ多るぢ誰か
知るーるるーか亦去の時緑林か見せく稍是を知ることるぢ去の時自家ぢ
諸軍兵か燧を免れ敵と対ざるもるけれか這頭か在るべるもるぢ獨軍師大

阪毛野が一隊の戰艦數十艘の洲崎の澳に猶見を下ろす。一番時士卒を
憩へて居り。相距ること二三十町に過ぎざれば九一四郎増松們いまの義を軍師に告
んとす。則生口水禽隼四郎緑林並に錦帆八四九郎近範大茂林小彦和中
濱川小渡鐵久等の首級亡骸を船に載せ漕ぎて其里に赴き言語々と
委曲を叙述して且生口緑林と近範等が首級を軍師の実檢に入れ以て智
賞感大なるべし。時に九三四郎増松阿弥七郎八等に對面せ。其戰功を言て
且の如し。就中ずくが如き増松が武勇拔群なる是併其義を南弥六の神霊の
致せ所歟義士の俠魂死して亡びず実に感ずる餘りあり。我い徑に武藏へ渡りて
敵の脚を止させんと欲せ沒等は又蚤く洲崎の御陣へ帰りて俱に功を奏しも
ん我も亦勝軍の義を告ん。とて隨即両個の老兵に課せて注進状を
らまに増松等が戰功の美事さに寫載せり。偖而件の老兵等は増松等が

船に乘て俱に洲崎の港口なる望洋臺に赴く程に生口緑林い深穢に堪ず。
船の内に死に死の然い胤智の隊の頭人小森高宗千代丸豊後浦安友勝木
曽季元等いはゆる後に件の奇談と聞く者義成主を首まく七大士四家老諸頭
人雜兵奴隷土民壮客婦女童蒙に至るまで感嘆せざるはなかりけり。不題去の
日の曉天に大村大角礼儀い料らずも新井の澳に三浦暴三郎義武に邂逅
せられて艦の前後と爭ひ已まず角口に時移りて天い明ると雖ども時候洲崎の澳
に両敵の鬨戰起りぬと雖ども猛火逆に天に升りて餘煙這方へ靉靆たり。
以ある哉初い勁風乾るーに其風猛可に吹来りて既に跟に倣りこれ遂り大角
元を瞻仰て原来鬨戰那圖に當れり。今ぞ無の口論に時を移さず期に
後れん兵毎艦を疾遣らざるべと喚りて刃を拔て敵の檝る艦の鈎索を地に斫
拂へば堀丹雜魚太郎貞住も勇る聲を震起て士卒を嗚り促して敵の檝

たる鈎索を斫拂ひ又斫断せて漕ぎ去らんまく欲すれば義武愈怒ふ堪ぶ
噫烏滸の白物毎非如管領家の兵とも烏合の野武士ふ魁せられて何を
もて面目ふせん兵毎先那百中を殺し捕らく蟻く水路を開ぎやと喚り呼る聲と
共ふ競ふ新井の三頭人水崎蛋人甲良亀九小磯真砂五ハ舵工ふ下知て
一瞬間ふ二十餘艘の戰艦を獨樂の像くふ漕続させて大角が十艘の船と送
る捕鯨竜て殺さんと找むと大角い敢又物ともせず四下ふ响く武者聲高く義武
听れ我烏滸ゑらんや若们反く烏滸技ゑる我豈赤品百中ゑらん実ゑ里見
股肱の臣是八犬士の隨一人犬村大角礼儀と我定正を謀り給く你ど親義
同ふ艦を借りーハ要あるゆゑ今朝ゑも寄敵の背より火を放さまく欲せーふ
ゑく你ふ抑留せられて那期ふ後れ腹壓ふ今先若们を屈ゆて新井の城を
攻捕てんみづう其愚を知るゑーば兜を脱て降らぎゑとゆ申せも果ぢ義武ゑ

且駭ぎもく怒りて原来里見の間諜児ふ欺れーたゑ悔ーけれ兵毎先其大
角奴を捉へゑ蝕く牽めゑ来よと脚咤鳴ゑーて焦燥ども既ふ新井の隊の兵们い
思ざりけるもの敵を里見ふ名高る犬士の一人犬村大角礼儀と名告るを肇て
吟ーとゑ勢ひ折けく左右ゑく找ぎぢ義武のよく焦燥くみづうら鎗をうち振り
うを振ら近つく敵を刺仆せば水崎蛋人甲良亀九小磯真砂五ゑも是ふ氣を
沼く漕寄々々艦と連りふ找れば惴雄の壯佼本事ある老兵さ各先を爭
ふぢぢふ殺い敵の船ふ乗移り殺り殺い又乗移られて連りふ桃戰ども礼儀ゑく兵を
用れい小勢ゑく反て撓ぎ負住も亦衆ふ先ゑゑ奮戦突戰術を盡せぢ
義武隊兵三倍ーて驍勇向ふふ前る死も勝を取ると易ゑらればいまぢ雌雄を分
ざる折ゑゑ洲崎の澳ゑる兵孫火風のまふく吹散されて。あへる亦飛ゑあゑゑ既ふ
ゑ一國の敢火内況て新井の船ゑる柴薪ふ燈と降かる程ーもあゑぢ其船忽

地猛火と做りて。防ぐに術なく士卒等い吐嗟とどろき驚噪ぎて。焼れて死するもまたあるべし。然ば是泰成を祝融の祟りと又古い是のまるで其火四下に飛移りて義武の隊の船と燔く者五六艘に及びぐ甲良亀九郎小磯真砂五郎水崎蛮人士卒も倶に辛く他船に乗移りて。遁れ去らく欲せしを大村大角堀内負任艦を風上より相找めて。士卒を駈て攻戰ふ大力風烈しくければ。敵の頭人亀九郎蛮人真砂五士卒まぐ各痛痍に堪難く。首を並べて俯せもあり。或い海へ飛入りて。死活を知ざるもまあり。當下二浦暴三郎義武い火に慌ぎ敵に怯まぎ。少く士卒を罵奬して近つく敵を刺仆し闘戰ふに豪なりて。其鏃竟に折れて火光に就て大角の乗る船を伝と見て。いでや組んと身を跳らせて。蒙蛾の像く飛入るを大角組せぎ身を反して其身を含て引投ふ板子の上に投仆せ自家の士卒折累りて。押へて索をうけ義武擒ふる

敵の残兵皆降参して。這里に閑戰果ふけり。登時大村大角い堀内負任を召集合て。我憶ぎも。這禍鬼に拘らひて放火の時に後れ。今ゆ洲崎の澳に造るとも。六日の昔日菖蒲十日の菊。倒に要るを思べ。查ふ大阪ぎ逆謀りて。八百八人の術に乱れて。自家十二分の勝軍ゆぞあらんぎ。因て又意に義同其子の我為に擒ふるりぬと。知らば必怨に堪ぎして。時を移さず推量ぎて。今を復ぎ欲せべ。所を我切所に埋伏して。敵を破らんるかぎらば。其隊配の箇様を。言詳に咄に示せば。負任並に老兵們も皆欣然と諾て。倶に隊分を定るに三百個の隊の兵に降名の敵兵を相加へて。通五百餘名に則是を三隊に分ちて。其一隊ゆ負任を頭人を。徒而大角を生口義武等を猶船に在らせて。士卒五十名をのく守りとまの他い皆艦に乗て。水際に登り。立り程に天い明け。烏鳴渡りて朝霜白く風寒りて。小程に新井の

城、王三浦義同ハ其子暴二郎義武が敢病後を戰ふとゐく今日水戰の先を
せんとそ隊の軍兵を引く出てゐたりをいふくと思難く再宿も沼せでありけゐ時候
近習者ども慌しく枕方ふ来て告るゐう目今澳の方ふ丁りて猛火の光り雲ふ入
ゐく中天ふ映まると告る者のいひしを船火事ゐらんと見る程ふ郷高ふ郎君ふ従
ひまゐく洲崎の戰場へ赴ゐ沙〻頭人甲良亀九郎と其隊の雜兵両三名
倶ふ痛痍を負ゐら城門を敲ゐつかへつ来て火急の注進いえと告ゐと義同ゐ
も果さ忘横児反復〻岸破と起て先我听ん袴をとりちれと
いそぐ〻立ち身装〻て大刀を佩ゐる燭を秉ゐる近習をそゐ伴従へく蹶く
廣縁ふ立出く其頭の雨戸を開ゐれば召ぶを避〻と甲良亀九従ふ雜兵共
倡ふ身ふ刀瘡濡鎧の吊腿重げふ庭門より走り入ゐ地上ふ坐れば義同
ふ蹴く聲を被ゐやをれ甲良亀九郎ゐろ許ゐ其身の刀瘡故ゐもゐ

ゐやと問べ答て然ンゆ郷高ふ御船を貸ゐる那赤品百中ハ扇谷の加勢ゐ
らぞ実ハ里見の犬士と呼ゐ〻犬村大角ゐそ出ゐ然ば欺ゐく借ゐる紫薪ゐそ
寄隊の艦を焼盡さまく欲せ〻ふ我郎君ふ抑留せられて合期せざれば然ふゐ
堪ぞみづから実の姓名を告りて閉戰ふ及〻ふ洲崎の方ゐる兵家ふの最も遥ふ
蜚散り来て我艦ヨリく焼〻ゐ是より自家利を失ひく敷ゐる者勘らば且
郎君の御武勇ゐるも御病後ゐれハ甲斐ゐりけん弓折れ勢窮りて竟ふ擒ふゐり
ゐ人ゐの他小磯真砂五郎及水崎延蛮人ハ戰殺せ〻欲生拘られ欲開ハ知ぞいへ
ども惜ゐゐ身の存命て何容々々とかへるまゐ〻いゐぐゐの義を報ゐらんと思ふ
ぞりふひゐと勸解〻息と喟と吻ひば雜兵も喘を止めていふ〻上ふ里ゐ〻ふ義
同ひゐく怨ふ沼堪ぞ原来赤品百中ハ里見の犬士でありけるよ鈍くも那奴ふ謀〻
ヨヲく士卒と喪ひ〻のミゐらぞ我ゐと檜ふせ〻れハ武門の恥辱ゐの上やゐ遠くゐ

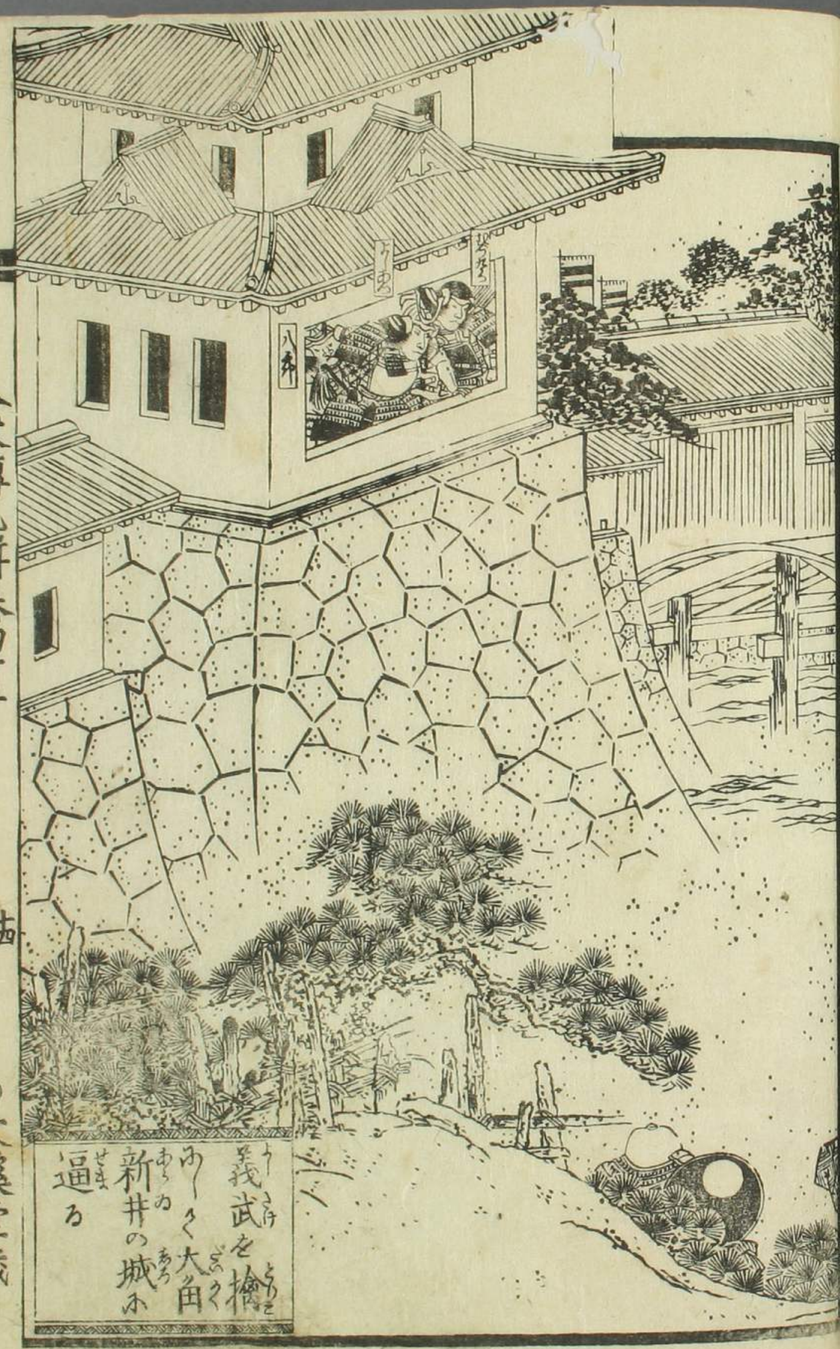
去るど迚荒く衄ゆく怨を雪ん疾陣徇して人馬を聚へよいそがくと近習ども
推立退りく慌しく其身は奥へ退いて時を移さず戎衣して肩尖刀引提て
様へ三さび出て来る程に素より武備に匿しる家風に従ふ勇士猛卒皆鞦
鞦と擐甲をそ蚓く廣庭に聚合者甲乙百名許るべ尚取ぬもまりるども
幷をもちべれに中ごれば義同は馬をとせさせて躍て内りとち乗りつ後れ者は迹ようと
せとゐ棄て馬に拍れて開く正城の鎖門より橋を渡りつ蟇直に馬頭上を投て走らまれば
従ふ兵皆後れじと喘々に續いけり。偖而二浦義同は怒に乗せて去向をいたけば敢
前後と見へ駛馬もけまちり猶駕かりし心地して口は管に走らる其路いまだ幾程なる
らぬに左右に深く敏り立る冬樹の邊を過る時思ひけるに左右の隈より發出る鏃袍の
響と共に忽馬と喊聲大く起りて。るれも間るに銃響箭叫敵の前後を轟し乱く顕
れ出る。両隊の軍兵左のうさより犬村大角右のうさより堀内貞住士卒を駈て突然

と鋭尖に鎗尖出るに前るに虎豹の威勢驚に噪ぐ敵の衆兵を刺仆又
擊る破る四下に响く聲も凄しく愚るる冬三浦義同は就く鳥銃に入る
獣に異るを尚戰まく欲するも命惜くば降参せよ犬村大角に在り茲に
ア。と名告りけく推捕竜る八面勁雄聊も透あるとるければ義同は辛くもそ
綃一方を殺碎きく馬を非して逃走れば況や士卒は立脚もるく或は敵に生擒
られ或は命を免れんとく降参るも甚しくは故に義同は一騎辛くして
城内へ逃竜りく猛可に橋を除せ城門を閉まて大息吻てを居りける。

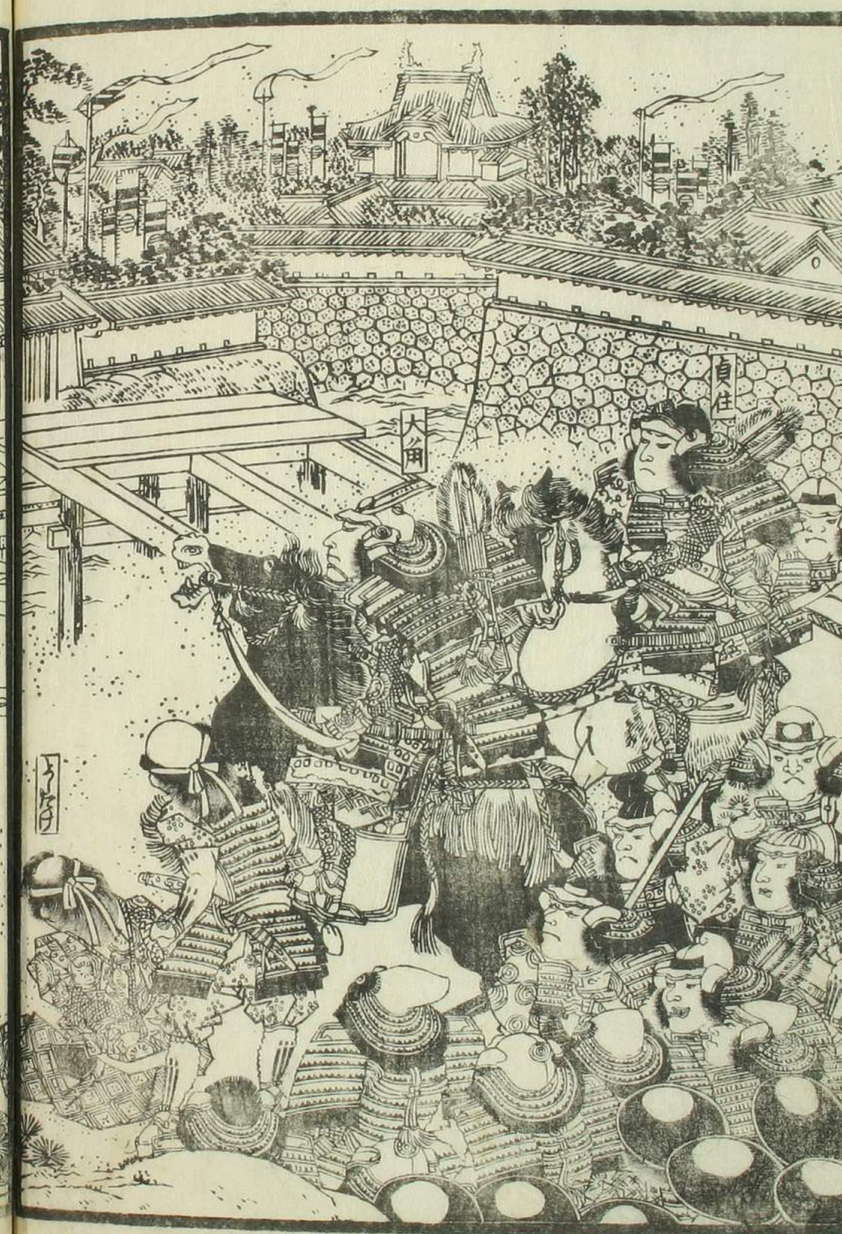
第百七十六回　禍福反覆して三士功を同くす
追兵屢逼りく忠臣主を極ふ

却説犬村大角礼儀は既に十分に謀りて戰ひ勝ぞとのことるければ。權且
路に士卒を憩へ。腰戰飯を披きるに敵の馬さへ獲ようべ秣を索めそ

餌せるごとき。登時大角は悄地ふ負住ふ談まるゆう。我ゆく三浦義同親子は阪東一の勇將ゑ。ゑるふ敗績二度ふ及ぶい其智足らざる所以ゑれどもの勢ひを脫くべからず。我今義武を牽ゆくゆゑ。城ふ澁て恁々とゆゑ。義同其子と恩あの故ふ城を遁與して他郷ふ去らんぞゑ。自他の幸ひゑり。他義の與ふ子と棄て殘兵をのそ防ぎ戰ひ別ふ計策をのく城を拔くべし。先義武を牽せゆくとゆふ負住ゑる紀異ゑ。隨即両個の雜兵を舊海邊へ走せゑ。義武を守護の士卒ふ告ゑ。那身を召よせけりゑの時大角の隊の兵ゑ二度の降人を相加ゑて約七八百名ゑり。敵の乘棄ゑる馬ゑ以られば大角と負住い騎馬ゑ。義武を牽せゑ。新井の城へ推寄ゑる隊伍齊々敷整々ゑり。恁而大村大角い新井の城の正門ふ造りて馬を駐めり塹を隔て伝と城門を瞻仰れば其意ゑ以ゑる一二の從士聲高ゆふ喚ゑる。誰ふ在る。當城の人々ゆめいん里見の防禦使犬士の一人犬村大角礼儀來れり。當城の主三浦殿ふ對面して。說試んと思ふゑり。姑且矢丸を飛ばべゑ。あの義を主へ傳達せよゑふゆと喚門へば正門を守る頭人ゑ。ゑ。先陝牕ゑり透し見て。且驚ゑ且慌ゑ。隨即草占八郎勇ゑ頭九郎と喚ゑる。両個の小頭人をゆく。義同ふ恁と報らば義同一番時沈吟て。莞介と笑ゑ。額を拊ゑ。両個の小頭ゑふ呼ゑ。我今城樓ふゑり登りて大角奴と問答せ時。鳥銃を隱し持ゑ。他ゑ由斷を敷ゑ。只一九郎ゑ。恐ゑ復ゑ。ゑれども問近ゑり。ふ敷ゑ外ゑ。後悔ゑん。若們い新參ゑ。ゑ。ゑ。軍陣ふ俱せざれども。ゑる日武藝を試ふ。弓箭火銃何れとゑ。人ふ勝れ本事ゑれば。俱ふ銃砲を推乃て我後方ふ從ひ躾れゑ。ゑ。那奴を寵敷ゑ。よくせよ。恁ゑ。と示し合せて准備ゑ。ゑ。ゑ。城樓ふゑり登れば草占八郎勇亟頭九郎も相從ゑ。後方ふ在ゑ。當下義同い城樓の窓を開せて左見右見



文溪堂藏



文溪堂藏

佞く喚るかな。やをれ醜怪児犬村大角。你誑詐の計をのく船と借り我子孫
擒ふ為そ。好悪兇暴ふ尚飽ぎも。勢ふ乗り城ふ迫りて。又何事をいはくまるや。
と聲高ふ罵り問へば。大角馬を斬孫ふ。找めく徐ふ答るやう。奥州義同を云。先
よく怒を理めく。我ふりを聞ふ。我正儀軍師胤智の相計ふよりて。船と當城ふ
借るとへども。猶ぐ為るを。但是寄敵の大兵を火攻して。扇谷定正主従
懲さまく欲せ。ふ仙郎義武。王愁ふ我を封蒐ぎて。竟ふ閑諍ふ及びより。
已とを知ぎ虜ふく。則ふ牽めく来れり。和殿速ふ先非を悔て我と迎へて
罪を謝しるば。我も亦和睦して。義武を返ぎべ。恁ても惑ひ醒ぎて。拒て防
戦を射んとるば。先義武の首を刎くるふ唾して城を屠られ甚麻ぎやと。問返
ぎを。義同い歩も果ぎ。怒れる詩聲震起く。黙れ醜怪児。亟礼へ。我を是両
管領の親族ゆく。武勇をのく人ふ饒されふ。愛ふ溺れ子ふ顧く。今ゆく里

見ふ従んやとのひく。傍ふ引付措たふ。鍼砲を悄と拿揚く。只一發ふ大角を。
寛斃まんと欲ぎるふ火索失くもぎるり。ぐるふと。心慌く。八郎亟頭九
疾斃まぎやとのひく。後方を見久る処を。勇亟頭九郎。草占八郎。ひと嘯ふく
背よりる。義同の左右の腕を。摧るぎるふ。亟ふと合まく。撞と。縛伏せ登り。蒐りて
宛虎を結扭るば。像く。緊く索を被しるば。義同い吐嗟とぎるふ。叫ぶも其甲
斐あら。索ふ。かる折るる。救ふ。近習のるを。悔るのを。呆れて。眼を睜りく。在り。
送恨ぎる。方ぎるけり。當下勇亟頭九郎。草占八郎。両聲高く。喚るやう。大
村主諸軍兵及城内ぎる人々も。耳を傾けく。皆よく。聞ね。當城主三浦義同
とが。安房の国番臣田税戸賀九郎。逸時。苫屋八郎景能が。謀りて。既ふ生拘
たり。城内ぎる士卒。怒ふ。主を。救んとそ。ぎと。先義同を。結果けて。且若
们を誅戮せん。我隊の兵们。城門を開けて。大村主を。招待せよと。四下ふ云へ。聲

と共に義同を牽立て、又蜘蛛城楼を下り来て、刀を抜き義同の頭に楚と椎当れば、正門の頭人、其隊の城兵いとく驚き怯れて、怒よや、ねと叫ぶ。敢近つく者いなし。其間に逸時景能の隊の兵十名有餘門を開き橋を架渡そ。出て大角を迎れば、大角並に負住名に誘りて、事の便宜に毫も猶豫せず馬を又蜘蛛に倶に城に乗入れば、従ふ兵七八百名、義武を牽立て出と嘸に、綢入る勢ひ崩るく、岳に異ならねば、城内に在りとある士卒等、齊一驚噪ぐく。但蟢雛と散まど、像く皆後門より逃去りく、迹に残さるは、婦幼の號哭ぶのみ。ヨマ、りと雪えて、大角先老兵に吩咐て、開を一緒に集合せて、且慰め且勦らせて、士卒の乱妨を戒しむ。城中亟に静まるに、徒而田税逸時、苫屋景能に生口三浦義同を自家の士卒に渡し、守らせて、且大角等に案内せ、城の正廳に請まれば、大角則負住名と倶に、恥く馬より下立て、設の席に就しむ。従ふ老兵武勇の毎、倶に鎧の袖を連ねて、左右二側に羅列れて、徒而逸時景能、又改めて大角と負住名に對面せんとて、倶に其席に入りて、大角に、その両士の功を賞して、且に、思ひきや、田税、苫屋和殿等に、比蛮崎十一郎と共倡に、京師へ御使に立けるに、その城内に在んとは、神ならぬ、誰か知べき。故にとあるに、甚麼ぞや、と問へば、逸時先答て、然へ、曩に蛮崎生と共倡に、水路を京師に赴く程に、其船遠江灘を過る時、凶類や、滿に、乱れもるやうぞ、波濤に揺られて、既に反覆んと思ふと、屋に、誰もかも、更に活る心地、なし。死と極めて、在りける程に、舵工等、相占ひて、蛮崎と我に告るやう、今、その船の凶類は、其生年、壬癸なる人に在りて、その本命の人を、擇除く、蛮崎離舫ふ、載て、流に乗ぬれば、自餘の人々に、恙もなしとて、その船、又よく走るべしとて、その性の、怖立れば、大家驚騫に、憂るのみ、黙然なる、中に、我、二人、找て出く、蛮崎生に

向ひくらかるう。他人の知ぬ我们の壬癸の生年ゆて月も亦是ふ丁巳ゆの他伴當
夫役ゆも。必ずとをなるべ。這船遊山翫水の為ゆて。偽る蓐ある。ゆ俱ゆ
天命と觀念して浮流を河伯ふ儘もせん。俱ふ君命を羮りて。京師へ赴
く海上ゆく。免れぐ死命と知りて。身を犢性ふ做を惜して。其年ゆ人を
害殺ぐ不忠の至りゆの上やある。疾離舫どうち下して。我们二人を殺て載よ。今
ゆ隱もとろと必死の覚期ふ奬されく。遂ふ其生年の壬癸ゆを告る者伴
當ふ五名あり。舵工ふ六名あり。我们と俱ふ十二名迭ふ別を惜まゆ下ゆ離舫ふ
うち乘れゆ。蛮崎生もせん欲るをふ只訣別の涙を沃ぐ。其天命ふ儘せゆ現船
公の口占も時ふ稱へゆ當るる哉我毎十二名別れく離舫ふ乘りゆ。凶類立
地ふ鮮ふけん本船ふ風のまふく西へ走りく見えぎるゆ。然がとく亦我们ゆ乘ゆ
離舫ふ覆りもせぐ回く潮水ふ揺られくて。或ふ東ふ吹涙され。或ふ西へ推流されて。

大洋ふ漂ゆと一日一夜ふ及ぶとゆへば景能語を續く。徒而其次の日船ふ人さへ
恙なく流寓りて三河ゆる昔子崎ふ就りゆ。港口人ゆの邦助ふ因て旅宿を
求めて那地ふ在り。漂流の事の顛末領主隣尾殿ふ啓えりゆ。隨即別船を
ゆて安房へ返さべとあり。漂流艱苦の傷れゆ癒りん。逸時並ふ伴當
ゆる。病煩ふ者ヨヤりけれゆ。又其醫療ふ日を費して十二月の初ふりゆ。時候逆
時も伴當ゆも病着稍癒りゆ。隣尾殿ふ乞願して。船を借ぐく還らま
く欲ゆる程ふ猛可ふ里巷の風聲あり。扇谷山内の両管領諸侯を連れく
水陸ゆ。安房上総へ推寄て里見殿を攻伐ぐくとふ其言孟濃ゆられば
我们心うち驚れて。借ゆる船ふ皆うち乘つ連りふ水路をいそぐもめりゆ。幸ゆ
上ふ又幸ありぐ相模灘を過る時暴風又吹出く。船をやるべくもあらざれ
已ことを沿ぐ帆をうち下ゆ。新井の浦ふ歇りゆ。當城の番卒ゆ訝りて。船を

ぞ。一つ捕へ竜て。吟ふ〻く来歴を競問ふけり。登時咱笑と逸時い悄地ふ示ー合さる
ぎ。その地の城主三浦義同い両管領の親族なれば他も亦我君の怨敵へ然いるべ
き。今明の地ふ里見の家臣へと名告らば必那ふ殺さるべ。箇様々々ふらんそとけ
ま。と思ふ。あらを伴當ども沼さぜく躯て立ぜく。却番卒ふうち向ひて則頼
陳ぎるゆう。我們い三河る。隣尾判官伊近の家臣る勇ぎ五頭九郎。草台八
郎と唤ぶ微き者ゆく。俱ーるい伴當へ伊近這回両管領家の里見を攻伐
ゆふ。と偽へ吟ぐ。加勢の軍兵をまゐ。ぎ思へども素より城地編小ゆく
士卒ヨ〻ぎ。ぶひへ辯ー稟せよとある君命ふよる我们則使ふ立く五十子の
城ふ赴く水路ゆく暴風ふ吹勾引れく。その浦ふ歇りゆへと実ーゆふ出ーぶ。
番卒ども然もとそそ躯く城へ赴くゆたて事徒々と愬へけり。登時三浦義
同い左右ふ下知ー て我們両個を文注所る局の内へ召よせさゆう立ぜみぐう

其来由と問ふふと始ふ殊ぎれば敢又疑ぎ脱る板歯を顕ー て。呵々と
笑ひく却ふゆう。隣尾が忠ある志い現賞ぎべるれども若们主僕十餘名
ヨ〻寡の知れる人数ゆ五十子の城へ参るとも然せる御用ふ立べもあらば我折を
ゆく偽達せ。今當城ふ士卒ヨ〻ぎれば權且ふ留措ん武芸ふ本事ある
るべ前後の門を守るべ。とゆれて我們推辞ふ由る。開い辱くゆへ武芸ぎ人
並ふ〻へども何ぞ仰付さぜゆ。住ひゆん。とゆふ義同欲ひて次の日又我們両個を
馬場ふ召よぜく弓箭銃術何れとる。武芸ぎを盡さぜて試けるふ孰も
正鵠を外されば則正門の小頭人ゆく我兵貌ふ扱使ゆ。とゆふを逸時受續
ぎく。尓程ふ我們い折を覘ひ脱れ去りそ。安房へ還らゆく思ふのそ。ゆぎ便宜を
ゆるゆる。然ば昨夕犬村主和君ゆ赤品百中と名告く當城ふ来ゆて船と
借ゆ。一時夜目るけれべよくも見ぎ。姓名も亦異れば心もつぞありけるふ當晩

又義武がみづから和君を追止んとて。隊の者ヨヽく従へて。出て西北にも患ひと甚だ猶外事ふ思ひよ。義武の猛勇なるも病後とはらひなるら。果敢なく和君ふ生拘られて。今朝あも牽めく這城ふ推よ来ぬ折ふ及びて。那赤蚯百中ハ。即里見の犬士なる犬村某甲ぞありけり。と越ふ肇て吟知りそ。其後びふ堪ざれば。先疾城門を推開紀て迎入れまく思ひくども。我腹心の隊の兵なる十一名ふ過ざるふ。惴らば衍恣あるべ。と思難くありける程ふ。義同火急の拙策城拓り出て。城樓ふ登りて。みづから和君と向答して由断を覘ひ銃砲めく撃落さんと計りける。その折の帮助ふとて。咱若二人を従へられば心よろこびて後方ふ居ぬ。義同悄地ふ膝下ふ措紀て准備の銃砲の火素を夙く含ませと。義同ハ知ぎて。発まくまるふ火素をけれども。うち撥紀く度を失ひく。見くる腕を左右より捉り推伏せく。結杻りて牽建ひ紀と。迭代の長談脩話ふ。貞住並ふ諸士老兵事の便宜ハ恁ぢふ幸ありけるよと稱えくる就中大角ハ熟と。所果て逆時と景能の奇功を誉て且ふ。今翔て吟く和殿若ハ曩ふ御使ふ立るぐる。京師へ沼ぬぎるふける風濤の艱を漂泊の苦と。此を思ひ彼を懐へハ蛮崎ハ恙るなや。測知るべ紀るるくねども。今ゆう女々あく思ふて。盍ゆ。和殿若ハ風波の災火るく。倶ふ京師へ参上らば。那御使ハ果ぞけれど。今番の大事ふ遇ざれば。後ふ悔ーかくらんふ這敵城ふ抑留せられて。洒家と一功を同くあるる。禍福ハ糾ふ纏ふ似くるる。伏姫神の冥助ふ欠不測とふも餘りあり。因て思ふ和殿若ぐあふ在りー程詭詐の姓名も。當意即妙とのひらべ。其故甚麼とるべ勇。垂頭九郎ハ田刀の美と勇ハユふ従ひ田ふ従ひ力ふ従ふ頭の工る紀とれハ田力るぐる王と沼ぎ。又草占ハ廿古屋の苦ゆく。あの美ハ誰も悟り易ク。先義同と義正を。あの処へ召よ寄へ我對面ーてふようあり。とくといそぐせば逆時景能ハ果て。

俱ふ次の間へ退りけり。然ばその時三浦義同義武い里見の士卒ふうち守らまそ次の間ふあり。うべ逆時景能の実名実事を送もるく洩傳ーらび啓事て夢の覚る如くいとで悔ーく思ひけり。偖而逆時景能い義同義武を牽立まそ。則正廳の簷廊へ程よく楚と推居れば大角見々身を起ーて先義同と義武を受合まるつ。そび儘ふ上坐ふ推登ーて被る索を鮮んとまるを貞任逆時景能若へうち敬馬ゑく板止めく詞弁一諫るもう虎狼の猛るも媚て憐を求る者ハ四足を括られる故へ況や義同義武い俱ふ是武勇ふ富さり膂力百人を合まそ勁敵るふ甚麽ぞや被る索を饒ーぬふ只是千慮の一失欽慈悲も作善も敵ふてそよらめ。宜ふ危ゑ所行るべーとふを大角皆あへま不ゑとよ掛を揚げ角を辟ぐ。ヨカ兇猛の敵とふとも仁義ふよく勝ェるー。然ば我君至仁至義の軍令ふ遵由りて。ふの親子の索を饒ふい敵るぐらも

城主る。礼を失ハトと思ふのを。然るを他ゑも不仁ふーて。是をのて我を害さび各て。ふと空くーて。他を殺さで見てのを已んや。然らば他ゑもび悪名を永く世ふ貽さんのを。権且洒家ふ任せゆと諭ーう。躭く義同と義武の索を鮮。棄く。且慰めくふ。成敗い天ゑ時運の然るる所。誰ゑ和君親子を勇ゑとせんぞ。是ども今我為ふ虜ふせられて馬前の奴ふ做れる者ハ不仁をのて仁を伐ゑ。両管領の悪を資けて是暴をるさまく欲せ。故ゑ抑我君里見殿ハ行い仁義ふあらざるとるー。ふとのく我們ゑ。其仁心を仰ぎ禀て犬阪犬山と共侶ふ。今番水隊の防御使ゑれば只大敵を防ぐのを。ヨヲく敵を殺ー長く駈て城を攻め地を畧ーて境を増をとを饒されば。然けれども闘戰の常情ゑ。時氣と勢ふ乗るとゑハ敵の城地ふ馬を駐ぐ。我隊の兵の集合るとゑ想ゑ。ぐるとゑ。信れば其間和君御父子を水路より。蔽潘稲村へ送るべー。宅

眷属をも船に乗せ。共侶にと思へども。婦幼い故に風濤の害怕あり。
その故に御達い皆當城に留在せく。宜く扶持致べし。その美は心易う
て。且里見殿は仁君。和君御父子那地に造りの。敢俘囚とのく見ると
ても。礼貌必厚く。恁而東西和睦るべ。御父子共に當城に返されん
る。日を倦へく俟べきの。その美も心易うてと。詞徐に説諭せば。義武等
は嗟嘆して。默然とく羞る色あり。姑且して義同を又たるもと解く。
腕を拱て答るやう。いかく趣皆理あり。咱等親子は馬を馳らと射刀を練
るを。年来業とするのを。文学智術に浅けれど心鈍くも謀られて。且盗に
糧を竊て。仇に刃を借きまぐる。禍竟に蕭牆の内より起ると悟らば城留
まく。親子楚囚に為ぬ首を捕れるべ幸るんに豈遥々と安房へ行えや。
願くは情に。と辭を大角慰めく。又逸時景能に。さらば這

親子を別室に移して守せけり。恁而大角は士卒を水陸へ遣て。洲崎の
水戰の勝敗と山内顕定の鎌倉を館の光景を探らしむに。洲崎の閉
戰は寄隊無艦を皆火攻せられく。自家十二分の勝軍なりたと云。又鎌倉
を顕定の館は老黨斎藤左兵衛高実が。水戰の大敗と。新井の城は犬
村殿に攻落されと。知りく驚怕るく上心動く主君の宅眷に
俱て。館を棄蹟を埋めて往方も知らずと。況や山内の家臣は。
誰か一個も留るべ家火を船に運載く。宅眷を扶く水路より落亡とう。と
ぞ。有恁程に三浦四十八郷を。郷士豪民村長荘客は。年来
里見の仁政を慕ひく思ひ。各々戎衣く。新井の城に詣来た。俱に
大角の隊に属く。當城を守らんと願ふ者。千とのを數へべ。又只は足のまに
ぞ。鄙に城を棄て逃亡る。新井の城の士卒們と甲良亀九良さへ。

箭を折り誓を做して降を請ふ者城ゐ充けり。さて大角い招ぎて泊る所七千ばかりの隊の兵あり。然ば鎌倉い都會の地ゐく且阪東の咽喉ゐり。倘長氏ゐ据られゐば後々までの害ゐんとそ。隨即堀内雑魚太郎貞住ゐ雄兵二千餘名を授けく那地へ遣して鎮守とせ貞住則山内の館を陣営ゐて民ゐ莅むゐ善政をりくせりば賊民の乱妨あることゐ。ゐも大角の教ゐよりくゑ恁而又大村大角い甘古屋八郎景能ゐ課く。ゐの地の勝軍顛末と那身並ゐ逸時の奇功の趣を洲崎の御陣へ注進して生口義同義武を館へもあらもべーとそ。隊の兵三百名を授けて注進状一通を遞與ゐーゐ景能則快船十艘ゐ従兵を分ち乗せそ。義同親子と守護ゐい。洲崎を投く漕せけり。余程ゐ大村大角い坐ゐ三浦四十八郷を管領して善政ゐいざる所ゐく村長老ゐ約ゐる法度を寛くもれども敢

叛く者ゐく。税歛のヨりりーと寡く含れども調ざる者あーぞ。ゐてゐて倉廩ゐりゐ用ゐく。鰥寡孤獨を賑ーければ民皆其德澤ゐりゐ仰ぎて父母の思ひを做ものゐゐ鎌倉及新井の郊外ゐ近属豺狼ヨヌくありく。夜々人を害ひーゐ礼儀ゐ件の城ゐ在りー日ハ豺狼皆夜ゐ紛れて他処へ移らばゐゐりけり。豈只豺狼のゐゐーんや暴主奸相佞人賊民の好ゐそ良善を殘害して其宍を喫む者も必や憚ゐべ。実ゐ是孟子の所云君仁ゐれば不仁ゐー君義ゐれば不義あーゐ里見殿父子。ゐの年来移ひゐ善政の枝鋪ゐれば然もあーんとそ心あるも心ゐるれも謳歌俚談ゐあちける。話分両頭是より先ゐ扇谷定正ハ洲崎の澳の鬪戰ゐ犬阪毛野ゐ火攻せられて命も既ゐ危ふりーと其田源二兵衛后綱白峯麻生介廣原名ゐ技掖れて辛くして免れく蛟く雛艘ゐ乘移りて武藏を

投く漕去る程ふ従ふ兵ヨクくび。まの時同船ゐく左右ふ侍る者ハ大石源左衛門尉憲儀白峯麻生八廣原貧田源二兵衛后綱信城左衛達頼只是のこの餘い士卒三百餘名初五萬五千るりける。大兵ふ比まべ。什一ふぐも足らねど順風よければ漕脱く。約三時許の程ふ逃水之如ク武蔵ゐ。河崎の浦ふ船果ーゐ。乗棄く陸ふ登るふ。ゐより五十子の城へ三四里ふ過ぎれど。水路と来れば馬いゐー。然ーも總大將の御帰城ふ御歩行ぞへいぐゐーんと呟く者ゐりーふ。ゐの日河崎の郷ふ馬市ゐり牛馬經紀ハヨヌく集會て。馬幾疋ゐ輙ふ定ぐくゐりーと。憲儀見ゐり孰視て。兵毎那他を見よ那馬ヨヌく那里ふ在り捉て鎗を乗せまるべく。我ハもうち乗く。五十子へ御伴せん。牽のくゐとと吩咐れば士卒ハ唯々と応も果ぐ走りゐゐく聲詩めくゐれ馬主毎ゐの馬守の御用ゐ牽のくゐと喚りく絆児を解ゐ五六疋

奪奪ゐんとしければ。牛馬經紀ゐ驚ゐ慌くゐる理不盡ふいひぐゐ。縱守の御用ゐとも。ゐる皆人ふ賣りーゐる馬ゐ弁ゐ價ども賜らぐ。召さるてよい。といつせも果ぐ又聲劇ゐく。這奴ゐ大胆不敬ゐ非如千金の馬ゐもせよ。館の急ふ召さるふ。献らぐび目ふ物見せん。覚期ゐせよと。四馬りて。握固め拳の電光右よりも左よりも。毆ゐ仆ーゐ又踊躍ゐて。其好馬を五六疋追立々々牽のて来れば。憲儀い含笑て。麁悪ゐれども鞍鐙孰も一具ゐれば。心好卒々とゐひゐも先一疋を牽よせさるく。躍て定正ふうち乗らせて却憲儀廣原達頼后綱もうち乗く。倶ーて河崎河原ふ造りて。前岸へ渡さ。欲ゐるふ船公ゐい今の強虐ゐ。遥ふ見ゐ害怕やゐけん。船ゐ風くも漕退けく。前面の水際ふ維ぐく在り。雖喚々々漕のてよきれば。定正連アふ焦燥く。ゐく喚べとゐぐぜゐ。憲儀ゐく怒ふ沿堪ぐ士卒ゐ下知て。

舶公等と。遠箭に被く射て殺れぬと敦圓暴く罵るを。后綱急に禁めて
いはく。我館の御威德なるも。閑戰敗れしの為体ゆく。御帰城をいそがせゆへ。
田夫野人の侮りく。御下知に従ひまつらぬを怒らせゆへの鄙語にぞ。兒に棒
撃に似るべし。敵をば足らぬ者と知りて。這里ゆく時を移しあり。遠く追来
る敵のやあらん。然ば這河上を。矢口まで造らせゆひく。津を求めゆふとも。然
ぞ路の遠をば。わの美を思ひ。ゆるぎやと。利害を舒く諫めゝ。憲儀い
有理とぞ。答てらまぐ決めゝぎ。定正是をうち呼く。后綱の意見誠に然
る。然ば矢口に造らんとく。そゞ俤馬を歩まれば。廣原憲儀を左右に従ひ
又達頼を先に立ち。后綱を殿して。従ふ残兵恍惚るも馬を逐ひ。いそぎ
けり。小程に剛才定正の士卒等に悄く。轂仆される牛馬經紀五六名あり。
俱に沙に塗れ頭髻を乱して身を起しく罵れば。火家の伯樂里の壯佼

数十名走り集りて。情由を問くに。生所ゆるも。俱に遺恨に堪ざれば。慰めせぐ。何
火を附るのみにく。彼の兒開が中に馬淵場九郎長連と。唱徴る老師者あり。牛
馬經紀仁の乾父ゆく。毎に氣を使ひ事を好む。俠氣ゆて。自負む破落戸
なれば。那理不盡ゆ。扇谷の士卒を憎むと。大くまに。先撻れる乾兒等を叱
咤ゆく。且に。縱管領殿の威勢ゆて。せいるとも。經紀兒の賣買東西を奪ふ
誰か羨服せん。是等の日來に。今日のみゆく。上が上るれば下まぬも。賈係に。錢を遂
さぐ民を虐げく。身を肥したる報ひに。今日の敗軍。僅に二百。欲三百の残兵を従
へく。活路索て渡せられと云。那為体を見ぞ。鏑百まぐの損ゆ。尼
路一と思ふく。已もせぬ圓金の耳を揃れば。賣買ゆ。活馬を幾頭ゆ奪ひ。
和郎等明日より何をゆく。宅着に。糜々と。喫ゆ。疾迅鬼て。食復さぐ。遲曾
ぬる事ゆるものと。腰脱毎奴と罵奬せば。是ゆぞ。勇む牛馬經紀里の壯佼破

○内閣文庫藏

落戸事を好むも好ぬも彼此勢に負む似而非武者汰ふ竹槍造作腰刀赤樫の棒猪水牟或ハ纏額縄襷各々大きく身を固る場九郎を首ゆく。今は殘され一馬牽よりそうも跨る者五六名大家競ふ開ぐ程ふ武勇を好む破落戸。這里那里より走加りく。三百餘名ふ高しぶ。低てハ他と對応きべ。疾迂蒐よと脚を乱して咄と嘘て赶とりる。有徳る折々這津ふ又一艘の落人あり是則別人ゆ豆襄ふ妙見嶋の柵敗れ犬田小文吾ふ檎ふせられ。彦別夜叉五郎數世之他ハ犬田が慈善者。其隊の兵一百五六十名と共伯ふ虚舟ふ載られく流し放されくるふ其船大洋ふ流れ漂ふく或ハ西或ハ東して両三日を経ぬ程ふ。今日も辰巳の追風と成く。この河崎の浦ふ漂着あけるふ定正の隊の戰艦洲崎の澳ゆく。敵ふ火攻せられ。其一艦舳頭ゆを焦く。乘れる人ハ一個もあらで脱棄る申曽と器械ゆを焼殘りる水懺さへある見るふ。扇谷家の戰艦ゆを知ふふ足ら。

さてハ原来今日那澳ふ鬩戰ありく。舘定正ハ負さぬ。ハ狡と思ふふ胸の安ら
ねば。先士卒両三名を陸ふ登せく。這頭の風聲を捞らもるふ姑且して其兵
ゆ慌しくかゆ来く。箇様々々と告るを聞くふ定正ハ殘兵僅ふ二百餘名を
率く方僅ふの地へ脱れ来ら。馬市る馬幾疋狡豪奪さぬくうち乘て矢
口の々へ赴ぬ。又牛馬經紀ハ们ゆ開を怨く破落戸を三四百名取伏合て
赶く。思ぬ。ゆ知る隨ふ告ぶ數世ハ歎ぬ且狡ぬて隊の兵毎ふ談ぎ
る。我妙見嶋ゆハ犬田奴ふ檎ふせられく。大刀戎衣も身ふ添ぎ海達と
共伯ふ這船ふ乘せられて放流されく。稍ふの浦ふ寓けるふ幸みて
自家の焦船同じ浦邊ふ流れ来て器械あり戎衣あり各と俱ふ旦疑を
穿てふの弓を雪ぬこの鎗をりく。舘ふ帰ぬ。ハ。ゆる夕人们を追懲て鯽ふ
做きぶ先途の恥を雪るふ足るべく本領安堵疑ひる。ゆくせよとのそが

せば大家倶に威勢漲る。言れ御伴仕らんと答てゐる焦艦ゐに鎧哉
含て投被々々締る表帯上挿の笠前を駝ひ弓と含るもあり或い鎗を挾む。
准備ゐるも整へ然るべきと先に立つ數世に従ふ其隊の殘兵河原彼
ひに矢口を投て飛ぶ似くに追蒐ける。小程に扇谷定正い箕田后綱ゲ意
見に因く。憲儀廣原達頼等と殘兵三百許を扶く矢口を投くいそぐ
程に忽馬として赴る敵あり。其兵約莫三四百名皆没戎衣ゐ。騎
馬五六人あり。ゐ々に器械を引提て馬盗児と逃ると異口同音に喚りて蒐
地に近つくと。后綱佐と見るつく。原来那牛馬經紀们ら馬を召れしを怨こ
ろ。上を怕れ法の狼藉天罰思ひ知せんぞと罵るぐう乗こ馬の鑣
つを旋らして来ぬると屋逃と後つ程もるく。現戰世の習俗あて。市人
も皆武を好めば場九郎们い物ともせぞ。蒐れくと器械を振冈めて

攻戰ふこの時后綱に従ふく。敵と拄る士卒一百餘名尚寡ふあれども
衢に水戰に火攻せられて辛く命を免れしより纏戰飯ぐもあることるければ
餓て鬪戰如意るに低る島合の小敵に殺頽されて立脚もるく后綱
危く見えるが。定正も亦已とを沼ぞ憲儀廣原達頼等と。従ふ殘兵二百を
找めく后綱と援んとそ馬を返してうち向ふ浩処に一隊の軍兵敵に
背に出るあり。其兵僅に百五六十名皆歩行立るそ中に隊の頭
人とおぼゆる猛者鎗挾て聲高ゐにやとれ慥に見毋安礼るせそ。管
領家の四家老第一大石石見守憲重の隊長に然る兵ありと知られる
下總妙見嶋の柵の頭人なりける彦別夜叉五吾數世あに在り頭を並
べく刃と受よと名告喚り威勢猛く。隊兵を蒐て攻破るぶ箕田后綱
その隊の兵も思ひ切るを援兵に誰り勢じ勇ざん水母の骨に心地して

怯む逆徒を前後より。息をも養ず攻しかバ。馬渊の徒前後の敵に中り
かゝそ多く撃れて弁が中に。頭領馬渊塲九郎ハ。其田后綱と鎗を交へて一
上二下と挑戰ふ。修煉拙きにあらねども。其器械竹鎗なれバ。竟に尖頭を打
折られて。怯むを后綱やと聲かけて。胸前篤煞と刺とほしかバ。怺堪ず地上に撲
と墜ち。馬ハ離れて横路のかたへ走れバ人も逃迷ひて。撃るゝ者そ多かりけり
然バ數世が援によりて。然しも剛なる多勢の逆徒ハ或ハ撃れ或ハ又往方な
知ず逃亡て。路の障碍の開けしかバ。大家欣ぶが中に定正ハ今料らずも彦
別夜叉吾が忠戰をいと訝しく思ひしかバ。則大石憲儀をもて騎馬の邊に
召よせて。みづから来意を詰まくするに。彦別數世ハおそるく憲儀に向ひて稟
しけるハ。臣等ハ昨夜里見の防禦使犬田小文吾悌順に。妙見嶋の柵を攻破
られて。憶ぎ敗軍に及びしかバ。只得殘兵百五六十名を従て。船に乗りて虎口を

脱れて。再戦せまく思ふにも似ず。其船海へ推流されて。一日二日と漂ひつゝ今日なの
河崎の浦に船の寄りし時。那地の逆徒多く聚合て。館を追蒐まつらんとて既に打
出んとする風聲を。疾く聞えしかバ。驚きて御迹を慕ふて。こゝに来りけるに果して
中途に御難義あり。因て一臂の力を勠せて。御伴の衆と共侶に賊徒を撃ばらひ
ぬと。實事虚談うちまぜて。今朝の僥幸の功を負きて説誇る詞もいまだ果ざる
折から又ぞの河原の横路より。赶蒐来る勁敵あり。是則別人ならず犬山道節忠
與ハ。剛才あの地の閑戰に主を喪ひて走り来ぬる馬を捕駐てうち乗る者甲て倶に
三騎なる左に荒川太郎一郎清英あり右に印東小六明相あり。隊の兵ハ一千五六百
名一隊に做して。前後を乱さず。魚鱗鶴翼に相備て。群る虎の谷を下りて羊を
逐へる威勢。振然四下に響く武者聲尖鋭く。逢し定正背るを見せて。往る正月
高畷にて。你が頭甲を射て落して。舊君の讐を復まゐらせ。いまだ首級を捕ざ

あく。盡きぬ足るわが飽くとせざり。煉馬の舊臣武藏の豪傑今い里見の防禦使ゑ。犬山道節金碗忠與ゑぞ。亡れいせ。返せくと。唱れい散馬氏怕ゑく定正いゆ。憲儀廣原逮頼后綱數世も俱ふ吐嗟とぐる。胸を洗せる再度の勁敵免ゑぐもゆ。ゆられい殘兵四百五六十名。找めて路と斷窒ぞ。敵を河原へ出ぞ。一要時い防ぞ戰へぐも。印東明相荒川清英真先ふ馬と馳入れて。鎗めて敵を刺仆ぞ。武勇ふ傲ふ其隊の雄兵吆と嘩て。二七三十一ふ駈敗ゆ又數を乱せい然らでも餓ゆる士卒們い勁敵ふ殺頽されて。或い痍を負ひ命と須ー殘ゆ夙く逃亡て。隊斑ふゆーゆい數世い印東小六ふ數られ又白峯廣原と信城逮頼い道節清英ふ數られけゆ。開ゆ中ふ獨箕田后綱い數ヶ所の痛痍を負ゆゆ。只定正と一歩も遠く落さえと思ゆゆ。近習の壮佼両三名と俱ふ踏止ゆ血戰ーて。竟ふ一騎も免ゆ者ゆ。乱軍の中ふ皆戰死ゆて。人ふ臣ゆる義と失ぞ。敵ゆゆゆもの人ゆゆそ。道節い是を咎ふけゆ。然いとそ定正と漏ぞ。ふゆふゆ。暮初ゆ路の高紀を覆ゆて。明相清英と俱ふ馬を憩へも。あへぞ鞭と鳴ゆー隊兵を駈て。那里ぞもと新ふゆける。小程ふ扇谷定正い大石憲儀と俱ふ主從二騎僅ふ從ふ近習三名と左右ふ立せゆ津と索ぞふ東弓矢口と投へ。ゆく程ふ赶蒐ふ荒川清英印東明相二騎の頭人隊兵と找めて。跡馬と人馬の脚响近つぞ。免ゆ。ゆもゆゆ。ゆれい定正ふ相從ふ三個の近習ゆ已とゆ。ゆ返ー相逆つく。防ぞ戰ふ敗と見る程ふ怯れ。ゆ傳ゆ。ゆ潛ゆ入ゆ。逃亡けゆ。明相清英是を見て。定正今い沒脚解ぞふ捕ふせんと。馬を並べて。連競。那時遅ー。這時速ー。那取竹の藪屏と。内ゆゆ。拓地と推倒ー。顕れい援助の隊長後ゆ續く雄兵四五百又強く隊を建固めて。鎗砲薙ゆ發出。銃响烈ーかりけれい。明相清英士卒と制めて。敢叩ふ戰ゆ。當下件の隊長い今竹藪ふ逃入ー。定正の近習三名と逃ーも遣ゆ。數を捕ゆ。鎗の尖頭ふ串ー。其首

河崎河原ホ
道節大ホ
助友と戦ふ
道節

とけとも

級を振棄て敵に向ひて喚るかう追隊の壯傲を惴り合せを我ハ人道灌の密山
意に因て隊の兵を引て遠地方に走る巨田薪六郎助友と名告も
果ぬその折に道節馬を走らせ来り原来助友どもこそ那奴ハ荒芽山の宿怨あり。
先那奴より敷に捕ぶ竟に定正を漏ーやせん印東荒川躊躇ふとうい兵毎
蒐れと焦燥ぶ明相清英血氣の衆紅羨りぬと心も果ぶ入乱れて戰ひけり
正に是老龍虎魁雌雄と爭ふ豈九庸の鬪戰るんや一場の大殺思へべ。
然ば足曳の山も是ぶ為に鳴動ーて群獸走り勇魚取る海も是ぶ為に風燥
ぶて鮮血も流れ屍の段ハ尚長やらぬ。五巻中てんまぐ足らぬ腹稿あまりあ
るとも又三巻を増て局を結ん江湖上の諸看官這両雄の勝負を知まく
欲ぶば又巻を更めて且下の回に解分ると聽れか。

南總里見八犬傳第九輯巻之四十五終

○八犬傳第九輯下帙下編之中書 西刊剞工匠目次

出像畫工　柳川重信

淨書筆工

巻之四十一　谷金川
巻之四十二　高谷熊五郎

剞劂

巻之四十三　澤金次郎
巻之四十四　仝
巻之四十五　高谷熊五郎

○第百七十六回以下第百八十勝回回外剰筆
首巻全部總目録八犬士畧傳姓名目次共三四巻近日出来

著作堂一夕話 隨筆 大本 三卷 近刻

菅聖廟御傳記 曲亭主人舊作 北尾紅翠齋画 五卷 近刻

南總里見八犬傳 共百零一冊 並製本 御誂 鳳皮紙揚箱入共出来

本編一百八十勝回結局剞筆なれど一百冊わりて全部ふ成りしかを般八卷ふいへども先彫刻成る所の五卷を發販致しこの餘三卷も推續出板刷送有るまでくれは是より年々毎集拵出しいるる出来ふ成ん事度き希ふ

板元文溪堂敬白

○家傳神女湯 一包代百銅 此人ちのみわふ婦人ちのみ子ふ乳出ぬ時用ひその功神の如し

○精製奇應丸 某稚をそこなひ癇癪ふ成りて泣やまず夜ふ入ては啼ふ加ふ夜ふ入てもとてその功神の如し 一包代銀弐匁 中包代五十 小包代五十文

○熊胆黒丸子 一包代五十 某のこの汁をもつて洗ふ時は目くらくのごとくなれども真制なり

○婦人つゞ虫の妙薬 一包代六十四文 つゞ虫ハ陰ふ入て用ひけるものなり

制製薬本舗 四ツ谷ちのこの町 千日谷の上 瀧澤氏

弘所 江戸ふ阪田町中坂下南側中程 たゞ沢氏

小兒主藥

玉匱保赤圓 一名 丸めんそくかんそ

凡養小兒宜戒酒肉油膩偏生病生冷硬物涼水漿不與自無痳癖病といへども然といへども小兒を養の乳母豈如斯の敬を保ぎ者さ世間の両親の小兒を電愛のあまり深けまでもあまり養ふ飲食を節朝暮の衣類寒暑の時候その程々を宜くもるるの稀なりそもく赤兒の初生より実ふ親ふの丹誠わふ無病延命の道をとまべけんや夫小兒の病ハ軽しといへども更ふ油断せのへ小兒の成長ふ者ふ心得ん是非ふ病と捨物ふ如くるふ慈悲ふ乏ふ但其歎ハきらといへ唯一向ふ定まるのふ中ふ痳の病も胎毒も症を変ぜ種々ある病とあり果ハ癈人とあらく類ひを夫小兒の煩ふ諸病多くとの小どもの発ふ原病と捨物ふ如くるふ慈悲ふ乏ふ但其歎ハきらといへ毒を保でわざ頓て夭死の人多ハ古ふ手ゞ家数十代医業をそ子孫ふ傳え家傳の經験尤多り其中ふ一も小兒を療治ふ成専一ふ一奇方妙薬丹念なり別てふの保赤圓を萬金玉匱の良劑ふ小兒の藥王ふのうふ一倭名ゞ昔ふ小兒の藥と名号りの諸方ハ多く有經ふれば亦とて此かんの業も同ふ類ひの丸業ふ一くんと偏屈ふ成りて唯當座を凌ぐ丸散を例も合業ふ一ん丸ふ其の妙業わふ一ふ成知ふ召ぎる方さふハ最ふ一きん事ふ実ふ以て其の保赤圓を門小兒さふ古の病ひふ依て両親の辛苦ふ脳ふ一ふ成ふ一ふ海内幾億万

の小児を憐まゝ真元の氣を補養して漸々ふ胎毒を下し蟲を平治物驚き氣止き乳根を強くし成長の後記臆をよくもる多疑ひあし元来無病延命あるべきめんと思ふ大願を発して先祖の代より當今予にいたるまで古く世上ふ知らるる此妙薬我猶すゝ普くひろめんとて効能のあるすゝ效告はいくもる多とハありぬ必名も利欲のためふもる賣薬と賤めるハ小児の病の苦痛を救ひ壯健長壽の喜悦を與えるひ給ふ——

主治 ○きやうふう○えかん○たいどく○そうさう○はく○む——○ひきつけ○がんびやう

大畧 此外の諸症小児の万病に——

武州埼玉郡加須町

御免 製藥所 小兒科 大和氏門司法橋精製

弘所			
京都堺町六角下ル 吉野屋勘兵衛	江戸本町三丁目 近江屋茂兵衛	江戸室町三丁目 鉄屋八右衛門	江戸本郷二丁目 太田屋武兵衛
大坂本町三丁目 近江屋忠兵衛	江戸小網町二丁目 丸屋喜作	江戸横山町三丁目 松本屋長藏	江戸伊勢町 万屋八郎兵衛
江戸傳馬町三丁目 丁子屋平兵衛	大坂江戸堀 播磨屋弥七	奥州白川 松坂屋五郎左衛門	常州水戸下町 伊勢屋長左衛門
大坂堺筋長堀橋 平野屋佐吉	信州善光寺 高田屋茂兵衛	上州高崎 金屋與四郎	相州小田原 能沢屋重兵衛
京都東洞院御上ル町 萬屋茂兵衛	野州宇都宮 井桁屋利左衛門	江州彦根 西村市左衛門	武州川越 小松屋重左衛門

○古茅根仙女香一包四十八文○黒油美玄香同江戸長橋南詰ゑ町坂本氏

○金匱救命丸江戸林氏製 弘所 江戸 小伝馬町三丁目丁子屋平兵衛 元浜田町中橋ゑ元屋清右衛門

天保十二年辛丑春正月吉日發行

京都 河内屋藤四郎

同 大文字屋仙藏

大阪 河内屋太助

同 河内屋直助

同 河内屋茂兵衛

江戸小傳馬町三丁目 丁子屋平兵衛板

發販
書行